

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 163 集

まきうち  
牧内第 1 遺跡 (一次～三次調査)

Makiuti 1 Site

東九州自動車道 (都農～西都間) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 55

2007

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第163集  
『牧内第1遺跡(一次～三次調査)』正誤表

ページ・図番号	誤	正
p86 第93図	715	716-1
p86 第93図	716	716-2
p86 右段1行目	715は	716-1は
p86 右段4行目	716は	716-2は

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 163 集

まきうち  
牧内第 1 遺跡 (一次～三次調査)

Makiuti 1 Site

東九州自動車道 (都農～西都間) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 55

2007

宮崎県埋蔵文化財センター



牧内第1遺跡調査区と東九州自動車道路線



牧内第1遺跡上空より西都市街方向をのぞむ



牧内第1遺跡上空より日向灘方向をのぞむ



牧内第1遺跡調査区俯瞰（写真上が北）



牧内第1遺跡A区俯瞰（Ⅶ層上面）



- 上 牧内第1遺跡C区俯瞰  
(Ⅷ層上面)
- 中 牧内第1遺跡D区北半俯瞰  
(Ⅶ層上面)
- 下 牧内第1遺跡D区南半俯瞰  
(Ⅶ層上面)





土層堆積 (C区)



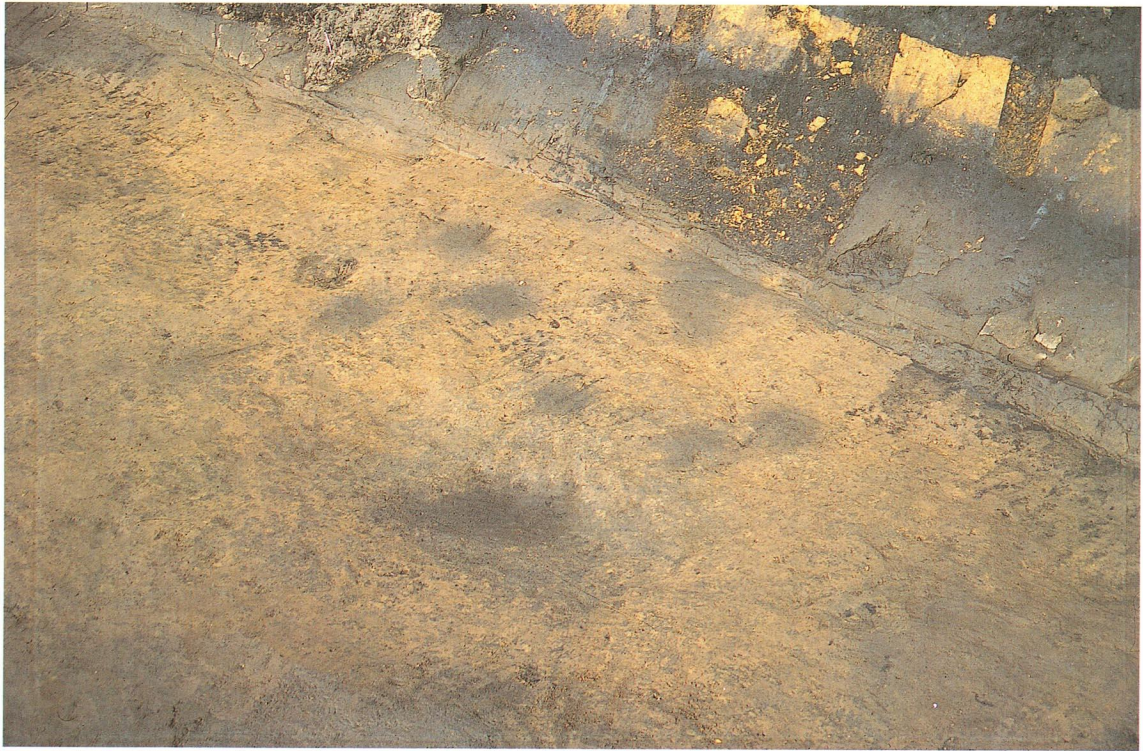
AT 下位 25%調査 (D区南半)



Ⅶ層礫・石器出土状況（D区北半）



Ⅸ層石器出土状況（A区）



環状配列ピット群1検出 (C区)



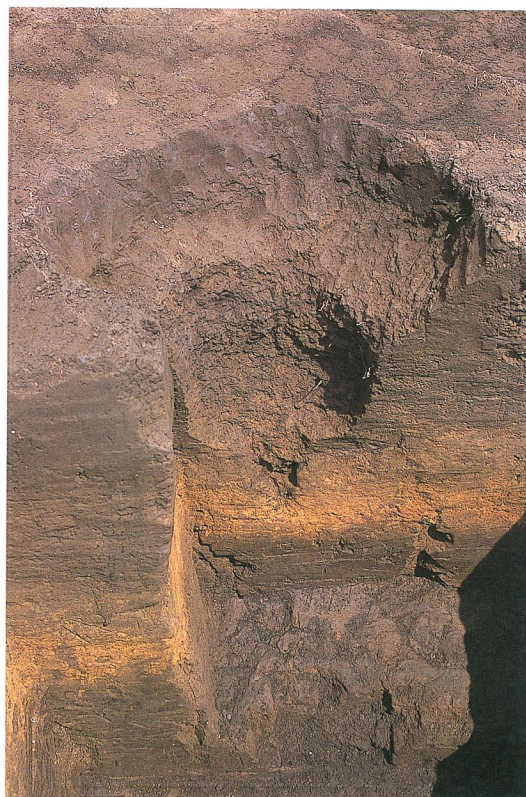
環状配列ピット群1完掘 (C区)



ピット群 (A区南側)



ピット群 (A区北側)

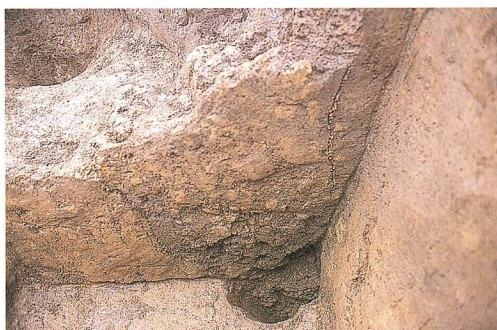


左上 A区SC526埋土  
左下 D区SC809埋土

右上 A区SC406埋土  
右下 D区SC809完掘



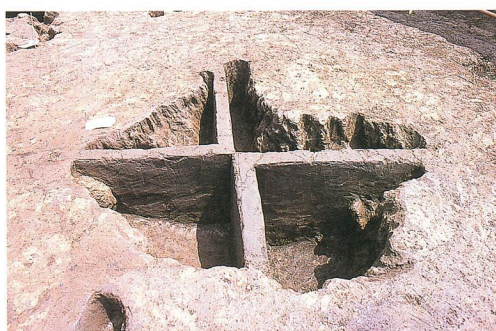
集中して検出された二段掘土坑 (A区)



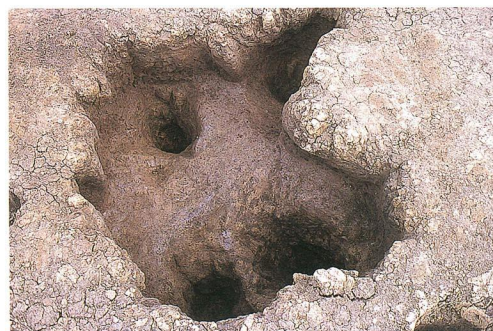
二段掘土坑埋土中のATブロック (A区)



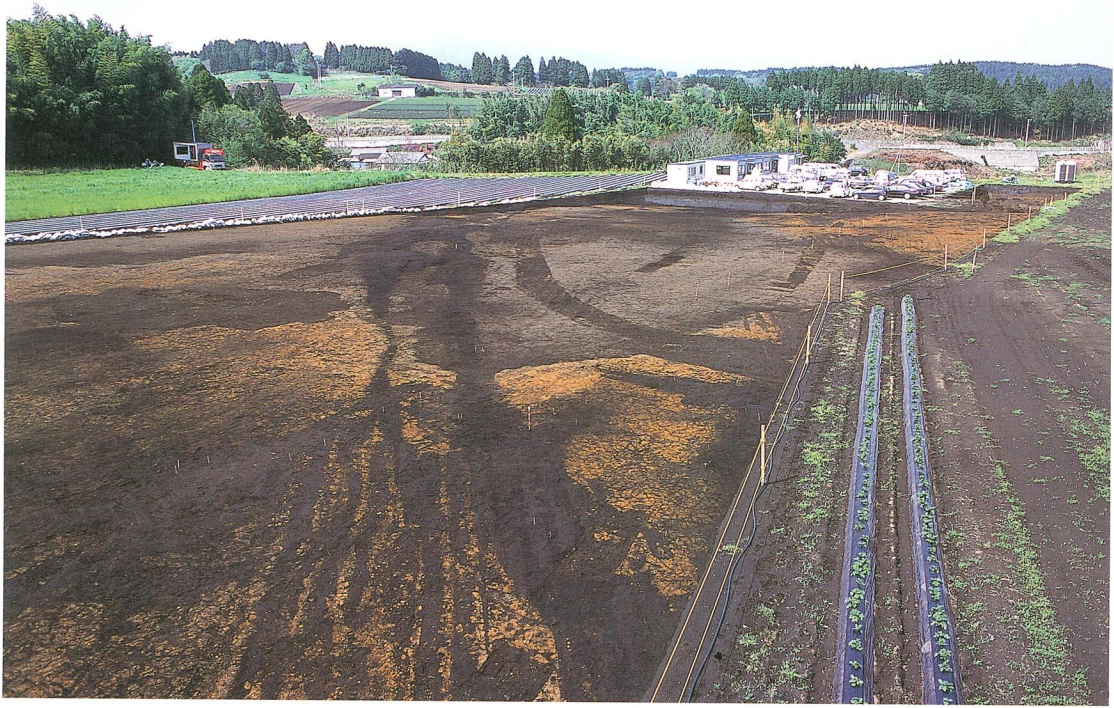
A区 SC544 完掘



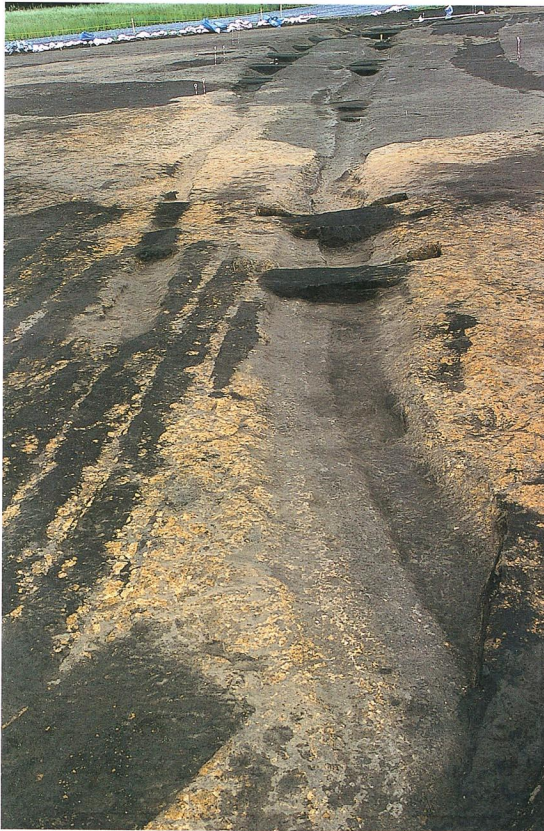
A区 SC462 埋土



A区 SC462 完掘



台地を横切る道路状遺構の検出 (A区)



削平の進んでいた道路状遺構 (A区)



A区 SG202 埋土



A区 SG202 埋土



牧内Ⅱ期の石器群



牧内Ⅲ期の石器群





牧内IV期の瀬戸内技法関連資料



牧内V期の瀬戸内技法関連資料



牧内第1遺跡C区の旧石器時代の敲石

## 序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成 11 年度から実施しております。本書はその発掘調査報告書であります。

本書に掲載した牧内第 1 遺跡（一次～三次調査）は、平成 12 年度から平成 15 年度にかけて発掘調査を行い、後期旧石器時代における礫群や、縄文時代早期における多数の土坑などの遺構とともに、旧石器時代を中心とした多数の遺物を確認する事ができました。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びにご指導・ご助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成 19 年 8 月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所 長 清野 勉

## 例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した児湯郡高鍋町所在の牧内第1遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団の依頼により宮崎県教育委員会が調査主体になり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社となったが、本報告書中では日本道路公団として記載する。
- 3 現地での実測・写真撮影等の記録は、松田清孝、山下健一、崎田一郎、加藤学、成相景子、日高敬子、松元一浩、原田茂樹、戌亥浩志が行った。

本書で使用した遺物実測図は重留康宏、藤木聡が行った他、整理作業員が補助した。  
また、本書で使用した遺物写真は崎田一郎、今塩屋毅行が行った。
- 4 自然科学分析は、(株)古環境研究所に委託した。また、一部石器実測を(株)パスコに委託した。空中写真については、(株)九州航空および(有)スカイサーベイに委託した。
- 5 土層断面及び土器の色調については、『新版標準土色帖』に拠った。
- 6 石材同定は、松田が行った。
- 7 本書に使用した地図は国土地理院発行の2万5千分の1図をもとに、遺跡周辺地形図等は、日本道路公団宮崎工事事務所から提供の1000分の1図をもとに作成した。
- 8 本書で使用している国土座標は、旧平面直角座標系Ⅱ（日本測地系）による。
- 9 整理作業は埋蔵文化財センターで行い、図面の作成・遺物実測・トレースは、整理作業員の協力を得た。
- 10 本書に使用した方位は、座標北である。また、レベルは、海拔絶対高である。
- 11 本書で用いた岩石名は、倉永英季編2001「木脇遺跡（旧石器時代～弥生時代編）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第43集 宮崎県埋蔵文化財センター p 69－72に依拠している。
- 12 本書の執筆・編集は、小山、重留、藤木、松田が行った。執筆分担は目次に記している。
- 13 出土遺物、その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

## 凡 例

1 遺構の略号は次のとおりとする。

S C 土坑    S G 道路状遺構    S I 集石遺構および礫群

2 層序（鍵層）については以下の略号を用いた。

K-Ah（鬼界アカホヤ火山灰）    Kr-Kb（小林軽石を含む褐色ローム）

AT-Tn（始良 Tn 火山灰）        A-Fm（始良深港）

Kr-Aw（霧島アワオコシ）    Kr-Iw（霧島イワオコシ）

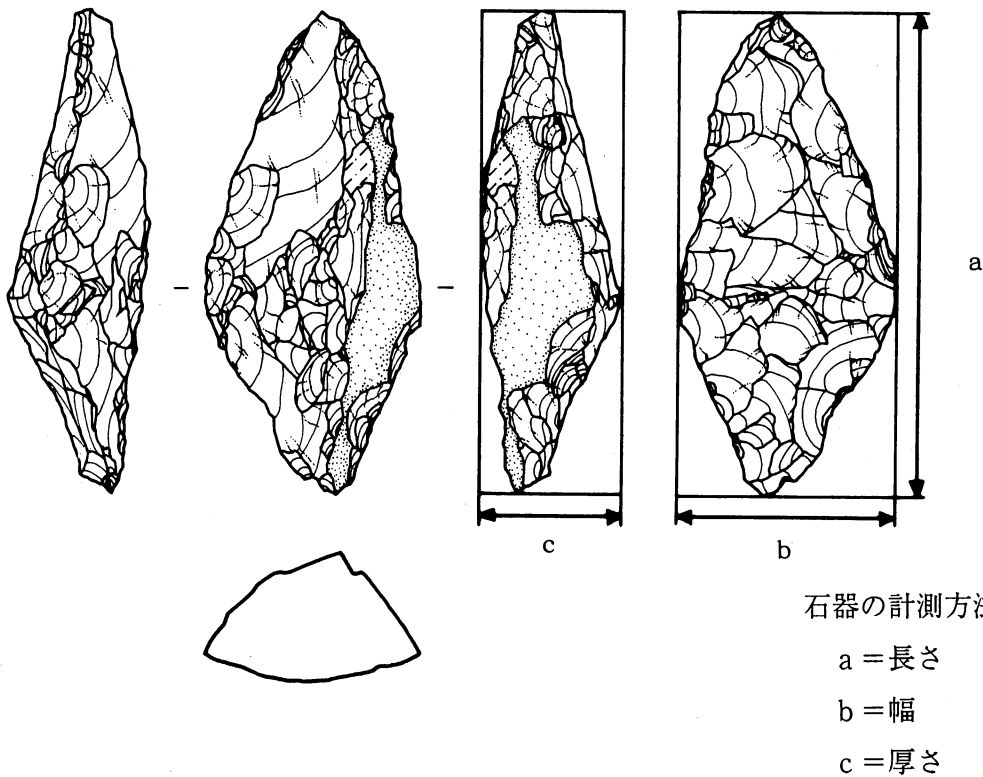
2 挿図の縮尺は次のとおりとする。

遺物実測図・・・・・・ 1/1    1/2    遺構実測図・・・・・・ 1/100    1/30    土層断面図・・・・・・

1/40    ※以上を基本とするが、これ以外のものもある。

3 石器計測表および観察表の計測値は、下記の計測方法に拠った。単位は、cm、gである。

### [石器計測方法]



# 本文目次

## 第I章 はじめに

- 第1節 調査に至る経緯 (松田・小山) . . . 1
- 第2節 調査の組織 (小山・重留) . . . 2

## 第II章 遺跡の環境

- 第1節 地理的環境 (小山) . . . . . 3
- 第2節 歴史的環境 (小山・重留) . . . . . 3
- 第3節 基本層序 (松田) . . . . . 5

## 第III章 調査の経過と方針

- 第1節 確認調査の概要 (松田) . . . . . 6
- 第2節 発掘調査の方法 (松田) . . . . . 6
- 第3節 整理作業および報告書作成 (重留)  
. . . . . 9

## 第IV章 調査の記録

- 第1節 旧石器時代 (A区) (松田・藤木)  
. . . . . 11
- 第2節 旧石器時代 (C区) (松田・藤木)  
. . . . . 28
- 第3節 旧石器時代 (D区) (松田・藤木)  
. . . . . 56
- 第4節 縄文時代 (松田・重留) . . . . . 79
- 第5節 その他の時代 (重留・藤木) . . . . . 88

## 第V章 自然科学分析

- 第1節 牧内第1遺跡の土層とテフラ . . . 136
- 第2節 牧内第1遺跡における放射性炭素年代測定 . . . . . 142
- 第3節 牧内第1遺跡における植物珪酸体分析 . . . . . 143
- 第4節 三次調査における放射性炭素年代測定 . . . . . 152

## 第VI章 成果と課題

- 第1節 旧石器時代 (松田・藤木) . . . 153

- 第2節 縄文時代 (松田・重留) . . . . . 156
- 第3節 弥生時代の牧内台地 (藤木) . . . 157
- 第4節 高鍋藩市ノ山牧の可能性 (藤木) . . . . . 157

## 挿図目次

- 第1図 牧内第1遺跡調査範囲 . . . . . 1
- 第2図 東九州自動車道関連遺跡位置図 . . . 4
- 第3図 牧内第1遺跡基本層序 . . . . . 5
- 第4図 牧内第1遺跡グリッド配置図 . . . . . 8
- 第5図 A区IVb層コンター . . . . . 12
- 第6図 A区遺物分布図 (I~IIIa層) . . . . . 12
- 第7図 A区遺物分布図 (IV層) . . . . . 12
- 第8図 A区遺物分布図 (V層) . . . . . 12
- 第9図 A区遺物分布図 (IVa~IVc層) . . . . . 13
- 第10図 A区遺物分布図 (VII層) . . . . . 13
- 第11図 A区遺物分布図 (VIIIa層) . . . . . 13
- 第12図 A区遺物分布図 (IX層) . . . . . 13
- 第13図 A区出土旧石器遺物実測図 (1) . . . 15
- 第14図 A区出土旧石器遺物実測図 (2) . . . 16
- 第15図 A区出土旧石器遺物実測図 (3) . . . 17
- 第16図 A区出土旧石器遺物実測図 (4) . . . 18
- 第17図 A区出土旧石器遺物実測図 (5) . . . 19
- 第18図 A区出土旧石器遺物実測図 (6) . . . 20
- 第19図 A区出土旧石器遺物実測図 (7) . . . 21
- 第20図 A区出土旧石器遺物実測図 (8) . . . 22
- 第21図 A区出土旧石器遺物実測図 (9) . . . 23
- 第22図 A区出土旧石器遺物実測図 (10) . . . 24
- 第23図 A区出土旧石器遺物実測図 (11) . . . 25
- 第24図 A区出土旧石器遺物実測図 (12) . . . 26
- 第25図 A区出土旧石器遺物実測図 (13) . . . 27
- 第26図 C区IVb層コンター (トレンチ配置図)  
. . . . . 29
- 第27図 C区IVb層コンター . . . . . 29
- 第28図 C区遺物分布図 . . . . . 29
- 第29図 C区遺物分布図 . . . . . 29
- 第30図 C区出土旧石器遺物実測図 (1) . . . 30
- 第31図 C区出土旧石器遺物実測図 (2) . . . 31
- 第32図 C区出土旧石器遺物実測図 (3) . . . 32
- 第33図 C区出土旧石器遺物実測図 (4) . . . 33

第34図	C区出土旧石器遺物実測図(5)・・・	34
第35図	C区出土旧石器遺物実測図(6)・・・	35
第36図	C区出土旧石器遺物実測図(7)・・・	36
第37図	C区出土旧石器遺物実測図(8)・・・	37
第38図	C区出土旧石器遺物実測図(9)・・・	38
第39図	C区出土旧石器遺物実測図(10)・・・	40
第40図	C区出土旧石器遺物実測図(11)・・・	41
第41図	C区出土旧石器遺物実測図(12)・・・	42
第42図	C区出土旧石器遺物実測図(13)・・・	43
第43図	C区出土旧石器遺物実測図(14)・・・	44
第44図	C区出土旧石器遺物実測図(15)・・・	45
第45図	C区出土旧石器遺物実測図(16)・・・	46
第46図	C区出土旧石器遺物実測図(17)・・・	47
第47図	C区出土旧石器遺物実測図(18)・・・	48
第48図	C区出土旧石器遺物実測図(19)・・・	49
第49図	C区出土旧石器遺物実測図(20)・・・	50
第50図	C区出土旧石器遺物実測図(21)・・・	51
第51図	C区出土旧石器遺物実測図(22)・・・	52
第52図	C区出土旧石器遺物実測図(23)・・・	53
第53図	C区出土旧石器遺物実測図(24)・・・	54
第54図	C区出土旧石器遺物実測図(25)・・・	55
第55図	D区検出礫群実測図(1)・・・	57
第56図	D区検出礫群実測図(2)・・・	58
第57図	D区遺物分布図(V層)・・・	59
第58図	D区遺物分布図(VI層)・・・	59
第59図	D区IVb層コンター・・・	59
第60図	D区遺物分布図(VI・VII層)・・・	59
第61図	D区遺物分布図(VII層)・・・	60
第62図	D区遺物分布図(VIIIa層)・・・	60
第63図	D区遺物分布図(VIIIb層)・・・	60
第64図	D区IX層コンター・・・	60
第65図	D区遺物分布図(IX層)・・・	61
第66図	D区遺物分布図(X層)・・・	61
第67図	D区礫分布図(VI～VIII層)・・・	61
第68図	D区礫分布図・・・	61
第69図	D区出土旧石器遺物実測図(1)・・・	62
第70図	D区出土旧石器遺物実測図(2)・・・	63
第71図	D区出土旧石器遺物実測図(3)・・・	64
第72図	D区出土旧石器遺物実測図(4)・・・	65
第73図	D区出土旧石器遺物実測図(5)・・・	66
第74図	D区出土旧石器遺物実測図(6)・・・	67
第75図	D区出土旧石器遺物実測図(7)・・・	68
第76図	D区出土旧石器遺物実測図(8)・・・	69
第77図	D区出土旧石器遺物実測図(9)・・・	70
第78図	D区出土旧石器遺物実測図(10)・・・	71
第79図	D区出土旧石器遺物実測図(11)・・・	72
第80図	D区出土旧石器遺物実測図(12)・・・	73
第81図	D区出土旧石器遺物実測図(13)・・・	74
第82図	D区出土旧石器遺物実測図(14)・・・	75
第83図	D区出土旧石器遺物実測図(15)・・・	76
第84図	D区出土旧石器遺物実測図(16)・・・	77
第85図	D区出土旧石器遺物実測図(17)・・・	78
第86図	牧内第1遺跡ピット検出範囲・・・	79
第87図	A区2段掘土坑集中部分実測図 ほか ・・・・・・・・・・・・・・・・	80
第88図	SC219、SC462、SC367 実測図・・・	81
第89図	A区環状配列ピット群 ほか・・・	82
第90図	環状配列ピット群ピット断面図・・・	83
第91図	C区1号環状配列ピット群平面図 ほか ・・・・・・・・・・・・・・・・	84
第92図	C区2号環状配列ピット群平面図 ほか ・・・・・・・・・・・・・・・・	85
第93図	A区出土縄文土器実測図・・・	86
第94図	縄文時代石器実測図・・・	87
第95図	A区道路状遺構検出状況図・・・	89
第96図	道路状遺構断面図・・・・・・・・	90
第97図	時期不明集石遺構・・・・・・・・	91
第98図	弥生時代以降の遺物実測図・・・	91
第99図	A区O-5グリッドの土層柱状図・・・	140
第100図	A区N-8グリッドの土層柱状図・・・	140
第101図	A区219号土坑の土層柱状図・・・	141
第102図	A区O-5グリッドの火山ガラス比ダイヤ グラム・・・・・・・・	141
第103図	N10地点における植物珪酸体分析結果 ・・・・・・・・	149
第104図	M7地点における植物珪酸体分析結果 ・・・・・・・・	150
第105図	牧内第1遺跡と周辺遺跡の高低差 ・・・・・・・・	156



## 表目次

第1表	石器計測表 (1)	92
第2表	石器計測表 (2)	93
第3表	石器計測表 (3)	94
第4表	石器計測表 (4)	95
第5表	石器計測表 (5)	96
第6表	石器計測表 (6)	97
第7表	石器計測表 (7)	98
第8表	石器計測表 (8)	99
第9表	石器計測表 (9)	100
第10表	石器計測表 (10)	101
第11表	石器計測表 (11)	102
第12表	石器計測表 (12)	103
第13表	石器計測表 (13)	104
第14表	石器計測表 (14)	105
第15表	石器計測表 (15)	106
第16表	石器計測表 (16)	107
第17表	石器計測表 (17)	108
第18表	石器計測表 (18)	109
第19表	石器計測表 (19)	110
第20表	石器計測表 (20)	111
第21表	石器計測表 (21)	112
第22表	石器計測表 (22)	113
第23表	石器計測表 (23)	114
第24表	石器計測表 (24)	115
第25表	石器計測表 (25)	116
第26表	石器計測表 (26)	117
第27表	石器計測表 (27)	118
第28表	石器計測表 (28)	119
第29表	石器計測表 (29)	120
第30表	石器計測表 (30)	121
第31表	石器計測表 (31)	122
第32表	石器計測表 (32)	123
第33表	石器計測表 (33)	124
第34表	石器計測表 (34)	125
第35表	石器計測表 (35)	126
第36表	石器計測表 (36)	127
第37表	石器計測表 (37)	128
第38表	石器計測表 (38)	129
第39表	石器計測表 (39)	130

第40表	石器計測表 (40)	131
第41表	石器計測表 (41)	132
第42表	石器計測表 (42)	133
第43表	石器計測表 (43)	134
第44表	石器計測表 (44)	135
第45表	A区O-5グリッドの火山ガラス比分析結果	139
第46表	A区における屈折率測定結果	139
第47表	牧内第1遺跡における植物珪酸体分析結果 (1)	147
第48表	牧内第1遺跡における植物珪酸体分析結果 (2)	148

## 図版目次

### 巻頭図版

巻頭図版 1	牧内第1遺跡調査区と東九州自動車道路線	i
巻頭図版 2	牧内第1遺跡上空より西都市街方向をのぞむ	ii
巻頭図版 3	牧内第1遺跡上空より日向灘方向をのぞむ	ii
巻頭図版 4	牧内第1遺跡調査区俯瞰 (写真上が北)	iii
巻頭図版 5	牧内第1遺跡A区俯瞰 (VII層上面)	iv
巻頭図版 6	牧内第1遺跡C区俯瞰 (VIII層上面)	v
巻頭図版 7	牧内第1遺跡D区北半俯瞰 (VII層上面)	v
巻頭図版 8	牧内第1遺跡D区南半俯瞰 (VII層上面)	v
巻頭図版 9	土層堆積 (C区)	vi
巻頭図版 10	AT下位25%調査 (D区南半)	vi
巻頭図版 11	VII層礫・石器出土状況 (D区北半)	vii
巻頭図版 12	IX層石器出土状況 (A区)	vii
巻頭図版 13	環状配列ピット群1検出 (C区)	viii
巻頭図版 14	環状配列ピット群1完掘 (C区)	viii

巻頭図版 15	ピット群 (A 区南側) . . . . .	ix
巻頭図版 16	ピット群 (A 区北側) . . . . .	ix
巻頭図版 17	A 区 SC526 埋土 . . . . .	x
巻頭図版 18	A 区 SC406 埋土 . . . . .	x
巻頭図版 19	D 区 SC809 埋土 . . . . .	x
巻頭図版 20	D 区 SC809 完掘 . . . . .	x
巻頭図版 21	集中して検出された二段掘土坑 (A 区) . . . . .	x i
巻頭図版 22	二段掘土坑埋土中の AT ブロック (A 区) . . . . .	x i
巻頭図版 23	A 区 SC544 完掘 . . . . .	x i
巻頭図版 24	SC462 埋土 . . . . .	x i
巻頭図版 25	A 区 SC462 完掘 . . . . .	x i
巻頭図版 26	台地を横切る道路状遺構の検出 (A 区) . . . . .	x ii
巻頭図版 27	削平の進んでいた道路状遺構 (A 区) . . . . .	x ii
巻頭図版 28	A 区 SG202 埋土 . . . . .	x ii
巻頭図版 29	A 区 SG202 埋土 . . . . .	x ii
巻頭図版 30	牧内Ⅱ期の石器群 . . . . .	x iii
巻頭図版 31	牧内Ⅲ期の石器群 . . . . .	x iii
巻頭図版 32	牧内Ⅳ期の瀬戸内技法関連資料 . . . . .	x iv
巻頭図版 33	牧内Ⅴ期の瀬戸内技法関連資料 . . . . .	x v
巻頭図版 34	牧内第 1 遺跡 C 区の旧石器時代の敲石 . . . . .	x vi

巻末図版

巻末図版 35	A 区 R8 グリッド土層堆積 . . . . .	159
巻末図版 36	A 区 Q10 グリッドⅦ層石器出土状況 . . . . .	159
巻末図版 37	A 区 SI315 完掘 . . . . .	159
巻末図版 38	A 区 S3 グリッドⅤ層遺物出土状況 . . . . .	159
巻末図版 39	A 区 SC211 検出 . . . . .	159
巻末図版 40	A 区 SC211 完掘 . . . . .	159
巻末図版 41	A 区 SC219 検出 . . . . .	159
巻末図版 42	A 区 SC219 完掘 . . . . .	159
巻末図版 43	A 区 SC212 完掘 . . . . .	160
巻末図版 44	A 区 SC213 完掘 . . . . .	160

巻末図版 45	A 区 SC422・423・477 完掘 . . . . .	160
巻末図版 46	A 区 SC498～500・713 完掘 . . . . .	160
巻末図版 47	A 区 SC251・252 完掘 . . . . .	160
巻末図版 48	A 区 SC281・282 完掘 . . . . .	160
巻末図版 49	A 区 SC543・544・619・704～706 完掘 . . . . .	160
巻末図版 50	A 区 SC379・380・525～527 完掘 . . . . .	160
巻末図版 51	A 区 SC244 完掘 . . . . .	161
巻末図版 52	A 区 SZ247 検出 . . . . .	161
巻末図版 53	C 区土層堆積 . . . . .	161
巻末図版 54	C 区 SI119 検出 . . . . .	161
巻末図版 55	C 区 SI103 検出 . . . . .	161
巻末図版 56	C 区 SI104 検出 . . . . .	161
巻末図版 57	C 区 SI105 検出 . . . . .	161
巻末図版 58	C 区 SI131 検出 . . . . .	161
巻末図版 59	C 区 SI178 検出 . . . . .	162
巻末図版 60	C 区環状配列ピット群 3 (東より) . . . . .	162
巻末図版 61	C 区 SH 6 (環状配列ピット群 1 の一つ) . . . . .	162
巻末図版 62	C 区 SH 9 (環状配列ピット群 1 の一つ) . . . . .	162
巻末図版 63	D 区 B31 グリッド土層堆積 (Ⅳb 層以下) . . . . .	162
巻末図版 64	D 区 B34 グリッドⅨ・ⅩⅠ層遺物出土状況 . . . . .	162
巻末図版 65	D 区 A32 グリッドⅦ層礫・石器出土状況 . . . . .	162
巻末図版 66	D 区 B30 グリッドⅦ層礫・石器出土状況 . . . . .	163
巻末図版 67	D 区 C30 グリッドⅦ層礫・石器出土状況 . . . . .	163
巻末図版 68	D 区ニ 33 グリッドⅦ層礫・石器出土状況 (1) . . . . .	163
巻末図版 69	D 区ニ 33 グリッドⅦ層礫・石器出土状況 (2) . . . . .	163
巻末図版 70	D 区 SI835 検出 . . . . .	163
巻末図版 71	D 区 SI837 検出 . . . . .	163

卷末図版 72	D区 SI765 検出	163
卷末図版 73	D区 SI838 検出	163
卷末図版 74	D区南半IV b層上面検出	164
卷末図版 75	D区 SC748 完掘	164
卷末図版 76	D区 SC759 完掘	164
卷末図版 77	D区 SC756 完掘	164
卷末図版 78	D区 SC762 断面	164
卷末図版 79	D区 SC762 完掘	164
卷末図版 80	D区 SC753 完掘	164
卷末図版 81	D区 SC789 完掘	164
卷末図版 82	D区 SC805 完掘	165
卷末図版 83	D区 SC801 完掘	165
卷末図版 84	D区 SC802 断面	165
卷末図版 85	D区 SC802 完掘	165
卷末図版 86	D区 SC839 断面	165
卷末図版 87	D区 SC839 完掘	165
卷末図版 88	D区 SC830 完掘	165
卷末図版 89	D区 SC843 完掘	165
卷末図版 90	縄文時代草創期土器①	166
卷末図版 91	縄文時代草創期土器②	166
卷末図版 92	縄文時代石器	166
卷末図版 93	弥生時代以降の遺物	166

# 第 I 章 はじめに

## 第 1 節 調査に至る経緯

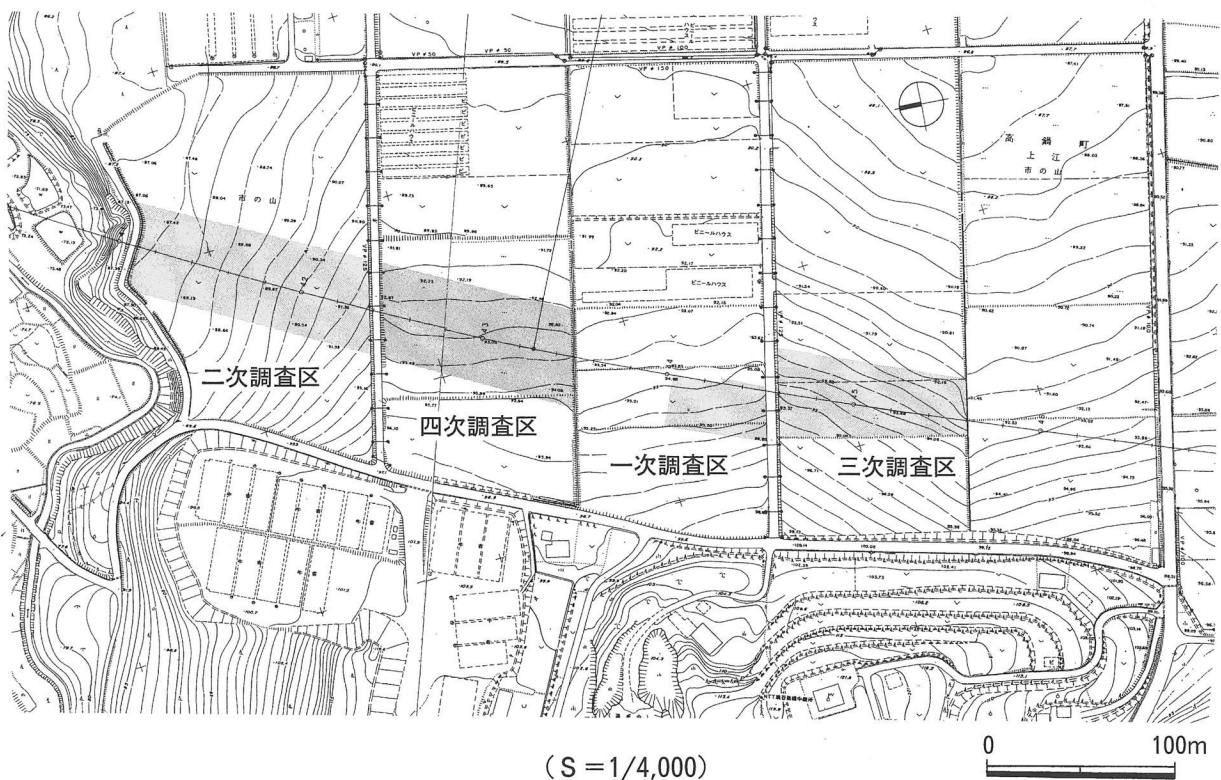
東九州自動車道(都農～西都間)は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月には整備計画路線となった。さらに、平成9年10月に建設大臣から日本道路公団へ施行命令が出され、公団では翌年の2月から事業に着手している。その間、県教育委員会では、平成6年度に延岡～西都間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施行によって影響が出る部分については、工事着手前に発掘調査を実施することになった。調査は、平成11年度から宮崎県埋蔵文化財センターで行っている。

本遺跡には、北からA～D区の4調査区を設定し、それぞれの調査区について確認調査を行ったが、用地買収等の関係で確認調査は複雑な工程となった。まず、平成12年8月にA区の確認調査を行い、後期旧石器時代の赤化礫や縄文時代草創期から早期のものと思われる円形プランのピッ

ト、縄文時代前期の石鏃を検出した。遺構・遺物の分布状況や旧地形の状況から、3,400㎡で本調査が必要と判断した。続いて平成12年10月にC区の確認調査を行い、AT上位で石器群と赤化礫を検出した。耕作による削平の範囲や土石流の範囲を除外し、2,400㎡で本調査が必要と判断した。平成13年2月に、D区で確認調査を行った結果、AT上位から石器ブロックや石器群を検出し、旧地形との関係や出土状況から、3,400㎡で本調査が必要と判断した。平成14年4月にはB区の確認調査を行い、AT上位から石器群を、Kr-Kb層からはシミ状のプランを検出した。確認調査の状況からB区の本調査必要面積を4,900㎡と判断した。

確認調査の結果を受け、周囲の耕作状況等も踏まえた結果、C、A、D、B区の順に、四次にわたる本調査を実施することとなった(第1図)。実際の本調査の調査期間は、以下に示すとおりである。

一次(C区)…平成12年11月6日～平成13年



第1図 牧内第1遺跡調査範囲

2月28日  
二次(A区)…平成13年3月1日～平成13年  
12月28日  
三次(D区)…平成14年1月10日～平成14年  
11月29日  
四次(B区)…平成14年9月9日～平成15年6  
月23日

なお、第四次調査分については、平成16年度  
に報告書が刊行されている。

## 第2節 調査の組織

牧内第1遺跡(一次～三次調査)の調査組織を  
次に示す。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長

矢野 剛(平成12・13年度)

米良 弘康(平成14・15年度)

宮園 淳一(平成16・17年度)

清野 勉(平成18・19年度)

副所長兼総務課長

菊池 茂仁(平成12・13年度)

大藪 和博(平成14～16年度)

副所長

加藤 悟郎(平成18・19年度)

副所長兼調査第二課長

岩永 哲夫(平成12年～18年度)

総務課長

宮越 尊(平成17～19年度)

総務係長

亀井 維子(平成12・13年度)

野邊 文博(平成14年度)

主幹兼総務係長

石川 恵史(平成15～17年度)

主幹兼総務担当リーダー

高山 正信(平成18・19年度)

調査第一課長兼調査第一係長

面高 哲郎(平成13年度)

調査第一課長

児玉 章則(平成14・15年度)

高山 富雄(平成16～18年度)

長津 宗重(平成19年度)

調査第一係長

谷口 武範(平成13～16年度)

主幹兼調査第一係長

長津 宗重(平成17年度)

主幹兼調査第一担当リーダー

長津 宗重(平成18年度)

副主幹兼調査第一担当リーダー

南中道 隆(平成19年度)

調査第二係長

長津 宗重(平成12～15年度)

主幹兼調査第二係長

長津 宗重(平成16年度)

主幹兼調査第二係長

菅付 和樹(平成17年度)

主幹兼調査第二担当リーダー

菅付 和樹(平成18・19年度)

調査担当(平成12～14年度)

調査第一係 主査 松田 清孝

調査員 松元 一浩

整理作業・報告書作成(平成14～19年度)

調査第一係 主査 松田 清孝

調査第一担当 主査 小山 博

(平成18年度)

主任主事 藤木 聡

(平成18・19年度)

主事 重留 康宏

(平成18・19年度)

調査指導

泉 拓良(京都大学)

小畑 弘己(熊本大学)

田崎 博之(愛媛大学)

広瀬 和雄(国立歴史民俗博物館)

本田 道輝(鹿児島大学)

柳沢 一男(宮崎大学)

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

牧内第1遺跡が位置する高鍋町は、九州山地の東側に広がる宮崎平野の北部に位置し、東は日向灘に面している。宮崎平野には顕著な段丘地形が発達しているが、本遺跡は新富町祇園原から畦原・三財原・追分、高鍋町市の山・中尾・牛牧にかけて広がる三財原段丘面の中西端にあたる。本遺跡の標高は約90mで、西方約70mには上位の茶臼原段丘面の段丘崖が迫っている。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡の所在する牧内は、昭和における開拓事業による畑作地帯としての発展を見てきた。しかし、周辺に「牧」のつく地名が見られるように、古くは軍馬等の放牧地として利用されていた。

以下、周辺遺跡の概略を述べる(第2図)。

#### 旧石器時代

旧石器時代の遺跡としては、持田中尾遺跡、妻道南遺跡が調査されている。持田中尾遺跡ではナイフ形石器・角錐状石器・搔器等が出土している。ナイフ形石器は、ホルンフェルス製の横長剥片を素材としたもので、瀬戸内技法との関連を伺わせるものである。妻道南遺跡では、ナイフ形石器・石核・剥片等が出土している。ナイフ形石器は日東産系黒曜石製で、大形(全長8.0cm)のものである。北牛牧第1遺跡では、AT直下から礫群が検出されている。

東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う発掘調査遺跡では、多くの遺跡で旧石器時代の石器が出土している。特に、東畦原第3遺跡、音明寺第2遺跡などでは、AT直下の黒色帯上部から、小形薄手の縦長剥片を用いたナイフ形石器が出土している。

#### 縄文時代

縄文時代に該当する遺跡としては、小並第1遺跡、牧内第2遺跡、音明寺第1遺跡、唐木戸第3遺跡などがあげられる。これらは、縄文時代早期に該当するが、これらの遺跡においては土器・石

器・遺構の偏在が看取される。将来的には、牧内を含む牛牧台地上において、拠点的なキャンプサイトと、そこから派生する狩猟採集エリアという、早期における人々の活動を、おぼろげながらも復元できる可能性がある。

いずれにせよ、積極的に遺構・遺物が残されるのは、上記で述べた縄文時代早期までである。弥生時代の遺物も僅かながら出土する事から、この時代においても、何かしらの活動が行われていた事は確かであろう。しかし、現段階においては旧石器時代や縄文時代のそれとは規模が小さいといわざるを得ない。ここに、生活活動(生業活動)と連動した土地利用の変化がうかがえる。

(参考・引用文献)

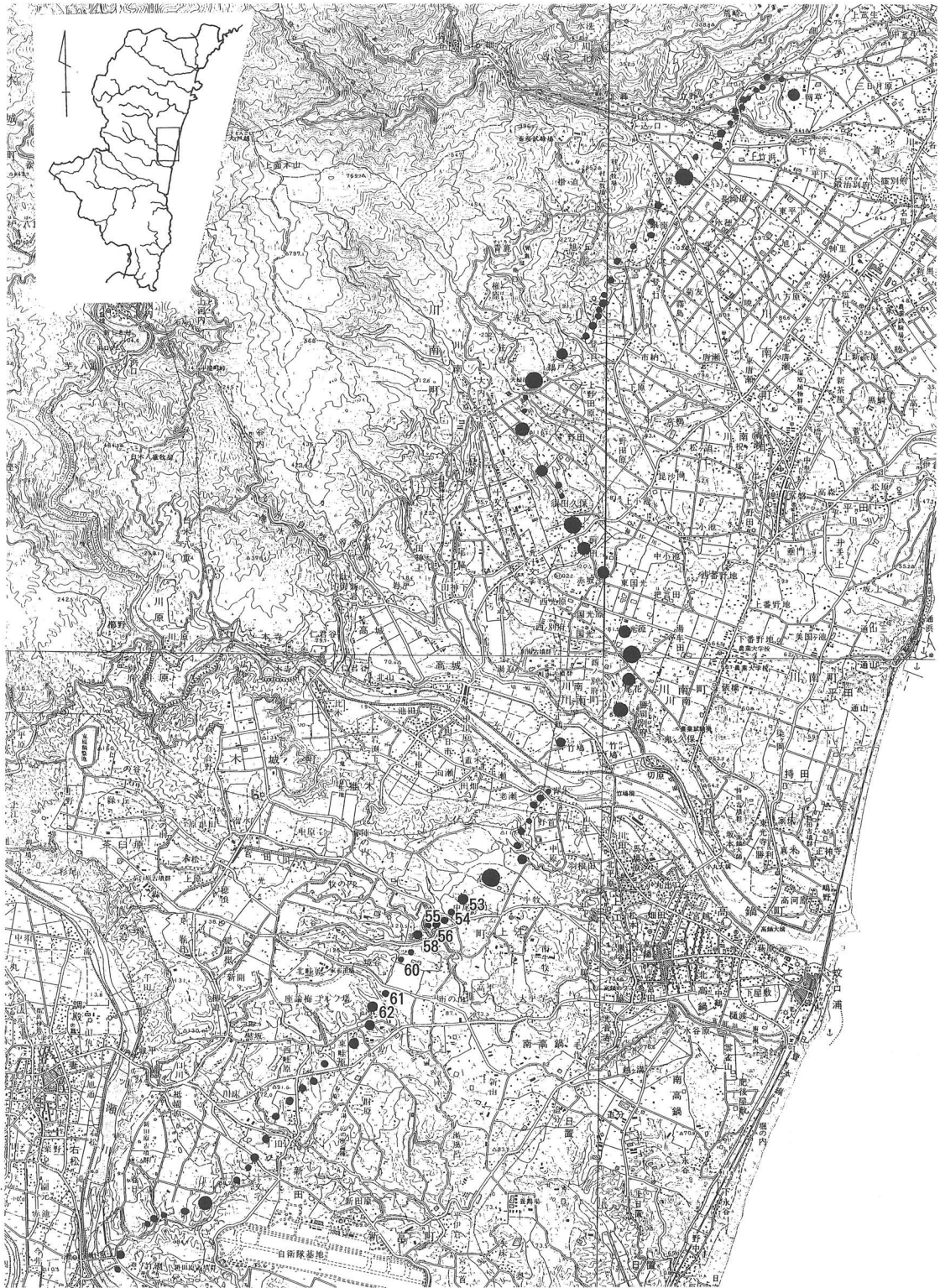
高鍋町教育委員会「妻道南遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』第4集 1986

同上「持田中尾遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』1982

同上「中尾・牛牧地区遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』1995

宮崎県埋蔵文化財センター「東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ・Ⅳ」2002・2003

宮崎県旧石器文化談話会「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66 2005



0 5 km

60 牧内第 1 遺跡	53 唐木戸第 1 遺跡	54 唐木戸第 2 遺跡	55 唐木戸第 3 遺跡
56 唐木戸第 4 遺跡	58 小並第 1 遺跡	61 牧内第 2 遺跡	62 音明寺第 1 遺跡

第 2 図 東九州自動車道関連遺跡位置図 (S=1/100,000)

### 第3節 基本層序

	I	表土 (耕作土)
クロボク	II	黒色土
Kr-Ah	IIIa	鬼界アカホヤ火山灰(Kr-Ah)
	IIIb	鬼界アカホヤ火山灰(Kr-Ah)下部 5mm以下のパミスを含む
MB0	IV	黒褐色ローム
ML1	V	暗褐色ローム
	VIa	小林軽石を含む褐色ローム上部 パミス少量
Kr-Kb	VIb	小林軽石を含む褐色ローム パミス多量
	VIc	小林軽石を含む褐色ローム下部 パミス少量
MB1	VII	暗褐色ローム
ML2	VIIa	斑状のシミを含む褐色ローム
AT	VIIb	始良Tn火山灰(AT)
MB2	IX	暗褐色ローム (白斑あり)
A-Fm	X	暗褐色ローム (始良深港)
MB3	X I	暗褐色ローム (白斑少量)
ML3	X II	暗赤褐色ローム
Kr-Aw	X III	アワオコシ
ML4	X IV	明褐色ローム
Kr-Iw	X V	イワオコシ
	X VI	明黄褐色ローム

第3図 牧内第1遺跡基本層序

本遺跡の基本層序を上図に示した。以下各層の特徴を述べる。I層は基本的に耕作土であるが、一部耕地整理による客土を含んでいる。II層の黒色土はクロボクである。耕地整理の影響をうけていない調査区の東側と旧地形の谷部にあたる部分に残っている傾向があったが、上部は耕作により削平されている。III層は鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)であり、火山ガラス主体のIII a層とパミス主体でやや固結している下部のIII b層に分けて記録した。層厚は平均でIII a層は約20cm、III b層は7cmほどである。やはり調査区の東側と旧地形の谷部にあたる部分に残っている傾向があった。IV層は黒褐色ローム(MB0)で長石の白斑を含み下位のV層にくらべ締まっている。V層は暗褐色ロームで上部から下部にかけて次第に明るく遷移しており柔らかく、層厚は平均で25cmほどである。VI層は霧島連山韓国岳を給源とする小林

軽石(Kr-Kb:15ka)を含む褐色ロームで暗褐色ブロックとパミスを含み、パミスの量でa、b、cの3層に区分した。層厚は平均でVI a層は5cm、VI b層は15cm、VI c層は5cmである。VII層(MB1)は暗褐色ロームで、A区～D区にかけて最も石器類の出土が多かった層であり、層厚は平均20cmである。VIII a層(ML2)は褐色ロームでATの風化層もしくは二次堆積層に相当し、径2～3cmの斑状の暗褐色～黒褐色のシミがあることが多く層厚は平均15cm～20cmである。VIII a層についてはローム化が進行しているため、調査区においてATの二次堆積層であるか否かを判断する材料が無く、同様の特徴のものをすべてVIII a層とした。VIII b層はAT(25ka)のうちローム化が進んでいない部分に用い、明黄褐色の部分为主体であるが、風化やローム化が若干進み色が暗く変色した部分に対しても、ATのざらざら感が残っている部分についてはVIII b層と記した。VIII b層は層厚平均20cmである。IX層～X I層についてはAT下位のいわゆる暗色帯に相当する部分であるが、詳細に観察すると中頃に若干パミスを多く含み色合いが上下の層より薄い部分があるので、それより上位についてIX層(MB2)、色合いの薄い部分をX層、それより下位をX I層(MB3)とした。X層は始良深港テフラ(A-Fm:26.5ka)に相当すると思われる。IX層、X層に関してはこのA-Fmと上位のATの影響で、石英、長石、パミス等の白斑が多く見られるが、X I層は白斑が少なくなる特徴がある。しかしこの3層を明瞭に区別することは難しく、X層が明瞭でない部分は暗色帯を3等分する形で記録した部分もある。3層とも層厚平均20cmである。X II層(ML3)は暗赤褐色ロームでX I層より粘性があり色合いが明るく層厚平均10cmほどである。X III層は霧島アワオコシテフラ(Kr-Aw)に相当し、0.5cm～1cmほどの暗赤褐色～黒褐色スコリアや岩片および赤褐色に風化したパミスを含み層厚平均7cmと薄くやや固結している。X IV層(ML4)は明褐色ロームで層厚平均15cmほどで、最大2cmの赤褐色～黄褐色に風化したパミスが下部ほど含まれるようになる。X V層は霧島イワオコシテフラ(Kr-Iw)に相当し、



明黄褐色～赤褐色に風化したパミス(最大2～3cm)およびスコリア、岩片を含み固く固結している。層厚は平均17cmほどである。XVI層はかなり粘土化が進んだロームで粘性が強い。これより下位には、始良岩戸テフラ(A-Iw)、阿蘇4テフラ(Aso-4)などの指標テフラが堆積していると予想されたが、重機によるトレンチ掘削では明瞭に確認された場所は無く、土石流によると思われる礫層と砂礫を含んだ粘土層が繰り返し認められた。これは、茶臼原段丘の段丘崖が近いためであり、A～D区に共通している。

### 第三章 調査の経過と方針

#### 第1節 確認調査の概要

##### 1 A区の確認調査

A区の確認調査を2回に分けて行った。平成12年8月7日～10日に西半分を行い、同12年10月2日～16日にかけてはC区の確認調査と並行して、残りの東半分の確認調査を行った。西半分については、作業員による手掘りのトレンチ調査を行い、東半分については重機を使用してのトレンチ調査を行った。トレンチを合わせて24箇所設定し、土層、遺構・遺物の有無を確認しながらAT層を目標に掘り下げた。その結果、石器を表採したほか、Ⅲa層(K-Ah)上面では赤化礫と石鏃が出土した。また、Ⅲa層では道路状遺構や環状ピット群を検出したほか、Ⅵb層(Kr-Kb)でも環状ピット群を検出したためその状態で保存した。確認調査の結果を踏まえ、北側の大幅に谷地形になって落ち込んでいるとみられる箇所を除いた部分の3,400㎡を本調査対象面積と設定した。

##### 2 C区の確認調査

確認調査は、平成12年10月2日～16日にかけてA区の確認調査と並行しながら行った。調査においてはトレンチを20箇所設定し、土層、遺構・遺物の有無を確認しながら、作業員による手掘りの調査を実施した。遺構が確認されたトレンチについては、その状態で保存し、遺物が確認されたトレンチについては出土した層位と位置を記録した後に取り上げた上で、Ⅷa層(始良Tn火山灰

の風化層)まで掘り下げて調査を終了した。

調査の結果、南西部のⅥ層(Kr-Kb)で環状ピット群を検出したほか、同じ南西部のⅦ層(暗褐色土層)を中心に石器群を確認した。北部は西に隣接する上位段丘の谷からの流路にあたること、南東部は耕作によって削平されており、遺物や遺構は存在しないと判断し、南西部の2,400㎡を本調査対象面積とした。

#### 3 D区の確認調査

平成12年8月4日～11日と平成13年2月5日～14日の2回に分けて合計13箇所のトレンチを設定し重機で表土を除去した後、作業員による手掘りの確認調査を行った。その結果、農道を挟んで北隣にあるC区と関連の考えられるAT上位石器群や環状ピット群が確認されたため、3,400㎡について本調査対象とした。

#### 第2節 発掘調査の方法

##### 1 調査の方法と調査区の設定・調査の手順

###### (1) 一次調査(C区)

周囲の畑の作物との関係でA区の本調査に入れなかったため、先にC区で本調査を行うことになり平成12年11月6日から一次調査として着手した。まず、重機で表土、耕作土など攪乱部分の除去を行った後、アカホヤ面で遺構・遺物が無いことを確認しながら、確認調査で石器群が出土したⅥ層より上のⅤ層上面まで重機で除去した。その後、国土座標に合わせた10mグリッドと地形に合わせたベルトを設定し、人力で遺構精査、包含層掘削を行った。Ⅴ層下部からⅥb層にかけて多数の円形プランのピットを検出した。Ⅵ層からは石器が急に密になりⅦ層では予想をはるかに上回る石器群が出土した。礫群についてはⅦ層～Ⅷa層にかけて小規模なものが検出された。AT下位についてトレンチ掘りで遺物がないことを確認し平成13年2月28日に調査を終了した。

###### (2) 二次調査(A区)

二次調査は平成13年3月1日～平成13年12月28日にかけてA区で行った。

重機で調査区全体の表土剥ぎを行いⅢ層(K-Ah)で揃えて、国土座標に合わせた10mグリッドを設定した後、遺構検出を行った。K-Ahは調査区の北側と南側で残存しており、昭和初期の用水路のほか道路状遺構などを検出した。

その後、事務所や駐車場への通路を確保する必要から、道路取り付け部分を先行して調査を行った。まず、東西ベルトとトレンチを設定して、トレンチ掘りを先行させ、ATを除去し、Ⅸ層上面までの確認を行った。遺構・遺物が確認されたグリッドに隣接するグリッドのAT面まで精査を行った。道路取り付け部分の北側で遺構が集中したため、掘り下げずに土嚢やブルーシートで保護し、西側部分と同時に調査することとした。

西側部分は重機でK-Ahの除去を行った後、AT上位では次の2通りの調査法をとった。まず、道路取り付け部分で検出された遺構集中区に近い部分に南北方向の先行トレンチを設定し、50cmメッシュを縦掘り(ネジリ鎌で薄くスライス)してピットとその立ちあがりを探しながら精査する慎重な調査方法をとった。その結果、Ⅴ層中～下部で縄文土器(無文)が約40点が出土し、ピット群はⅥb層より10cmほど上からの掘りこみを確認できた。それ以外の部分は1/4グリッド(5m×5m)を先行して人力で掘り下げ、遺構・遺物が確認された部分の隣接1/4グリッドを広げていき、遺構・遺物のない部分については重機で除去する調査法をとった。その結果Ⅳ層で集石遺構2基、Ⅴ層上面で土坑およびピット約50基を検出した。Ⅴ層下～Ⅵb層面で土坑、ピット約300基を検出した。遺物はAT上位で剥片等が出土するが密集度は低い。

AT下位については上位と同様に1/4グリッドを先行させて掘り下げたところ剥片を多数検出したため、まとまった面積の全面掘りを人力で行った。その後Ⅹ層まで精査を行ったのち埋め戻し、平成13年12月28日に二次調査を終了した。

### (3) 三次調査(D区)

三次調査は平成14年1月10日～平成14年11月29日にかけてD区で行った。

排土置場を確保する関係で南北2区域に分け反転調査を実施することになり南側から調査に着手した。まず、重機で表土、耕作土など攪乱部分の除去を行った後、K-Ah面で揃え、遺構・遺物が無いことを確認した。さらに、確認調査で石器群や環状ピット群が出土したⅥb層より上のⅤ層下部まで重機で除去した後、手作業でⅥb層上面で揃え、国土座標に沿って10mグリッドおよびベルトを設定した。この過程でⅤ層～Ⅵa層にかけて、土坑やピットを少数検出した。

その後Ⅵb層～Ⅷa層にかけては1/4グリッド(5m×5m)を先行して人力で掘り下げ、遺構・遺物が確認された部分の隣接1/4グリッドを広げていき、遺構・遺物のない部分については重機で除去する方法をとった。

ATについては重機で除去し、先行1/4グリッド(5m×5m)の安全性を確保しながらブラックバンド(一部イワオコシ面まで)まで掘り下げ、さらにベルトに沿ってトレンチをイワオコシ面まで人力で掘り下げた。Ⅸ層とⅩ層において剥片等が散漫に出土したためその周囲も広げたが、遺物の出土は限られたため、調査を終了した。

その後、調査区を反転し、南側と同様の調査方法で北側の調査を行った。その結果、Ⅶ層を中心に石器群や礫群が検出された。

AT下位については南側より標高が高く、遺構・遺物が確認される可能性が高いのではとの想定でイワオコシ面まで調査範囲を広げたが、出土数は少なかったため、調査を終了した。

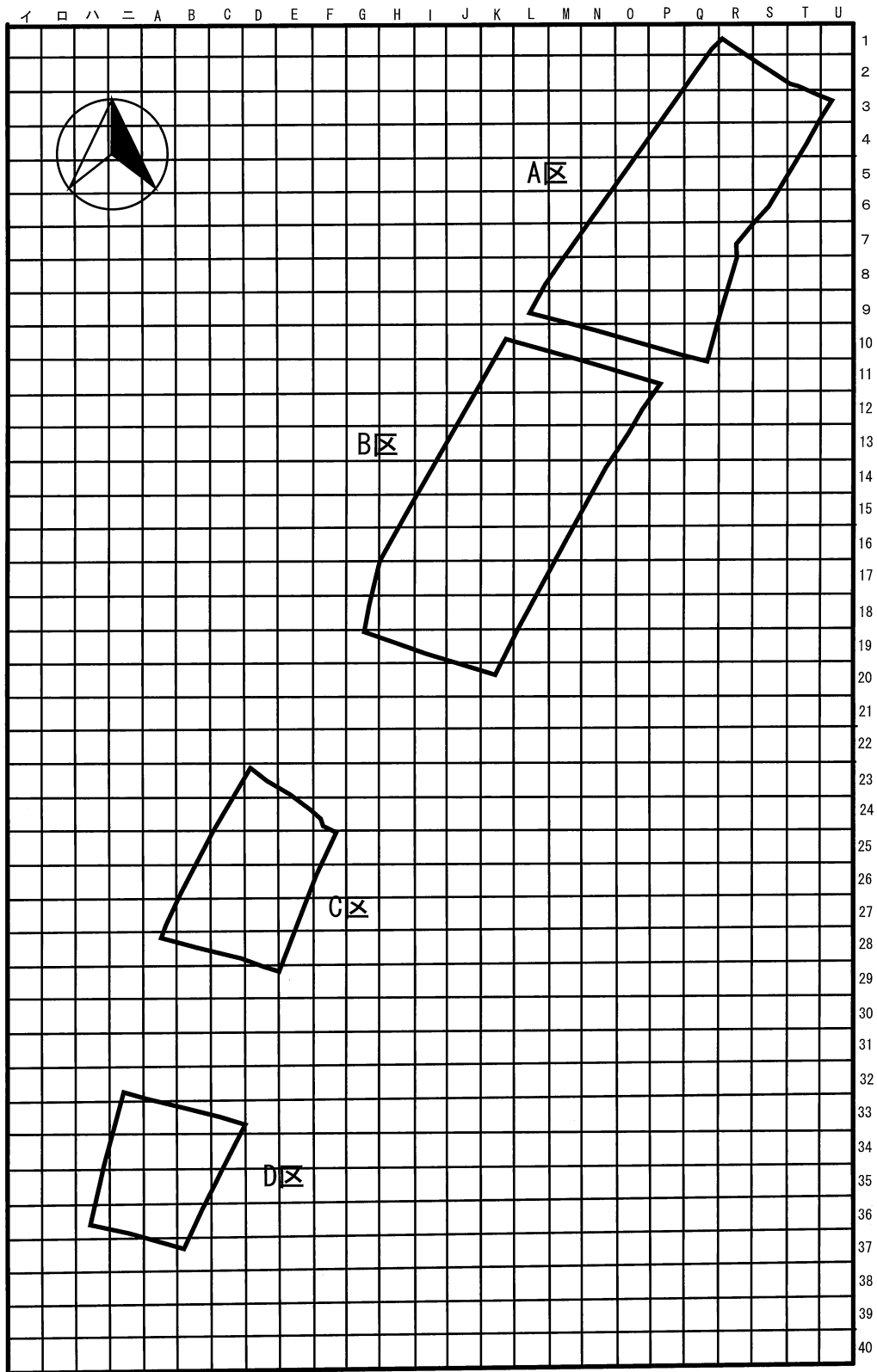
## 2 現地説明会

平成14年10月29日(火)に、現地説明会を実施した。83名の参加者があった。

## 3 日誌抄

### (1) 一次調査(C区)

- 20001107 重機業者との打ち合わせ
- 20001108 重機による表土剥ぎ開始
- 20001113 重機による表土剥ぎ終了
- 20001116 現場事務所搬入・設置
- 20001121 発掘作業員による発掘作業開始



第4図 牧内第1遺跡グリッド配置図

20001122 剥片出土。ピットの検出  
 20001129 ピットの実測  
 20001221 遺物の取り上げ開始  
 20010123 第Ⅶ層の掘り下げ終了。遺構精査  
 20010130 空撮  
 20010206 トレンチ掘り（A Tまで）開始  
 20010214 集石遺構検出  
 20010314 東九州自動車道発掘調査指導委員来訪  
 A区の表土剥ぎ開始  
 20010329 C区調査終了

(2) 二次調査（A区）

20010314 重機使用による表土剥ぎ開始  
 20010316 重機使用による表土剥ぎ終了  
 20010410 発掘作業員による発掘作業開始  
 20010411 溝状遺構を検出  
 20010416 溝状遺構実測開始  
 20010419 道路取り付け部分の掘り下げ  
 20010502 溝状遺構実測終了  
 20010509 細石刃出土  
 20010601 重機によるアカホヤ除去  
 現場での整理作業開始  
 20010604 道路取り付け部分の調査終了  
 20010612 西側部分Ⅴ層（早期包含層）25%掘り開始  
 20010717 重機使用によるⅣ・Ⅴ層の除去  
 20010910 25%掘り開始  
 20010912 空撮  
 20011226 埋め戻し  
 20011227 現場事務所等の撤収  
 20011228 A区調査終了

(3) 三次調査（D区）

20020110 排土運搬  
 20020111 現場事務所等の搬入・設置  
 20020121 重機による表土剥ぎ開始  
 20020129 重機による表土剥ぎ終了  
 20020204 発掘作業員による発掘作業開始  
 20020219 Ⅵ層で礫群を検出  
 20020222 25%掘り開始

20020510 現場での整理作業開始  
 20020806 空撮  
 20020807 先行トレンチ掘り下げ  
 20021029 現地説明会  
 20021125 重機による埋め戻し開始  
 20021126 現場での整理作業終了  
 20021127 重機による埋め戻し終了  
 現場事務所等の撤収  
 20021129 D区調査終了

### 第3節 整理作業および報告書作成

#### 1 整理作業の経過

整理作業は、平成14年5月～平成14年11月に、発掘現場において遺物および礫の水洗、注記、接合を行った。また、出土した遺物の整理については、平成15年5月～平成16年8月に、埋蔵文化財センターで、水洗・注記・接合・実測・トレースの作業を行った。遺物の整理終了後、平成16年10月に、石器実測委託を行った。一部の遺物実測・トレース等については平成16年度に(株)パスコに委託した。上記の作業と並行して、平成17・18年度に遺構実測図のトレース・整理を行った。

#### 2 報告書作成の経過

報告書作成に当たっては、整理作業と並行して遺構図等の整理および報告書原稿作成に取り組んできた。平成19年度に、これまで作成した文章・図面をデジタル機材を用いて印刷用の版下を作成し、全ての作業を同年度5月に完了した。

本報告書作成にあたって使用した入稿データ、アプリケーションソフトは以下の通り。

入稿データ	PDFX-1a
使用 OS	WindowsXPSP2
使用フォント	小塚明朝、小塚ゴシック
使用ソフト	Adobe InDesignCS2（レイアウト、ファイル変換）
	Adobe PhotoshopCS2（挿図作成、画像作成）
	Adobe IllustratorCS2（挿図作成、

画像作成)

Adobe Brige (レイアウト補助、  
画像処理)

Microsoft Word (文章作成)

Microsoft Excel (表作成)

次に具体的な作業工程であるが、委託業務においてデジタルデータ化されたトレース図に関しては、簡単な修正(縮尺、フォント調整・アウトライン化、縮尺の変更)を行い、InDesignCS2にレイアウトした。センターにおいて実測を行ったものに関しては、実測図をIllustratorCS2を用いて図面をデジタル化、その後、InDesignCS2でレイアウトを行っている。なお、すでにトレース図があるものに関しては、そのトレース図をスキャナで読み込み、PhotoshopCS2で加工(縮尺変更、カラーモード調整、ファイル変換)を行っている。

レイアウト作業に関しては、まずInDesignCS2で、本書の台割りを作成した後に、実測図等の挿図、次に文章・表をレイアウトした。

レイアウト作業が終了した後に、フォント、カラーモードのチェックを行い、PDFX-1aにファイル変換し、全ての作業を終了した。

## 第IV章 調査の記録

### 第1節 旧石器時代 (A区)

#### (1) 地形と遺構・遺物分布

A区の地形は、北方向の開析谷に向かって緩やかに下がる斜面地である。この開析谷は、完新世以後に河岸段丘を形成しつつ今の小並川となる。

各層ともに礫が出土したが量は少ない。遺物分布は、IX層石器群がO5グリッドに、VII層石器群がQ10グリッドに特に集中する。

#### (2) X～XI層石器群 (第13・15図)

産地不詳の風化の激しい黒曜石製の台形様石器(17)・頁岩製縦長剥片素材の搔器(21)・チャート製不定形剥片の折れ面接合(23・24、接合3)・砂岩製敲石(69+70)がある。台形様石器とチャートの接合資料の石材は本遺跡A・C・D区他石器群では見られず、その石材と出土層位により区分した。X層以下XIII層までには、この他ホルンフェルス・流紋岩・尾鈴山酸性岩類製剥片等が少量出土する。

#### (3) IX層石器群 (第13～15図)

始良Tn直下にあたるIX層上部に主に包含される石器群である。ナイフ形石器には、素材剥片を断ち切るように加工しペン先形に整形したもの(1～3)、薄手の縦長剥片素材で剥片末端や側縁に加工を入れて整形したもの(4～16)の二者がある。これらには珪質頁岩が好まれ、その生産に関連する接合資料(接合12～15)も豊富に確認された。また、他と比べあきらかに分厚めかつ別石材の素材剥片を用いたナイフ形石器も1点見られる(12)。この他、搔器・二次加工ある剥片・微細剥離ある剥片・剥片・石核があり、その多くはナイフ形石器生産にともなって製作され、また残されたものである。

接合資料からは、ナイフ形石器の生産を良く伺うことができる。34～40(接合13)はナイフ形石器やその未製品の可能性がある二次加工剥片が含まれる。いずれの剥片も薄手で縦長志向のものである。実測図のみ見ていると細石刃生産と見紛

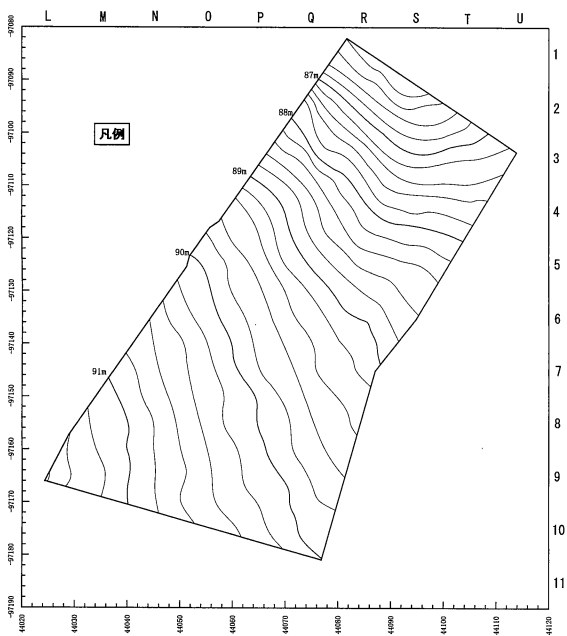
う資料である。41～51(接合14)は、幅8cm以上・厚み5cm以上のおそらくは拳大程度の円礫が用いられる。資料は剥片剥離の終盤であり、礫分割等については不詳である。正面図右の剥片剥離は礫面を取り去って石核形状を整えるための剥片剥離であり、結果、背面に礫面を持ちかつ幅広で大ぶりの剥片となる(剥離群1)。その後、剥離群1によってできた剥離面を打面に剥片剥離があったようである。石核に残る剥離痕からは、不定形剥片であったようにも見える(接合は未確認)。次に、剥離群1より一段低い位置に打面が設けられ、剥離群1と同様な剥片剥離が見られる(剥離群2)。その後、打面調整・作業面調整を介しつつ、小形薄手の端正な縦長剥片が連続して剥離される(剥離群3)。剥離群3を中心に、剥離群1・2のいくつかは、ナイフ形石器の素材剥片であろう。これもまた、実測図のみ見ていると細石刃生産と見紛う資料である。52～63(接合12)は、拳大以下の亜円礫を用いる。剥片剥離はすでに終盤で、入念な石核整形・打面作出を経て、薄手かつ端正な縦長剥片を連続して剥離する。縦長剥片剥離前には作業面調整も見られる。ナイフ形石器の素材獲得にあたったもので、実測図のみ見ていると細石刃生産にあたった剥片剥離と見紛うほどである。64～68(接合15)は小形薄手の不定形剥片をランダムに剥離する。ナイフ形石器の素材獲得の可能性はある。

#### (4) VIII a層石器群 (第16図)

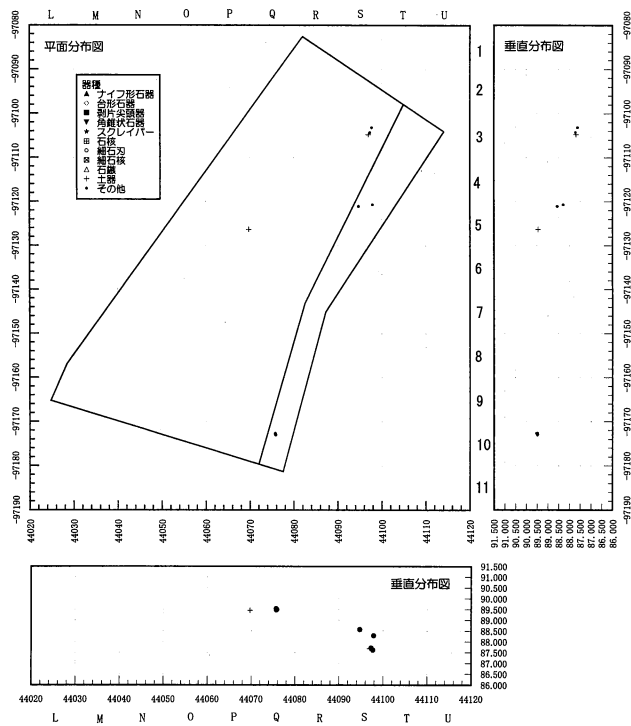
始良Tnに最も近い深さに主に包含される石器群である。ホルンフェルス・砂岩製剥片尖頭器(93～95)がある。特に砂岩製のは同母岩製石器が見られないことから搬入品である。

#### (5) VII層石器群 (第16～25図)

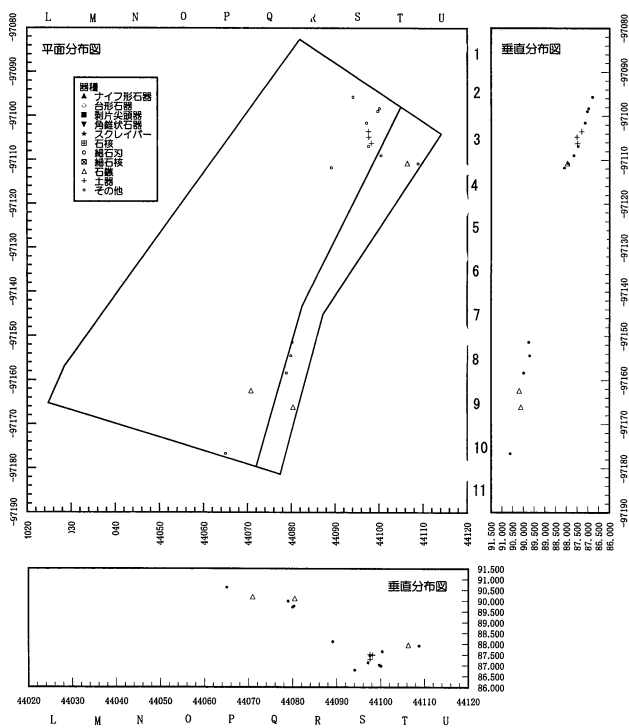
台形石器が特徴的に組成される。いわゆる百花台型に近いものは、乳白色ベースで黒い節理が縦横に走る良質のチャートを好んで用いる。この他、狸谷型を想起させるチャート製ナイフ形石器(92)、ホルンフェルス製国府型ナイフ形石器(77)、ホルンフェルス製角錐状石器(91)等が



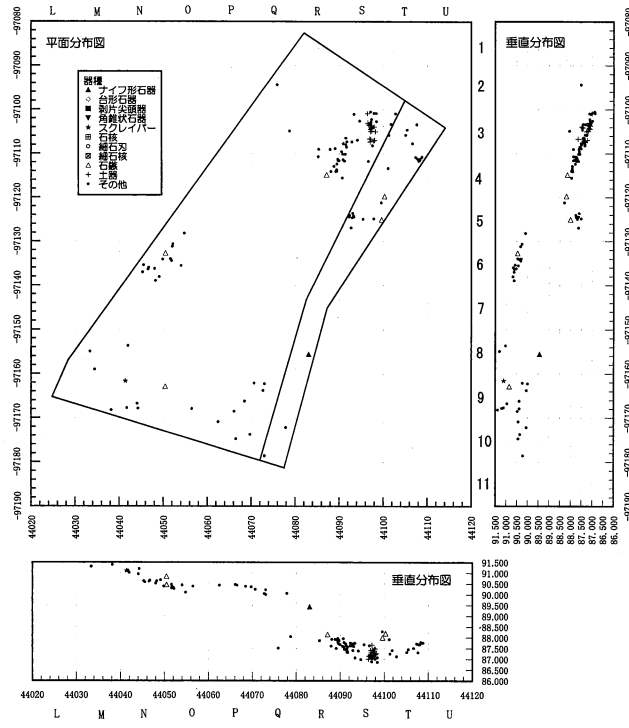
第5図 A区IVb層コンター



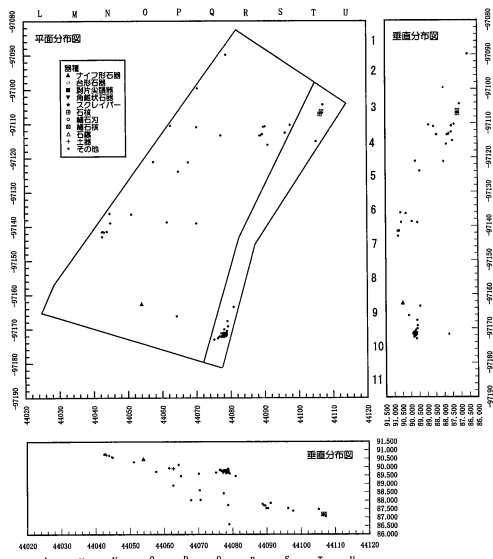
第6図 A区遺物分布図 (I~Ⅲa層)



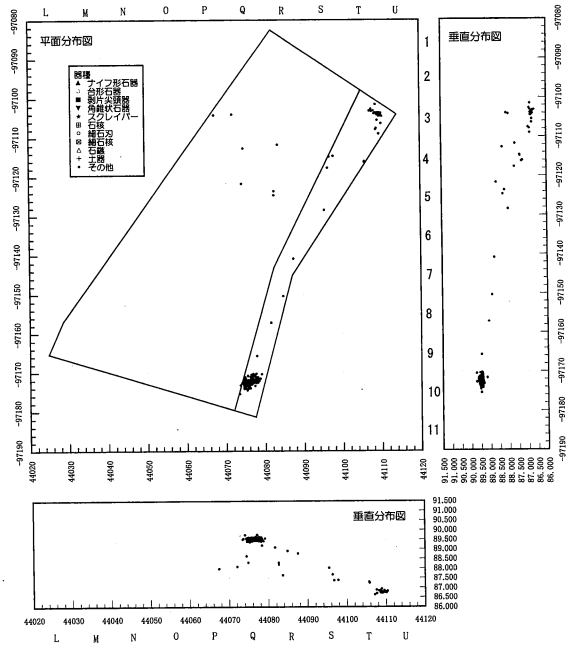
第7図 A区遺物分布図 (IV層)



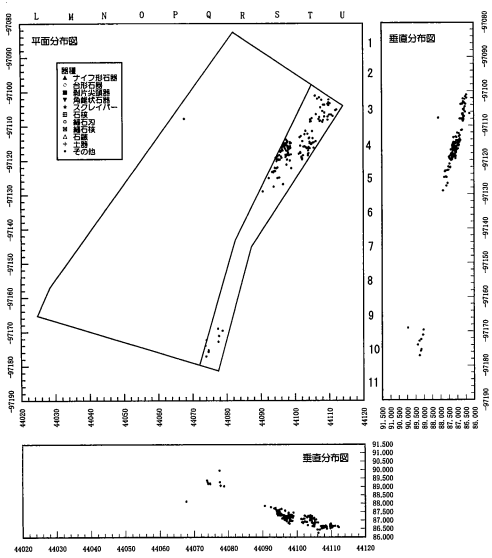
第8図 A区遺物分布図 (V層)



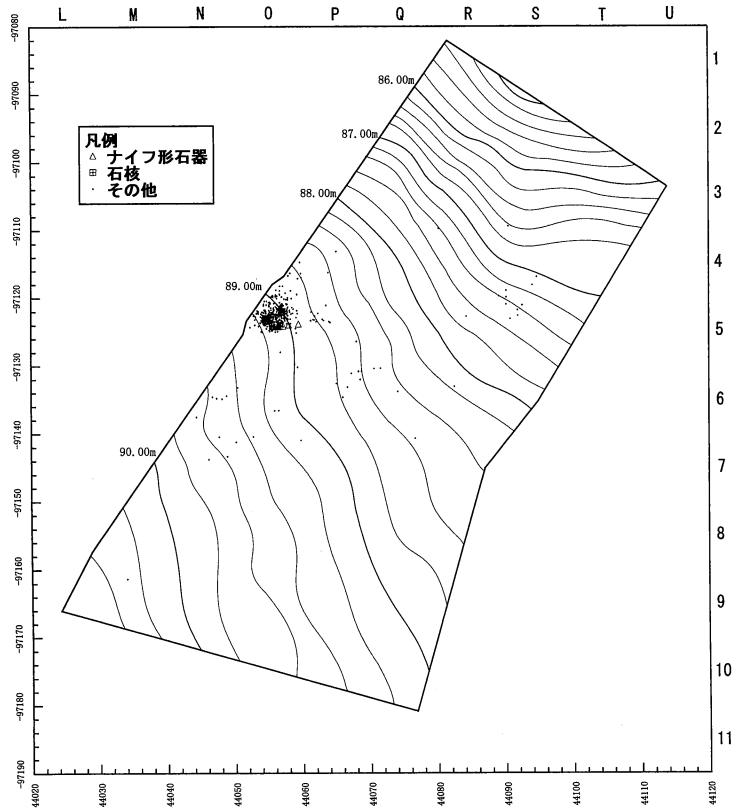
第9図 A区遺物分布図(IV a~IV c層)



第10図 A区遺物分布図(VII層)



第11図 A区遺物分布図(VIII a層)



第12図 A区遺物分布図(IX層)



散発的に見られる。接合資料は豊富で、活発な石器生産が伺われる。

115～132（接合9）は、長さ20cm以上・幅約15cm・厚み9cm以上の大きな垂角礫をまず分割し（分割後の重量約2.9kg）、分割面から次々に大ぶりの不定形剥片を剥離する（剥離群1）。その後、剥離群1によってできた剥離面を打面として入れ替え、やはり大ぶりの不定形剥片を剥離する（剥離群2）。剥離群1は節理に翻弄され整った剥片は剥離されておらず、それに対し剥離群2では節理に沿った剥片剥離となっている。133～144（接合7）は礫面の除去が全て終了した後の剥片剥離であり、元の礫サイズや形状は復元できない。剥片剥離は、先行剥離の剥離面を打面として継続している。打面調整はない。剥片剥離は石核周縁から内に向かって石目に平行して進むため、得られた剥片は幅広で大形のものとなっている。145～167（接合11）は、15cm角以上の垂角礫を用いる。石質は良好でなく、大きく入る節理によって剥片剥離は翻弄される。礫は二分され、それぞれで場当たりに剥片剥離する。168～172（接合10）は、節理に沿って分割された大形剥片から剥片剥離する。打面はおおまかな山形に設けられ、そのまま連続して幅広の不定形剥片を剥離する。最後の剥片が剥離された後、その剥離面を打面に1枚剥離がある。これは新たな打面を作り出す意図であった可能性があるが、その後、剥片剥離は継続していない。瀬戸内技法との関連が伺われる。173～175（接合5）は、拳大ほどの垂円礫を用いる。打面形成後ある程度連続して小形寸詰まりの縦長剥片を剥離し、引き続いてそれら剥離面を打面にやはり小形寸詰まりの縦長剥片を剥離する。176～178（接合6）は、剥ぎ込まれた石核に新たな打面を求める剥離を入れたものの、そのまま廃棄された資料である。石質は比較的良質である。不定形剥片をランダムに剥離したものであろう。179～182（接合8）は、20cm四方で厚み10cm以上の非常に大形の剥片が用意され、その周縁から大形の剥片を剥離するものである。得られた剥片の一つには二次加工が見られる。

#### （6）VI層石器群（第16図）

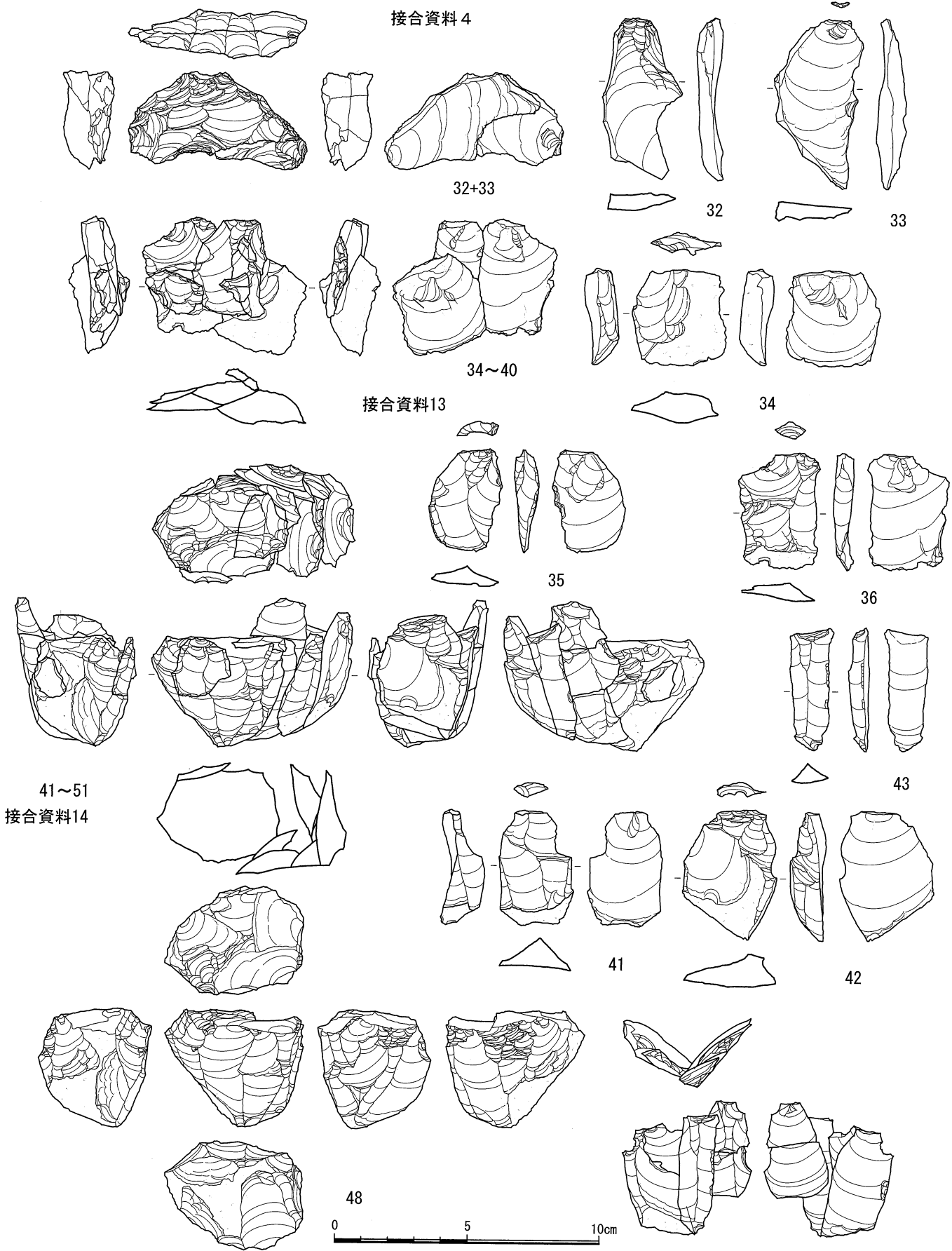
流紋岩製ナイフ形石器（72・73）、桑ノ木津留産黒曜石・夾雑物の多い黒色の黒曜石製搔器（98・99 + 100 + 101）等が散発的に見られる。石器生産はあまり活発でない。

#### （7）V～VI層石器群（第17図）

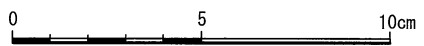
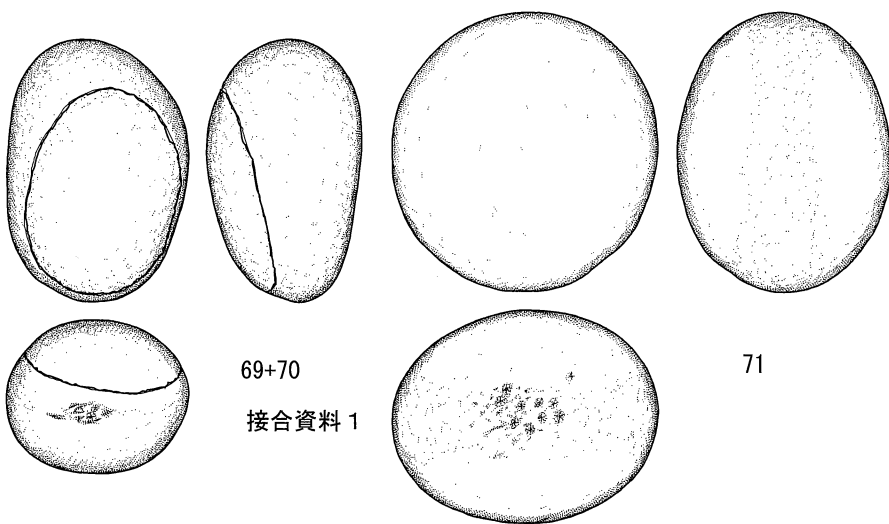
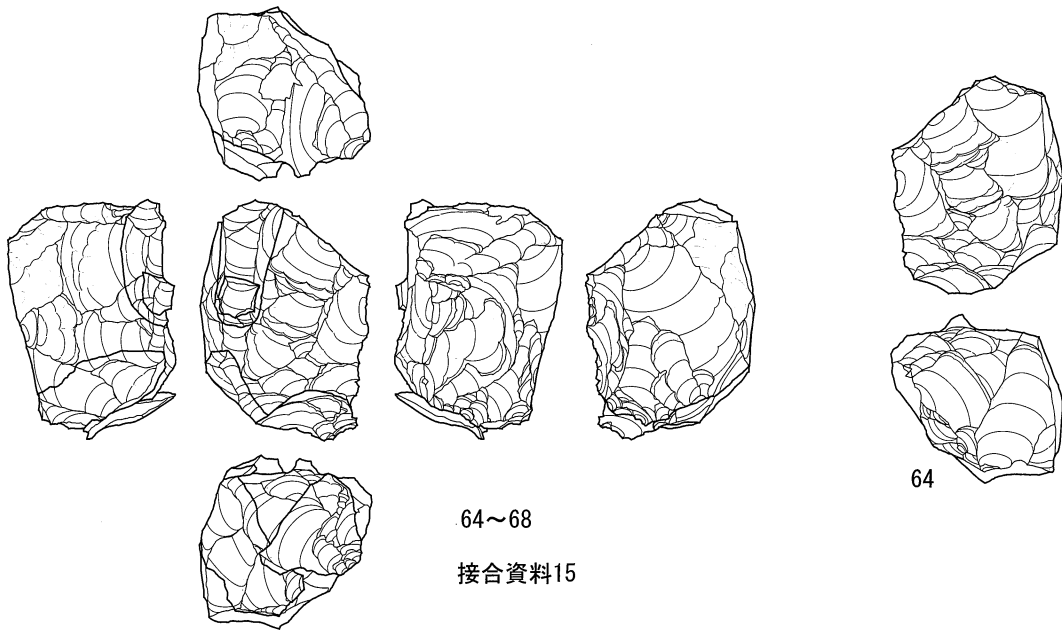
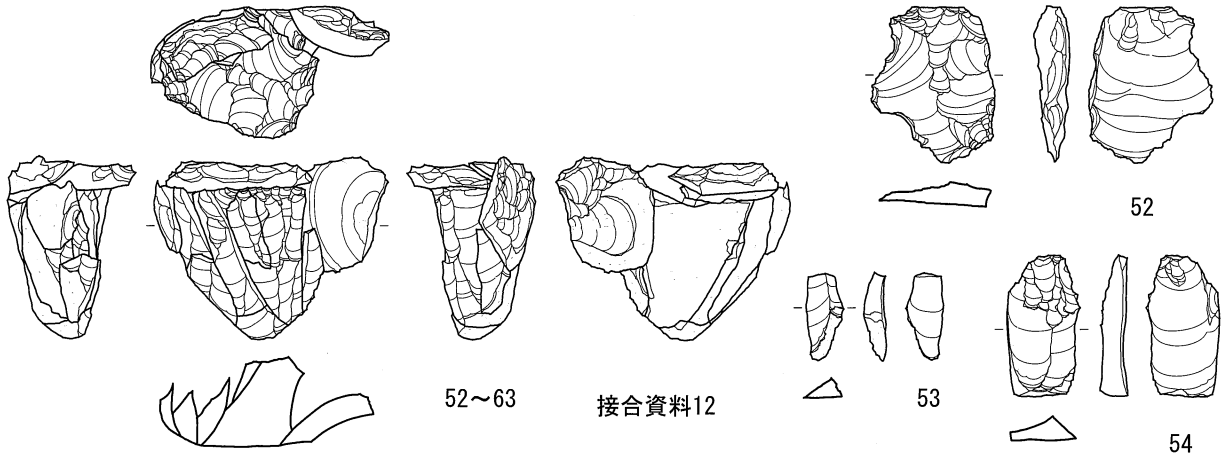
細石刃石器群である。いずれも桑ノ木津留産黒曜石製で、原石（111・112）、細石刃核（106～108）、細石刃（109・110）がある。細石刃核のうち、106は円柱状の原石から簡単な打面調整のうえ細石刃生産にあたるもの、107は板状の原石を用い石核調整はほとんど見られない特徴的なもの、108は剥片素材の細石刃核である。いずれも桑ノ木津留産黒曜石を用いる中、三者三様の細石刃生産である。この他、102はVIb層出土で、他細石刃核と石材が同じであることや出土層位から見て細石刃生産に関わった可能性を残す。



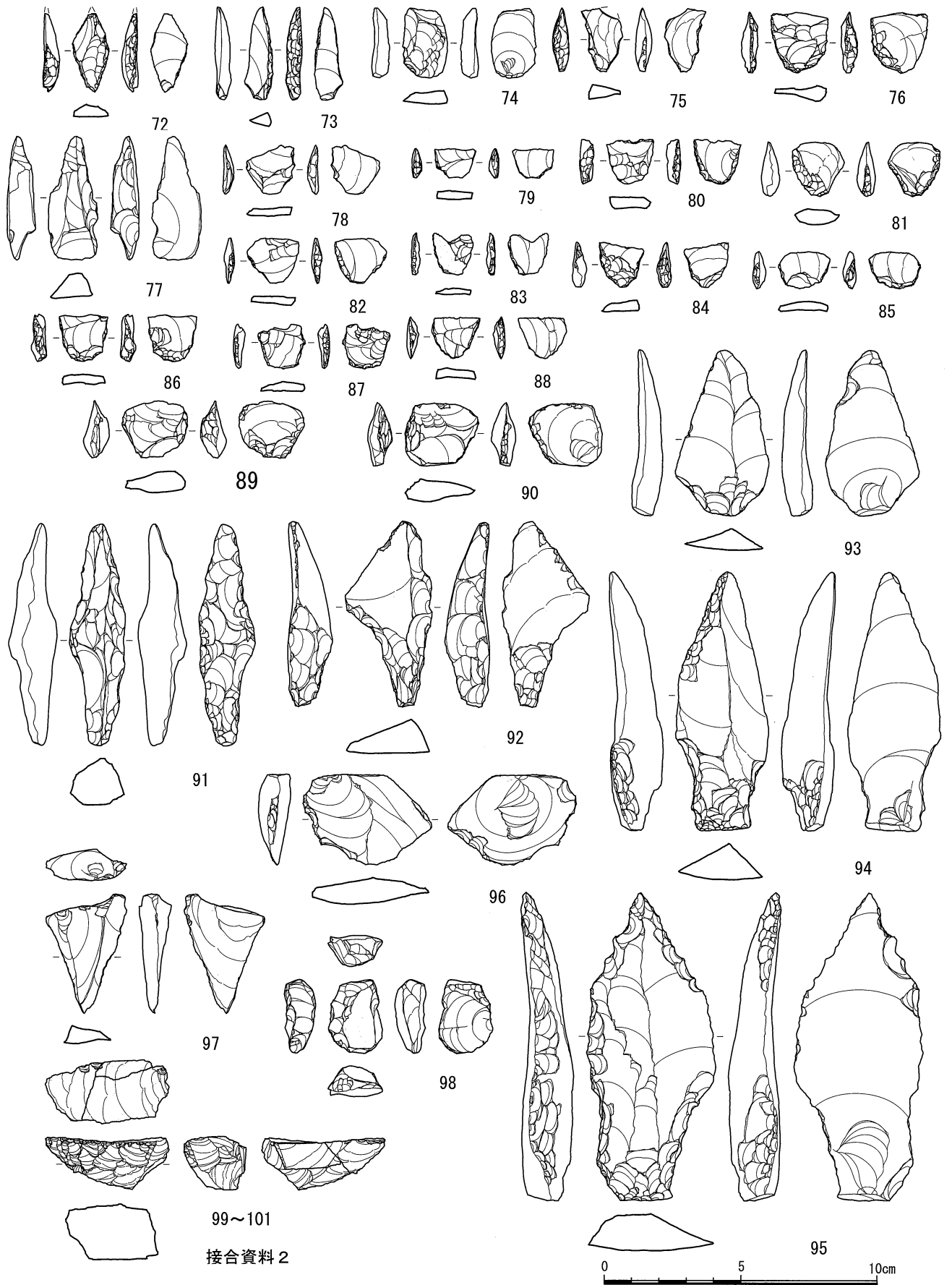
第 13 图 A 区出土旧石器遺物实测图 (1) (S=1/2)



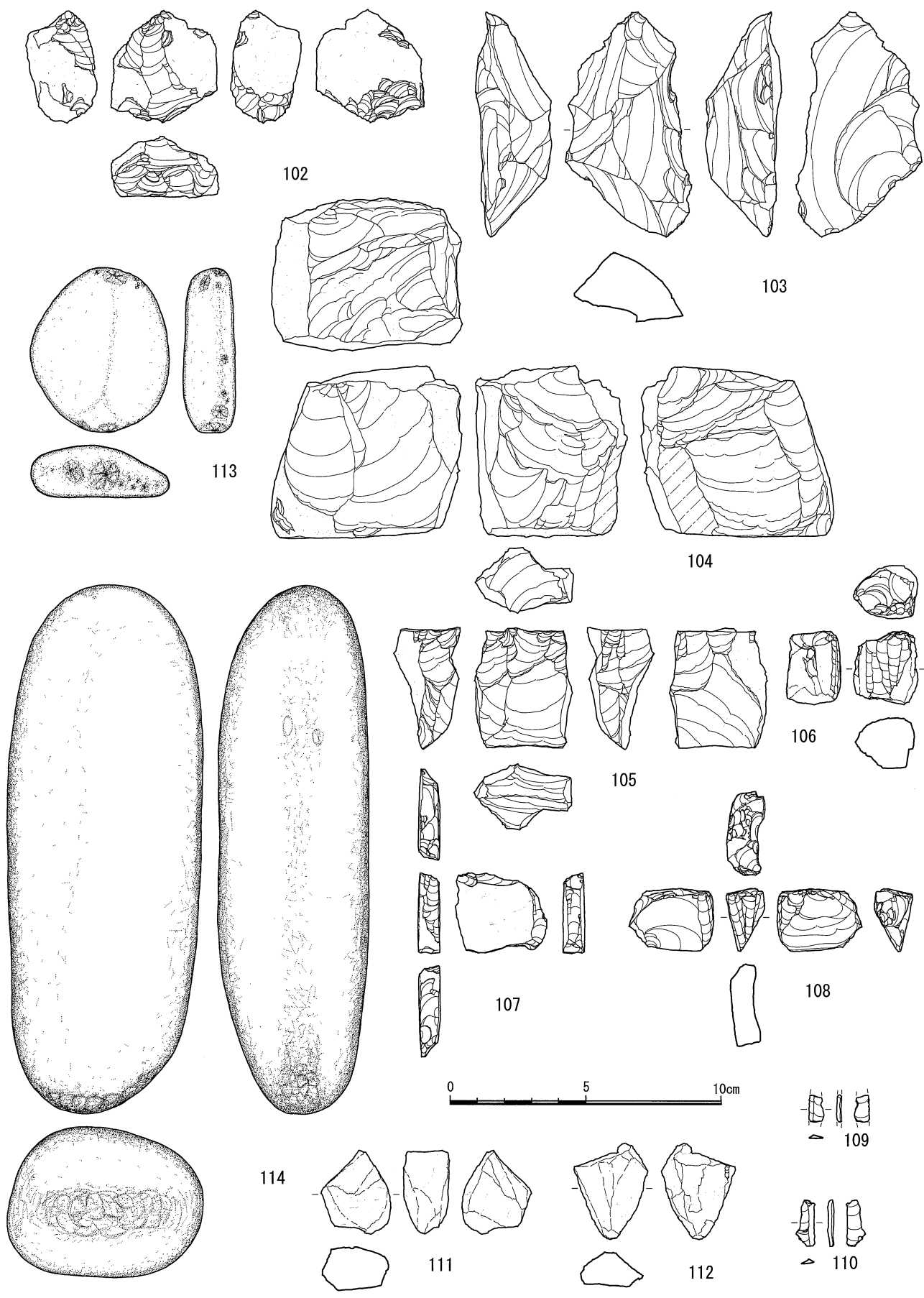
第 14 图 A 区出土旧石器遺物实测图 (2) (S=1/2)



第15图 A区出土旧石器遺物実測図(3) (S=1/2)



第 16 图 A 区出土旧石器遺物実測图 (4) (S=1/2)

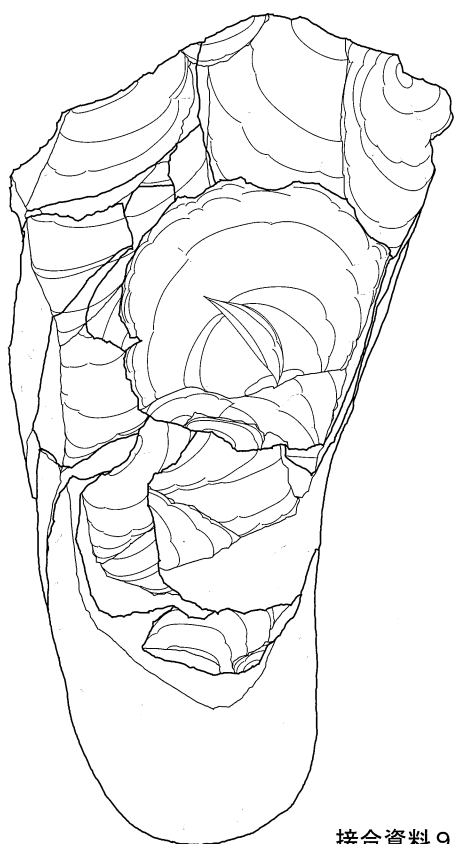


第 17 图 A 区出土旧石器遗物实测图 (5) (S=1/2)



115~132

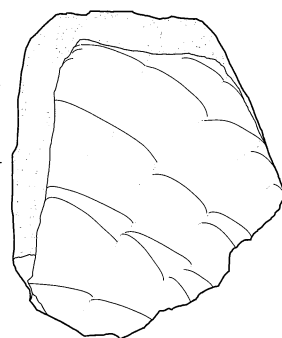
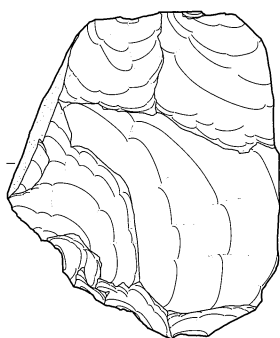
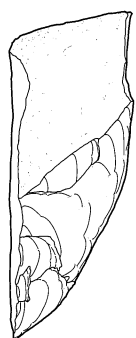
第 18 图 A 区出土旧石器遗物实测图 (6) (S=1/2)



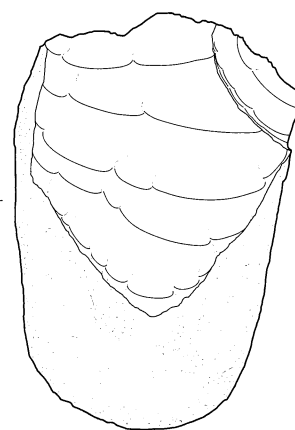
接合資料9



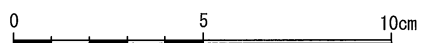
115~132



115

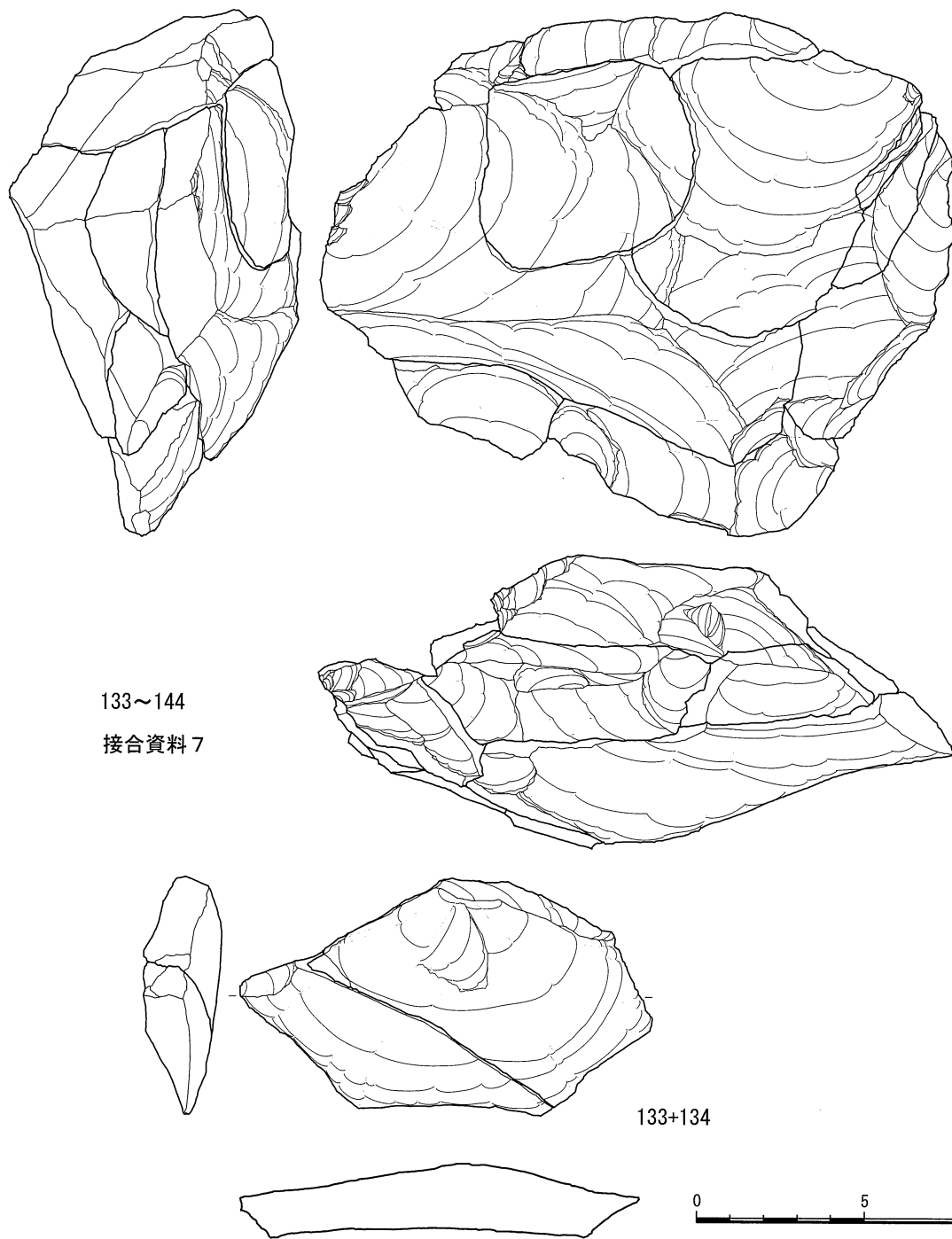


116



第19图 A区出土旧石器遺物実測图(7) (S=1/2)

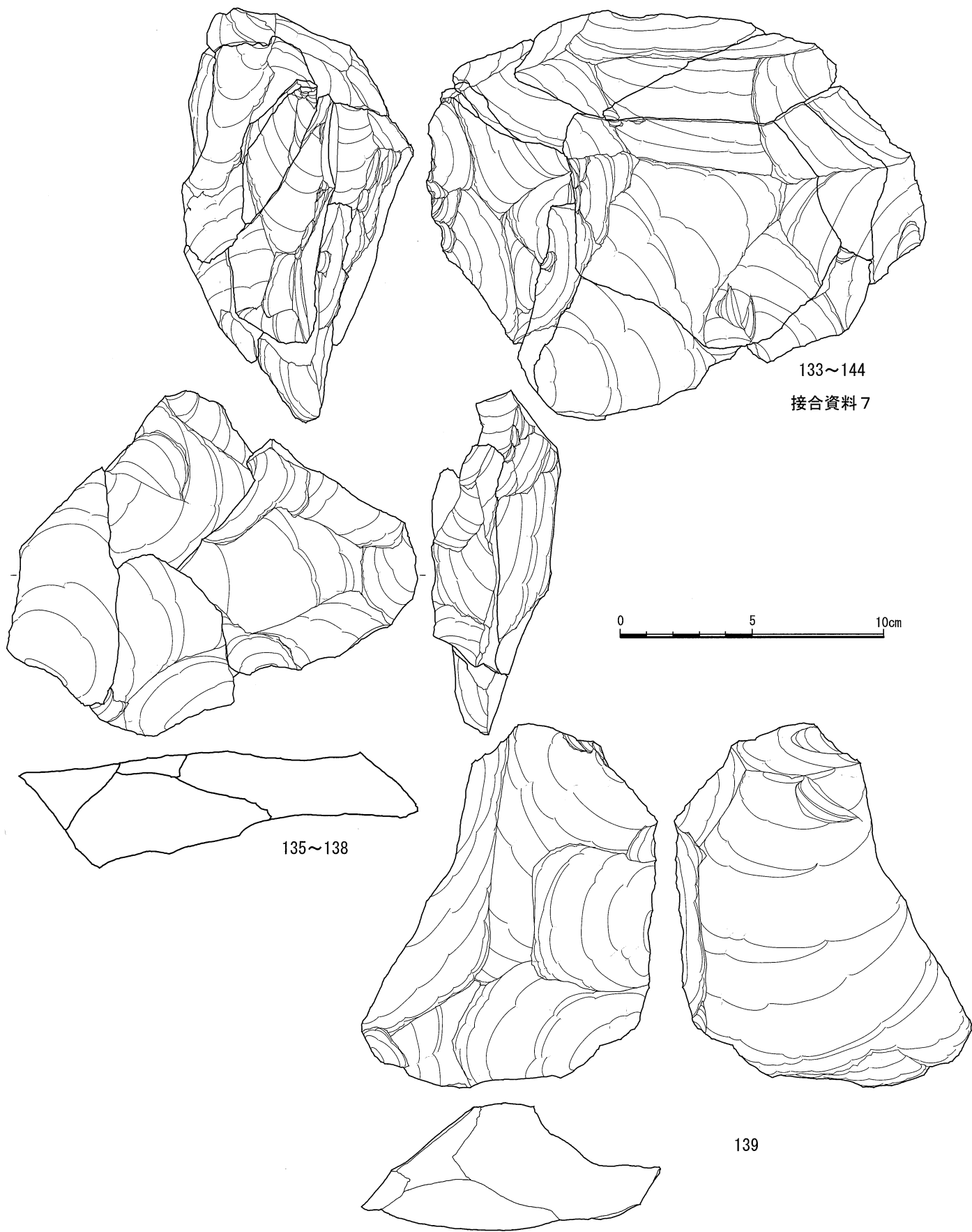




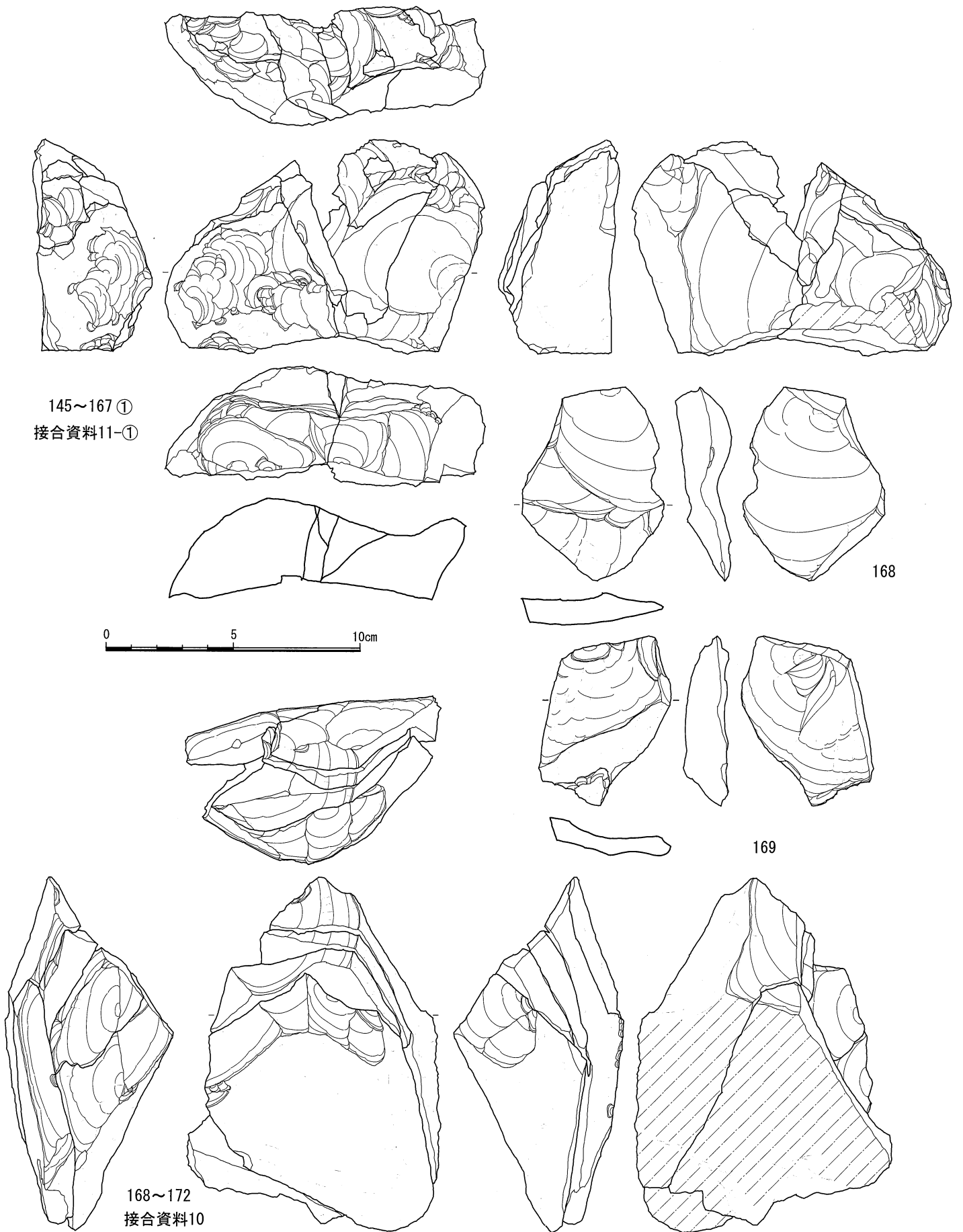
133~144  
接合資料 7

133+134

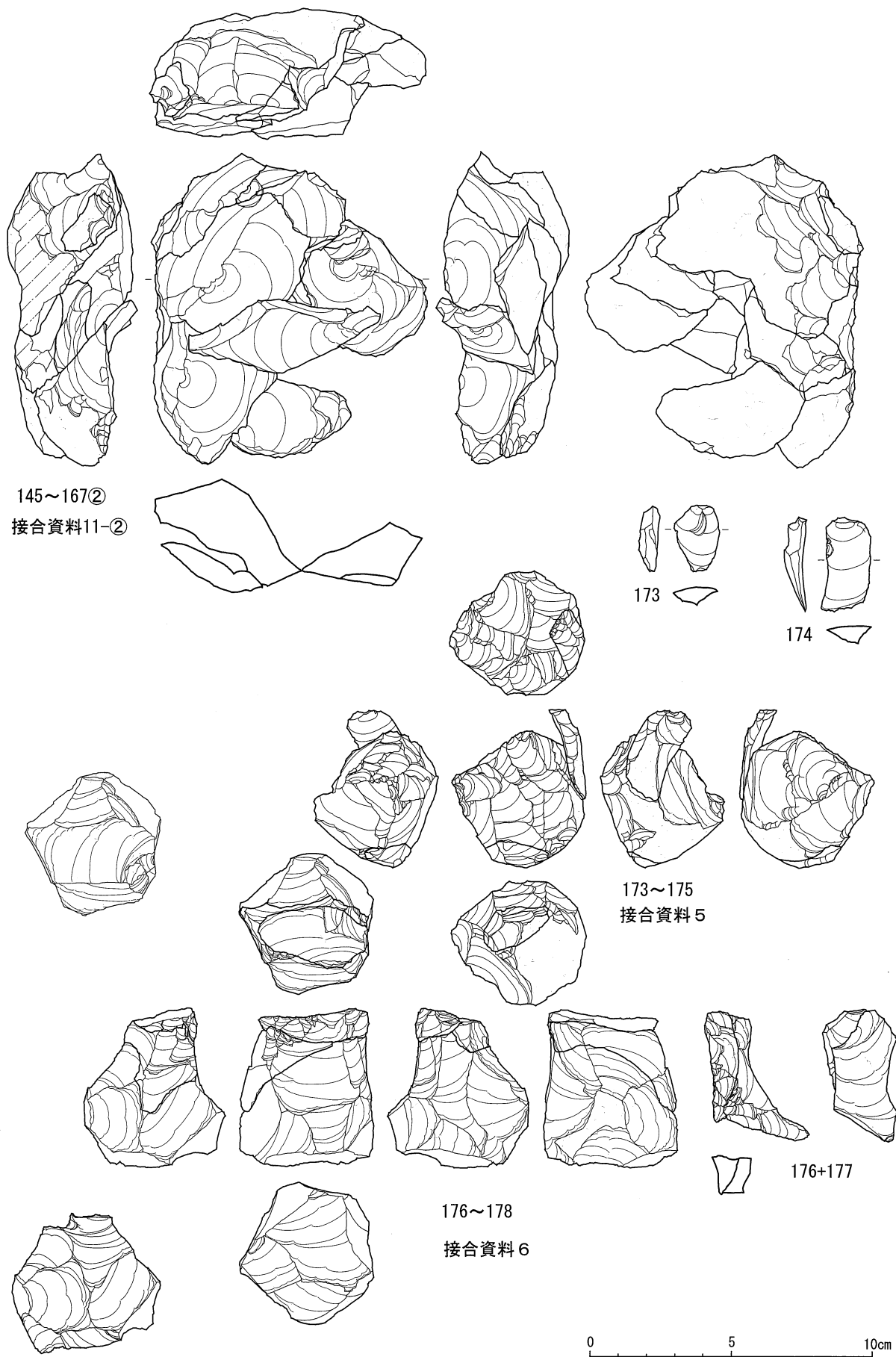
第 20 図 A 区出土旧石器遺物実測図 (8) (S=1/2)



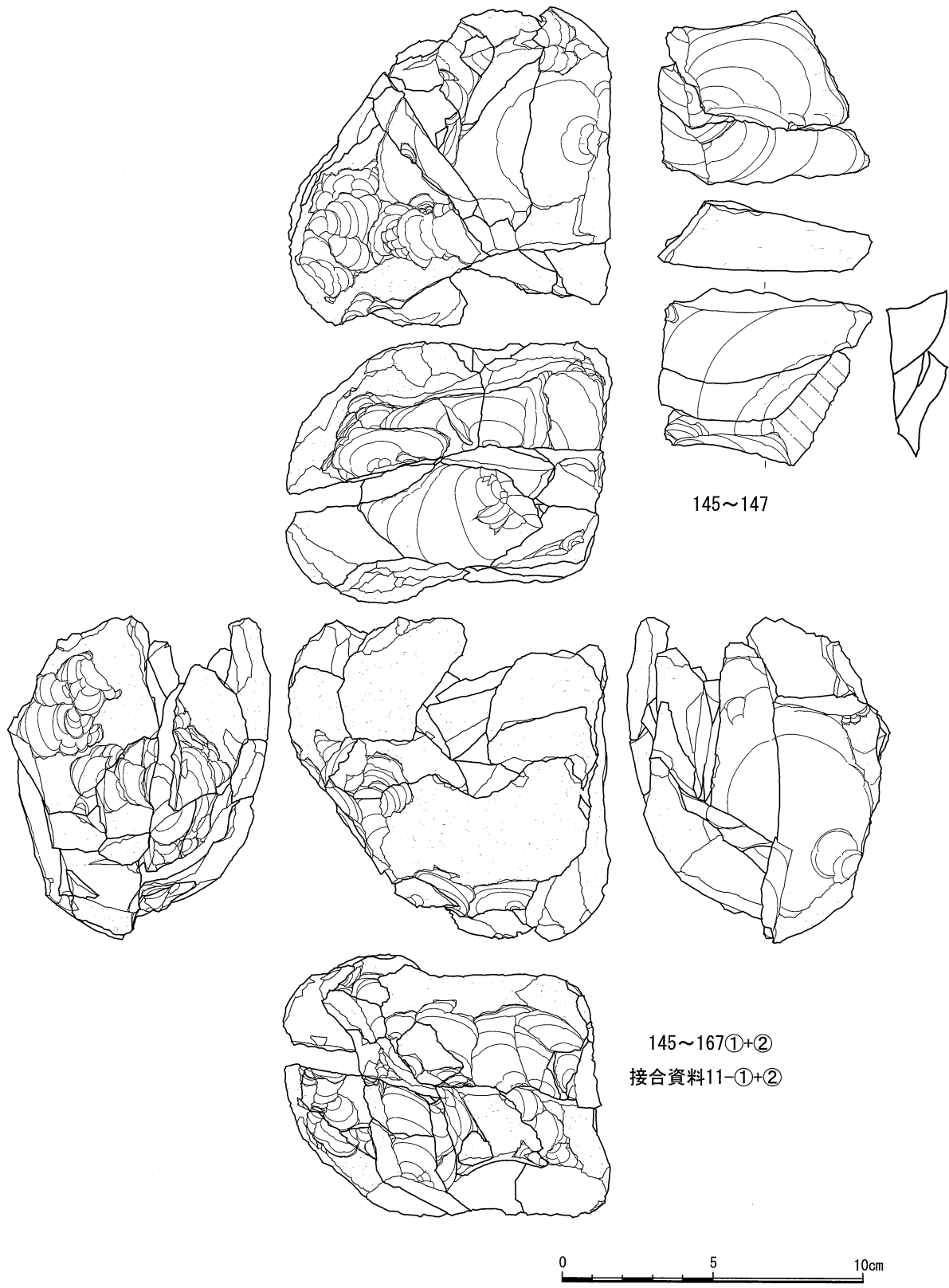
第 21 图 A 区出土旧石器遺物実測图 (9) (S=1/2)



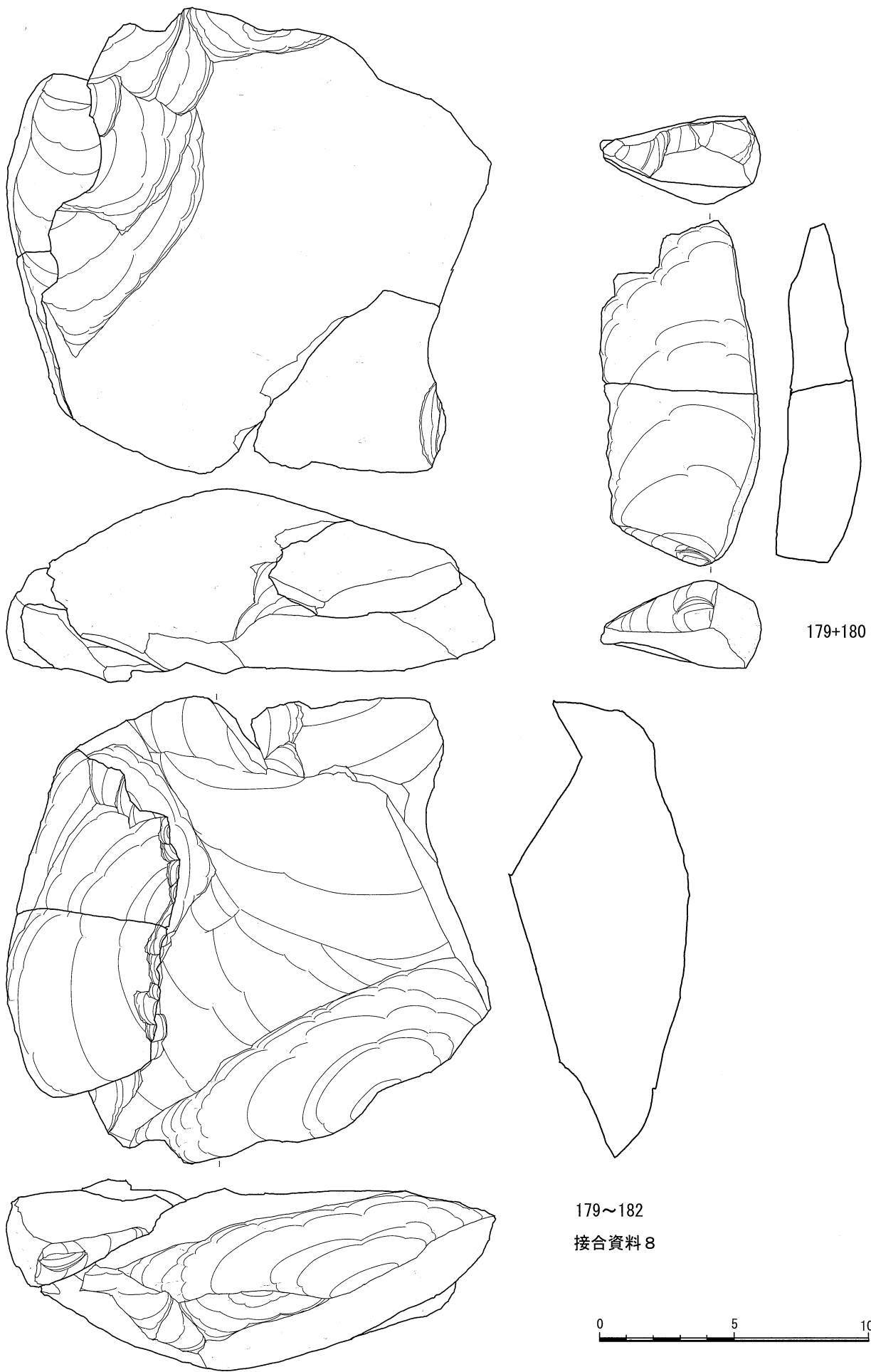
第22图 A区出土旧石器遺物実測図(10) (S=1/2)



第 23 图 A 区出土旧石器遺物実測図(11) (S=1/2)



第24图 A区出土旧石器遺物実測図(12) (S=1/2)



第 25 图 A 区出土旧石器遺物実測図 (13) (S=1/2)

## 第2節 旧石器時代 (C区)

### (1) 地形と遺構・遺物分布

C区の地形は、西側の丘陵から東側に向かう緩やかな開析谷2条とそれに挟まれた1つの尾根からなっている。出土した礫・石器の分布を巨視的に見ると、尾根頂部に1列・南端の谷の開析方向に沿って1列の帯状の分布がある。この2本の列には、礫集中・石器集中ともに含まれており、礫・石器分布の中心となっている。また、尾根北の緩斜面ならびに北端の開析谷にもいくつかの礫の分布があり、これと重複して石器も散漫に分布している。帯状の分布については、地形に沿って礫・石器が自然移動した可能性があり、また開析谷中やそこに続く緩斜面に見られた礫・石器分布についても尾根上のものが移動した可能性を考慮する必要がある。

### (2) VIII a層石器群 (第34～35図)

VII層石器群との区分が容易でない一群であるものの、特にVIII a層出土石器に注目した結果、抽出しうる可能性のある一群である。

296～298・300 + 301 + 302・304・307・308 + 309・310は縦長剥片を素材とする搔器・二次加工ある剥片である。VII層以上の層位出土資料と比べ、縦長剥片を好む点で一定のまとまりを見せている可能性がある。ナイフ形石器・角錐状石器・台形石器等では、VII層以上の層位出土資料との分別が十分でない。

### (3) VII層石器群 (第30～47図)

ナイフ形石器は、その素材利用や最終形態にバラエティーがある。石器背面に稜を取り込みつつ素材剥片を断ち切るような格好で整形するもの(183・184・188等)、小形の剥片の側縁や末端に若干の加工を入れて整形するもの(186・187等)、剥片の打面側・対する剥片末端側ともに直線的に断ち切ることで、側縁の平行する平面台形のもの(193・194)、石器片側縁から基部まで丸く整形し平面涙滴形をするもの(198等)、先細りで比較的整った縦長剥片の末端側を石器先端

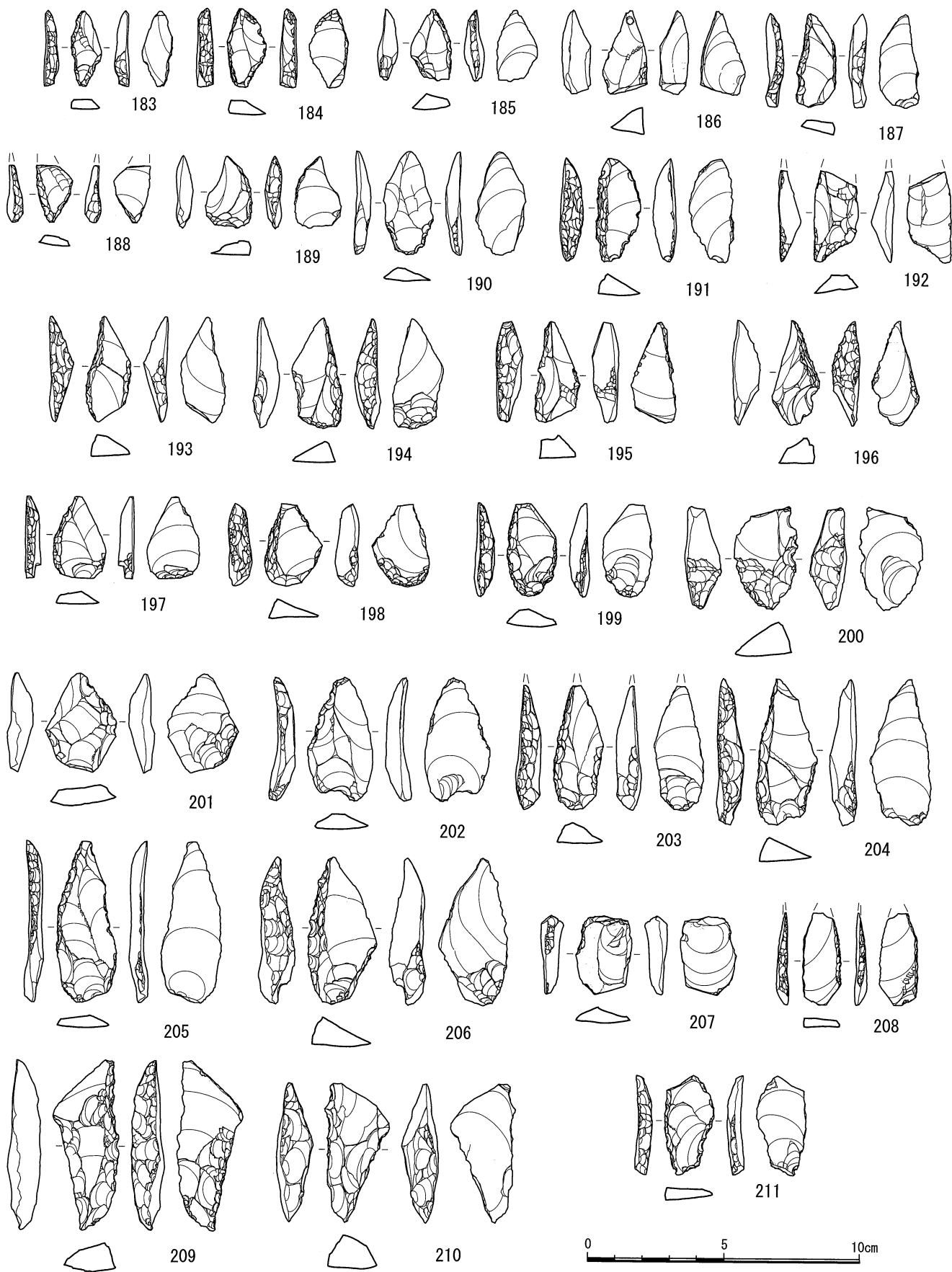
とし、剥片打面をそのまま残すかほとんど修整をかけない、石器全体が細身のもの(203・205等)、素材の厚み如何によっては石器裏面に平坦剥離が見られる長身の台形をするもの(209・210)、横長剥片を素材とするもの各種(212～243等)がある。石材利用上、特異なのは210のチャート製であり、その他は流紋岩・頁岩・ホルンフェルス等の一般的に見られる石材である。台形石器は百花台型類似のもの(251)が見られる。角錐状石器は様々であるが、石材利用上、1点のみチャート製のもの(258)がある他、ナイフ形石器と比べ風化の著しくなるホルンフェルスを多用する傾向がある。278～282(接合29)は被熱により破碎したものである。この他、特異なものとして珪質頁岩製剥片(310)は緑色で特に珪質の強いもの(緑色珪質岩とも呼ばれることがある)や六角柱状の両錐でいわゆるファントム(成長面に見える山入水晶)の水晶(323)がある。

324～337(接合55)・338～341(接合54)・343～347(接合44)は瀬戸内技法関連資料である。接合44・54・55間に接合関係は未確認ながら、同一母岩である可能性が高い。良質の頁岩製である。なお、ホルンフェルス製石核(342)も瀬戸内技法関連資料の可能性はある。

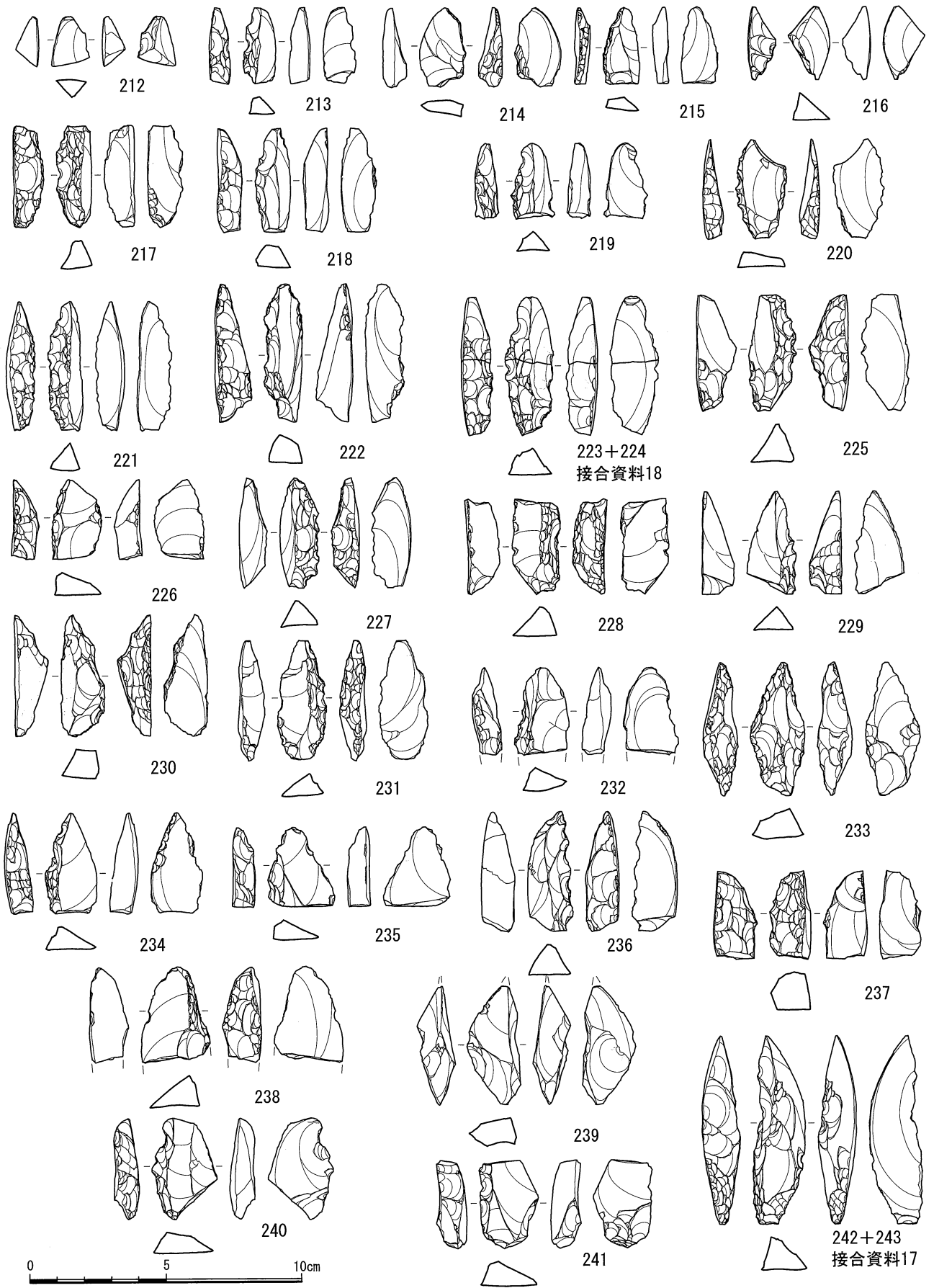
324～337(接合55)は、石核用の剥片獲得から最終的なナイフ形石器製作までの一連がわかる資料である。まず、径15cm以上の大形礫が分割され、その分割面から大形剥片1→(剥ぎ損ない1枚)→大形剥片2を連続して剥離する。大形剥片1は剥離時の衝撃で二分され、そのまま廃棄される。大形剥片2は末端に大きな歪みを持つものの、横長剥片石核として使われる。その後いくつかの剥片剥離が介在し、大形剥片3を剥離する。これもまた大形剥片1と同じであったか二分され、そのまま廃棄される。次いで打面を90°入れ替え、新たな打面から3枚以上の大形剥片(大形剥片4～6)を剥離する。大形剥片4・5は横長剥片石核として使われ、山形打面を作り出しつつ剥片剥離する。接合したナイフ形石器1点は大形剥片5の石核に伴う。大形剥片6も大形剥片4・5と同様の石核として使われたと見られ、そ



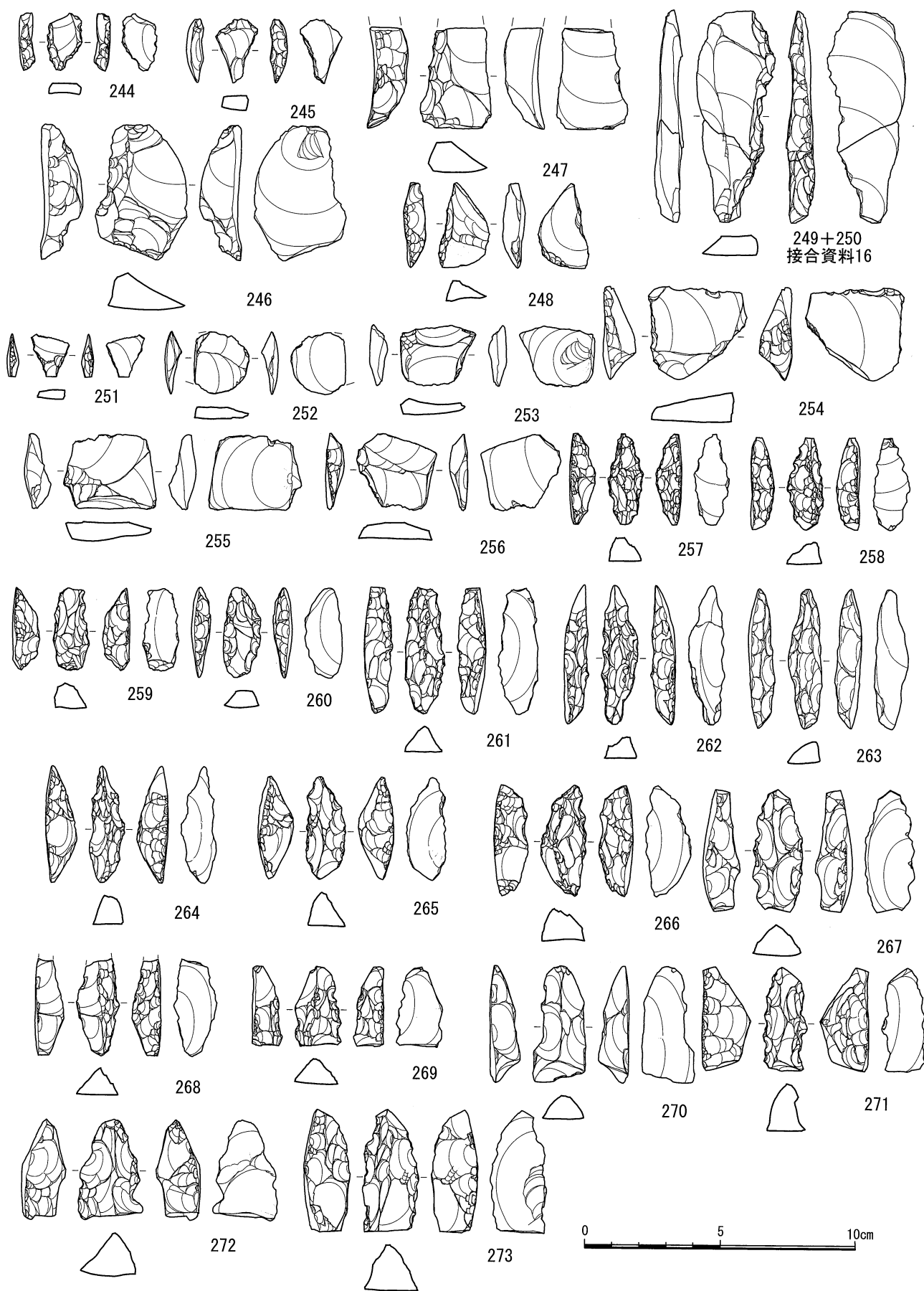




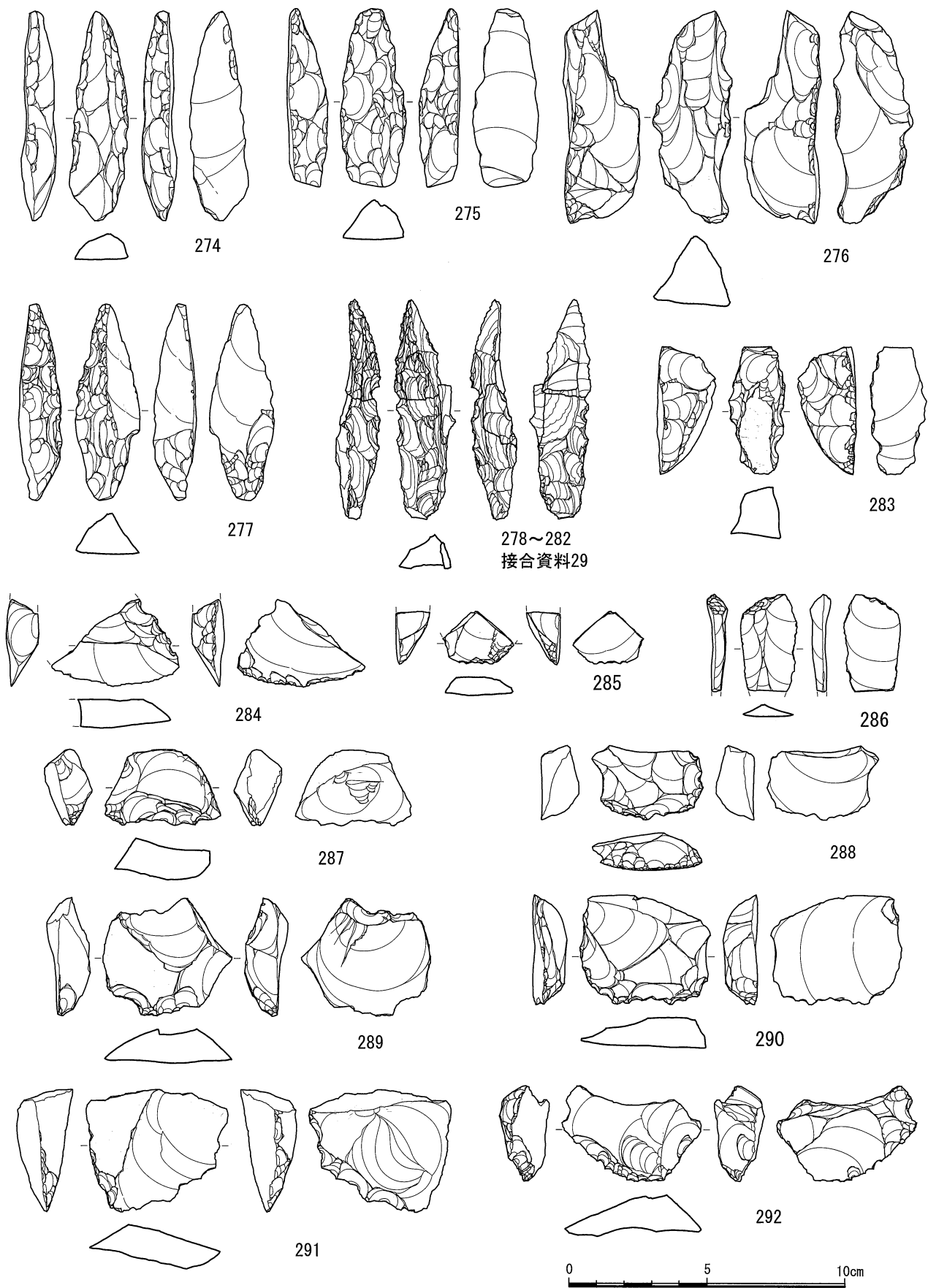
第30图 C区出土旧石器遗物实测图(1) (S=1/2)



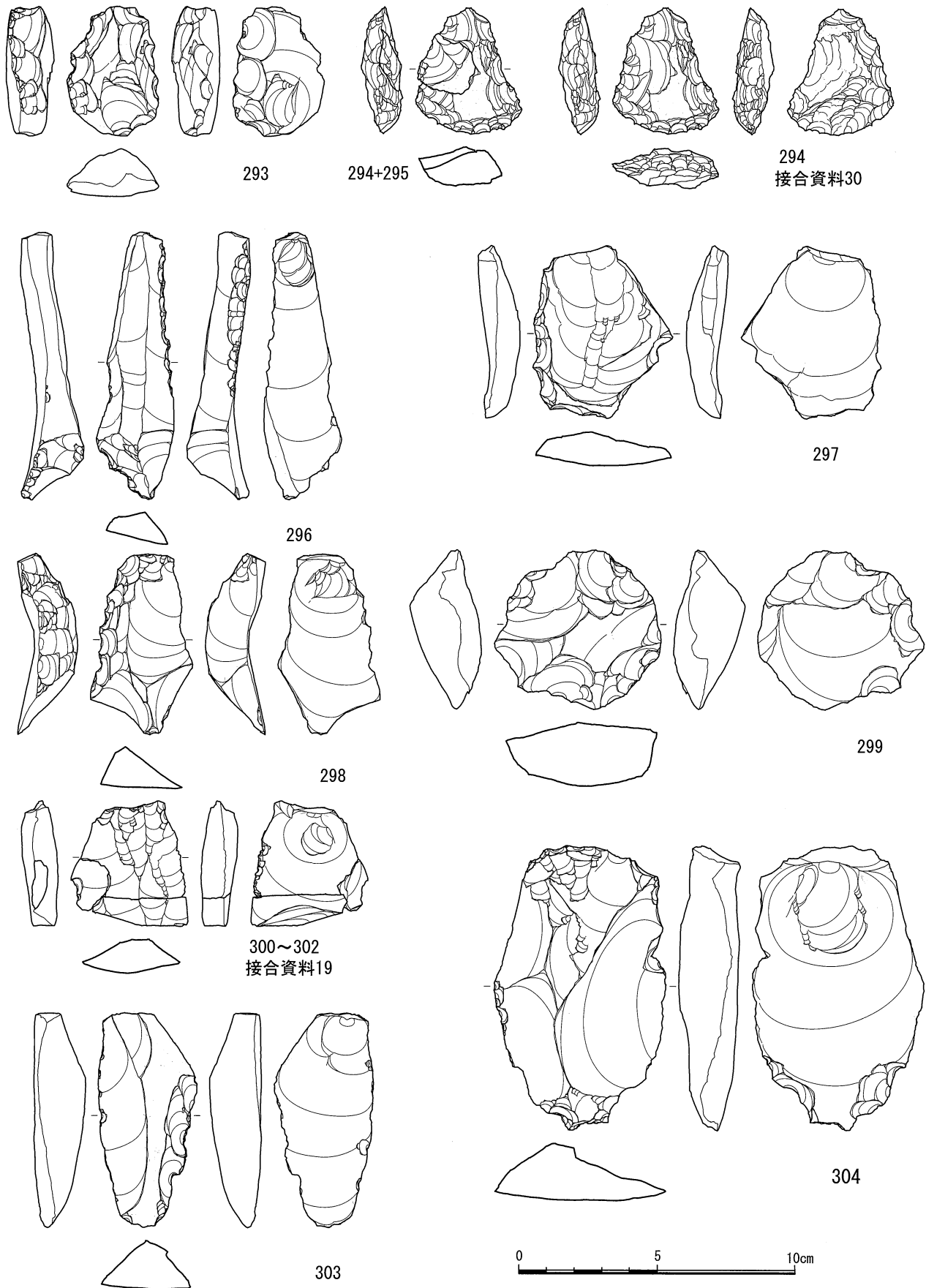
第31图 C区出土旧石器遺物実測図(2) (S=1/2)



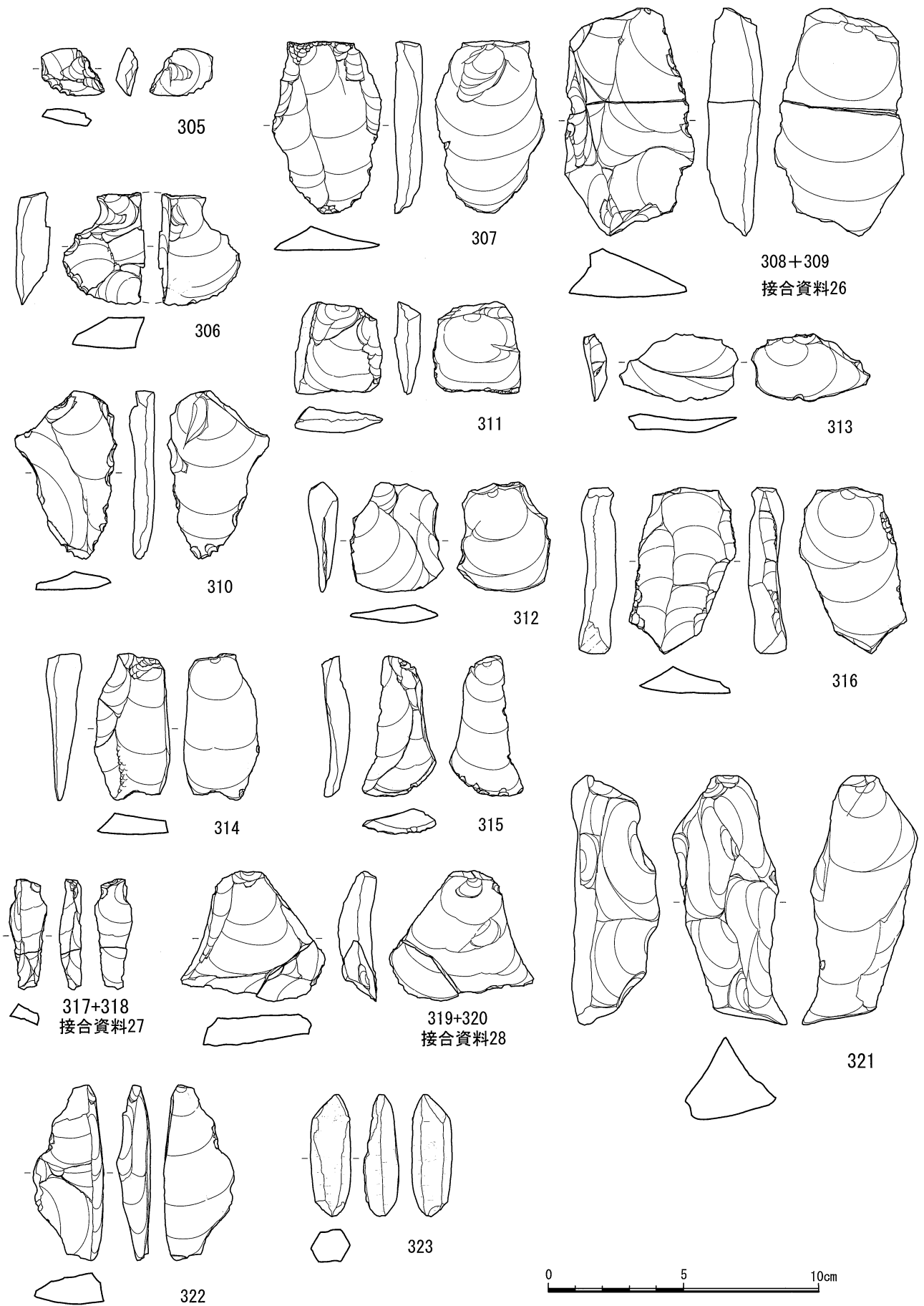
第32图 C区出土旧石器遺物実測図(3) (S=1/2)



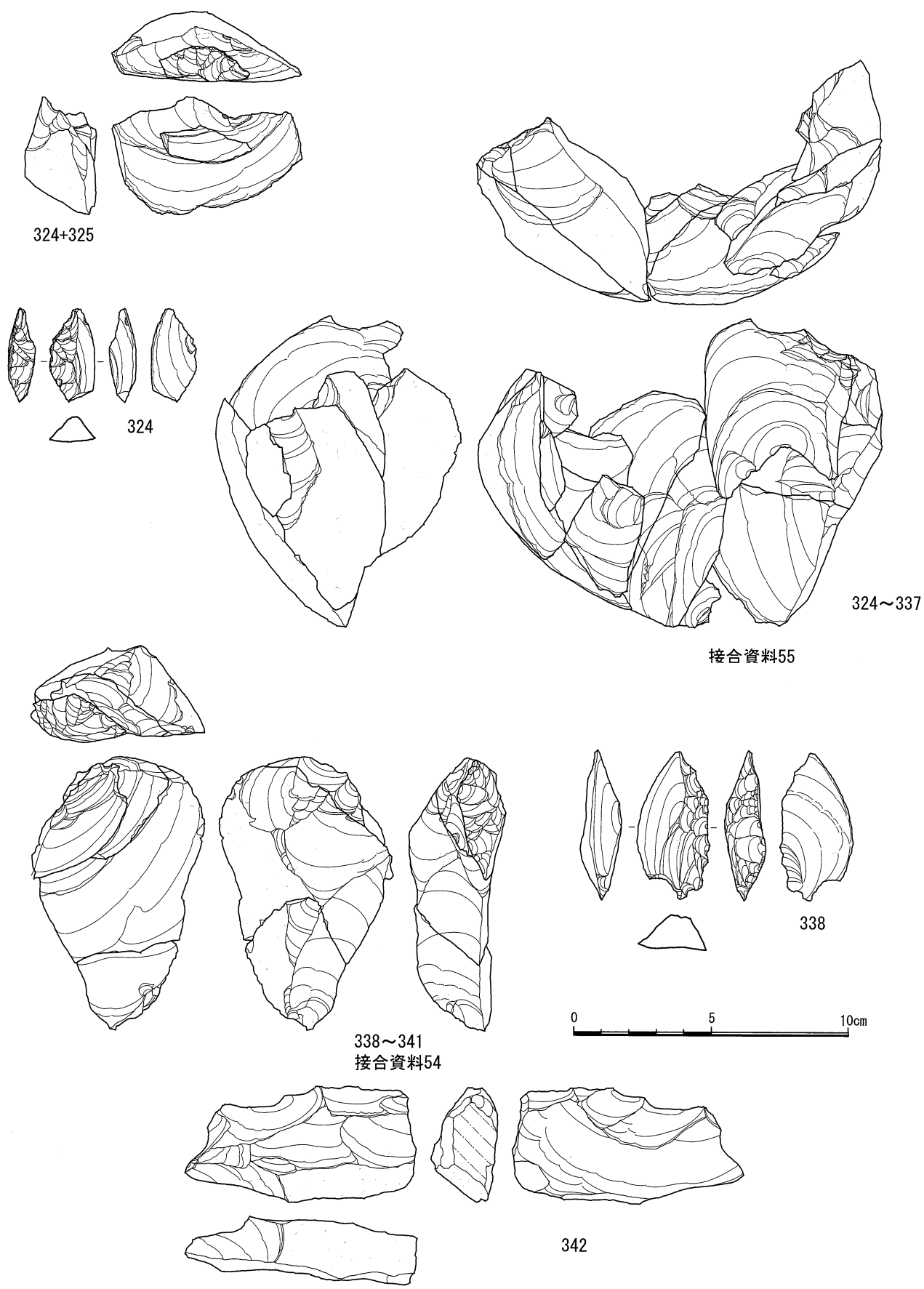
第33图 C区出土旧石器遺物実測図(4) (S=1/2)



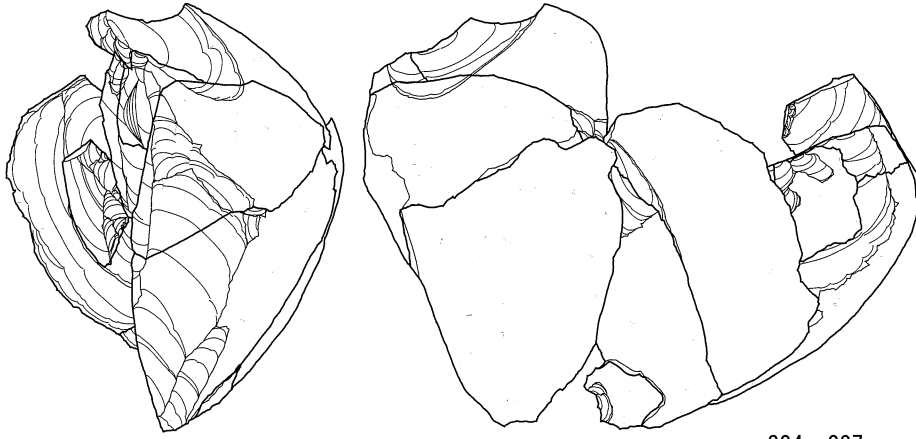
第34图 C区出土旧石器遺物実測图(5) (S=1/2)



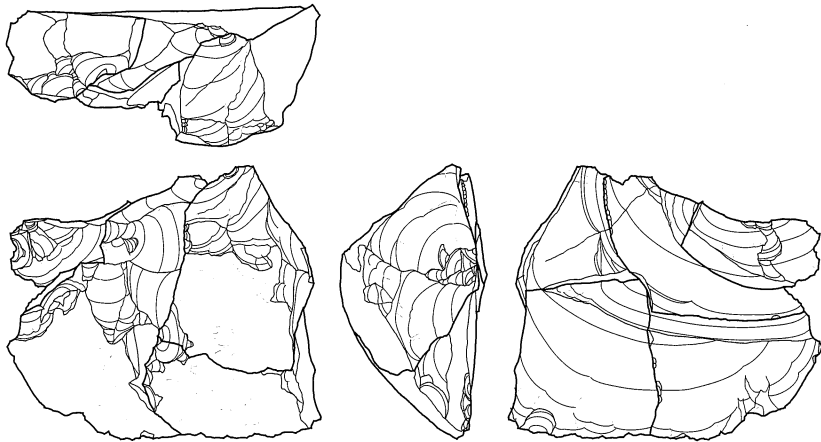
第35图 C区出土旧石器遺物実測図(6) (S=1/2)



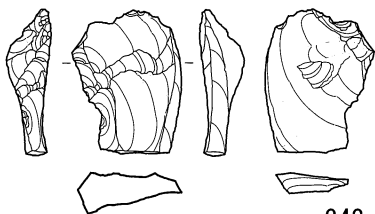
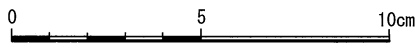
第36图 C区出土旧石器遗物实测图(7) (S=1/2)



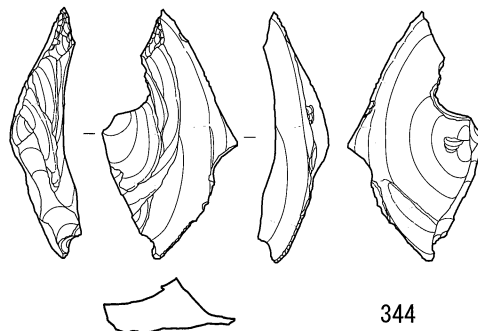
324~337



343~347 接合資料44



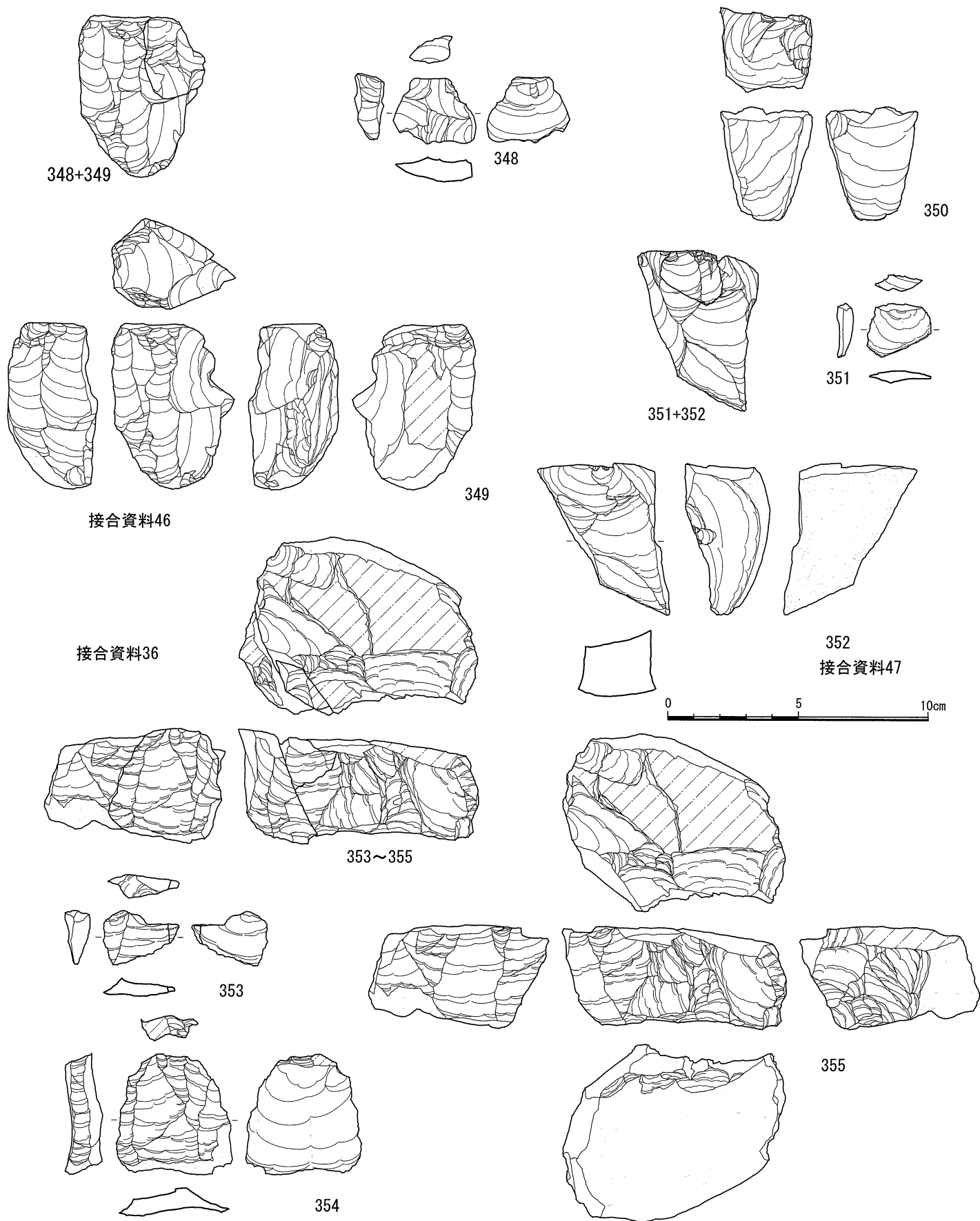
343



344

第37图 C区出土旧石器遺物実測図(8) (S=1/2)





第 38 图 C 区出土旧石器遺物実測图 (9) (S=1/2)

の山形打面を作り出した時の剥片のみ接合が確認されている。338～341（接合54）は、盤状剥片打面側から山形打面を作り出し、横長剥片を連続して剥離する。1点ナイフ形石器を含む。343～347（接合44）は、盤状剥片より山形打面を作り出しつつ横長剥片を連続して剥離する。剥離の過程で、石核の作業面が大きく壊れた後も1枚のみ横長剥片を剥離する。

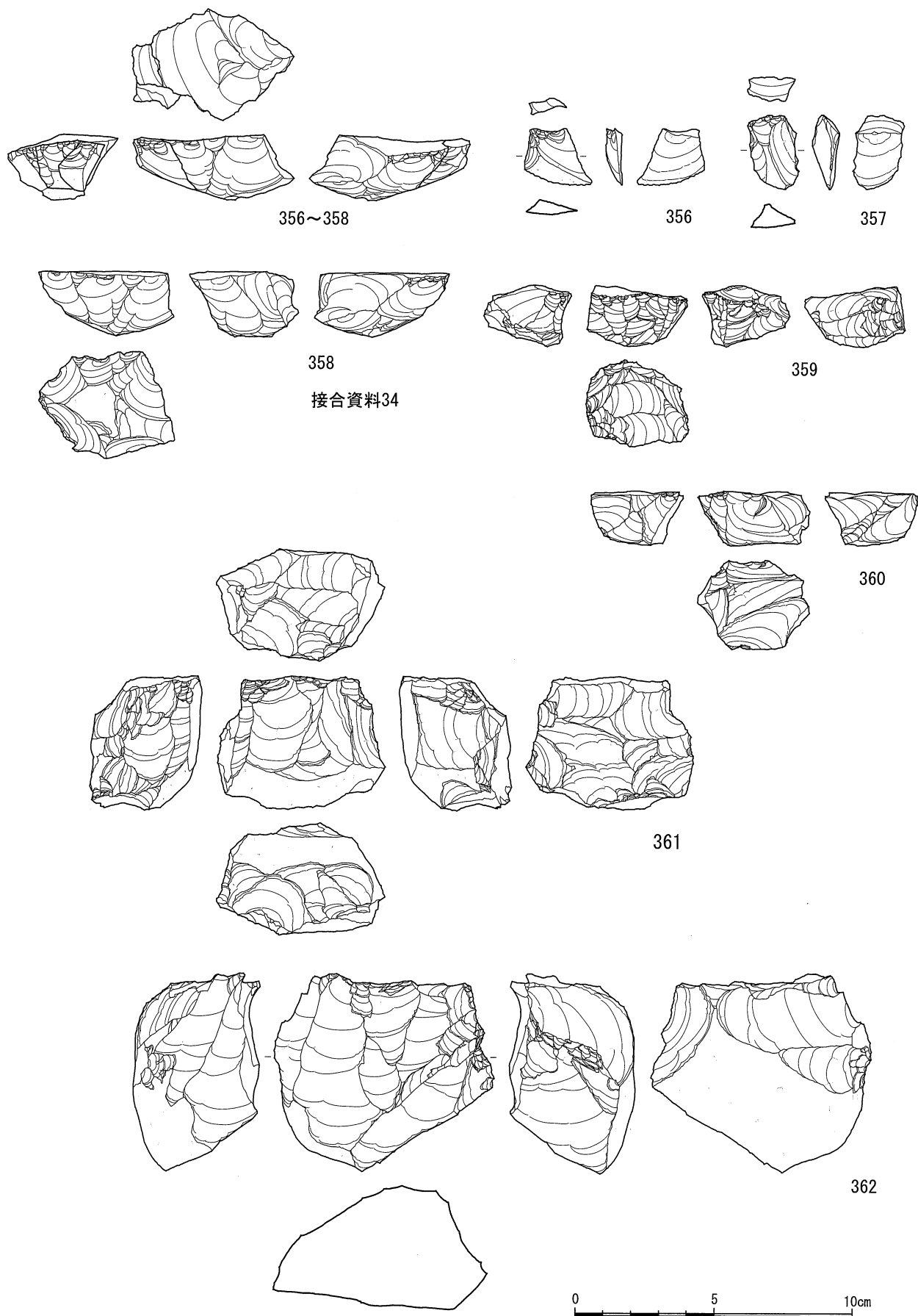
この他、各種剥片を剥離する接合資料が多く出土している。348・349（接合46）は一打面から縦長剥片を剥離する。最終的に剥離した剥片のいくつかは、剥離が抜けきれず階段状剥離となっている。351・352（接合47）の石核は分割面に挟まれ、結果、得られる剥片は先細りの縦長剥片となる。353～355（接合36）は節理面で分割された礫を用いる。剥片剥離は平滑な節理面を打面とし、打面調整を介しながら石の目に沿って進んでいる。得られた剥片は末端に礫面を持つ幅広剥片である。356～358（接合34）は、搔器あるいは角錐状石器製作にあたった可能性、剥片素材の石核から小形不定形剥片を剥離する可能性の両者を残す。363～365（接合50）は、打面を適宜入れ替えつつ縦長剥片を剥離する。367～369（接合51）は、打面を適宜入れ替えつつ様々な剥片を剥離する。370～373（接合35）の石質は不均一であり、剥片剥離もそれに翻弄される。ランダムに様々な剥片を剥離する。380～385（接合37）は、最終的に残った石核から、周縁よりランダムに不定形剥片を剥離する。386～395（接合41）は、小形薄手の不定形剥片を剥離する。まずある打面より連続して剥離され（剥離群1）、次いでその剥離面を打面に剥離する（剥離群2）。この剥離群1・2まではその単位が終了するまで打面は変わっておらず、また打面調整もない。その後、打面を固定することなく石核周縁より打面・作業面を入れ替えつつ剥離が進行する（剥離群3）。396～412（接合42）は節理によって分割された大形剥片から剥離する。打面は平滑な節理面のままで剥離前の調整はない。また、剥離の抜けた先も節理面であり、結果、長さ最大で5～6cmの幅広剥片を連続して剥離する。節理も多

く石質は不均質であり、また石の目に直交して剥片剥離することから、得られた剥片にはイレギュラーな折損が一定量見られる。413～424（接合43）は15×10×10cm大の亜円礫から剥離される。資料からは打面作出が十分でなく、かつ石の目に逆らった剥片剥離に終始するため、得られた剥片もまた不整である。425～427（接合49）、428・429（接合48）は石核周縁よりランダムに様々な剥片を剥離する。430～437（接合40）は拳大以下の亜円礫を用いる。石質は緻密で良質のものである。剥片剥離はある程度打面を固定しつつも適宜打面を入れ替えて進められる。打面調整はほとんど行わない。剥離された剥片はいずれもやや厚みある不定形剥片で、いくつかには二次加工が施される。438～440（接合53）は剥離接合である。1枚は剥離の衝撃で二分される。441～443（接合39）は剥離の衝撃で3分割した剥片である。444～446（接合38）は縦長志向の不定形剥片の剥離接合である。447・448（接合32）は石核よりランダムに様々な剥片を剥離する。449・450（接合31）は石核周縁より内に向かって小形薄手の剥片を剥離する。453～455（接合33）の石質は不均一であり、剥片剥離もそれに翻弄される。ランダムに様々な剥片を剥離する。

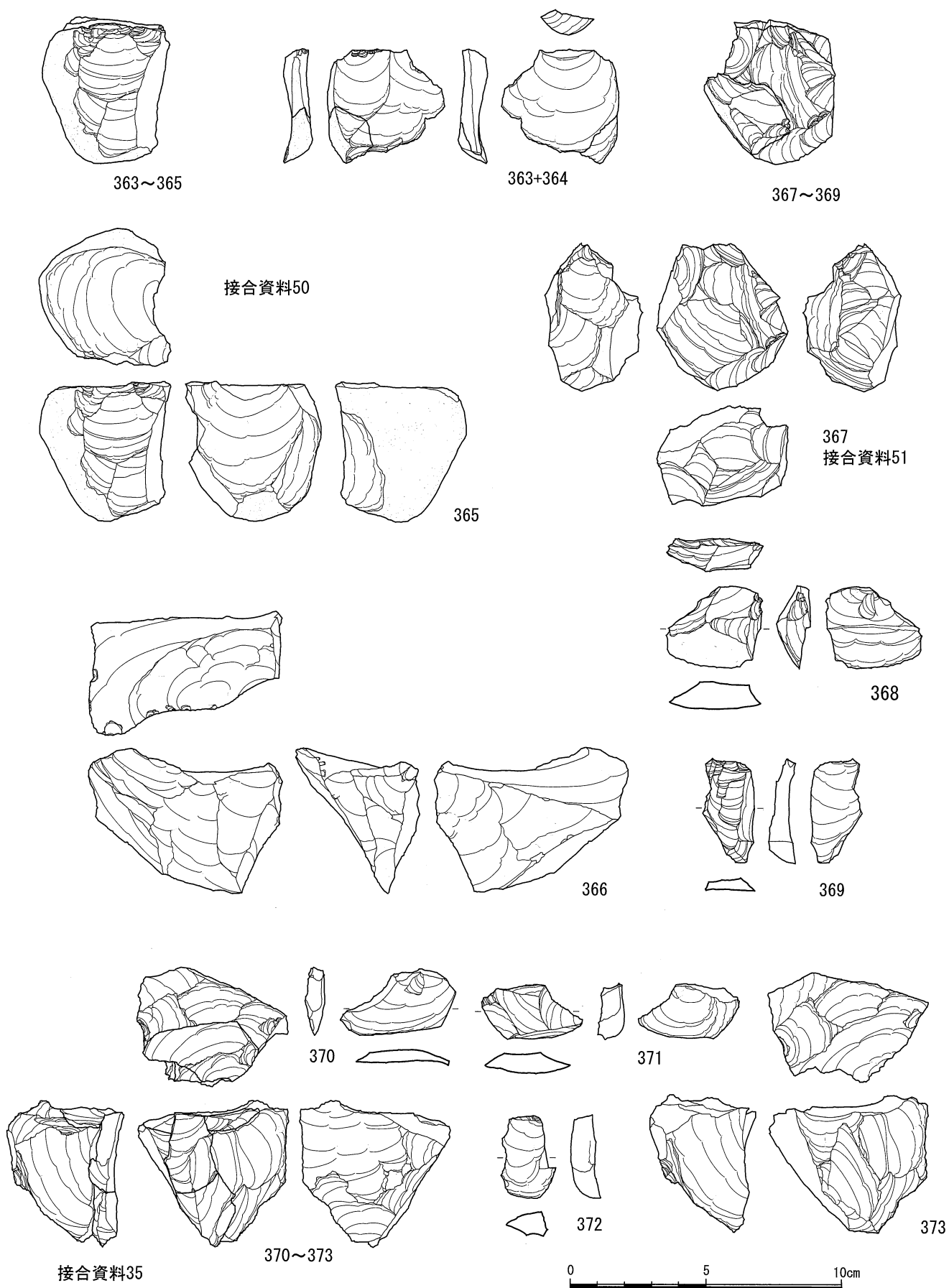
#### （4）VI層石器群（第34・35・54図）

細石刃石器群である。層位的にはV～VII層にまたがって出土した。細石刃（509～511）はすべて桑ノ木津留産黒曜石製である。細石刃核のうち、512は細石刃核でない可能性を残す。513は夾雑物の多い黒色の黒曜石製である。分厚い剥片素材で、石核整形の後、打面調整なく細石刃を剥離する。

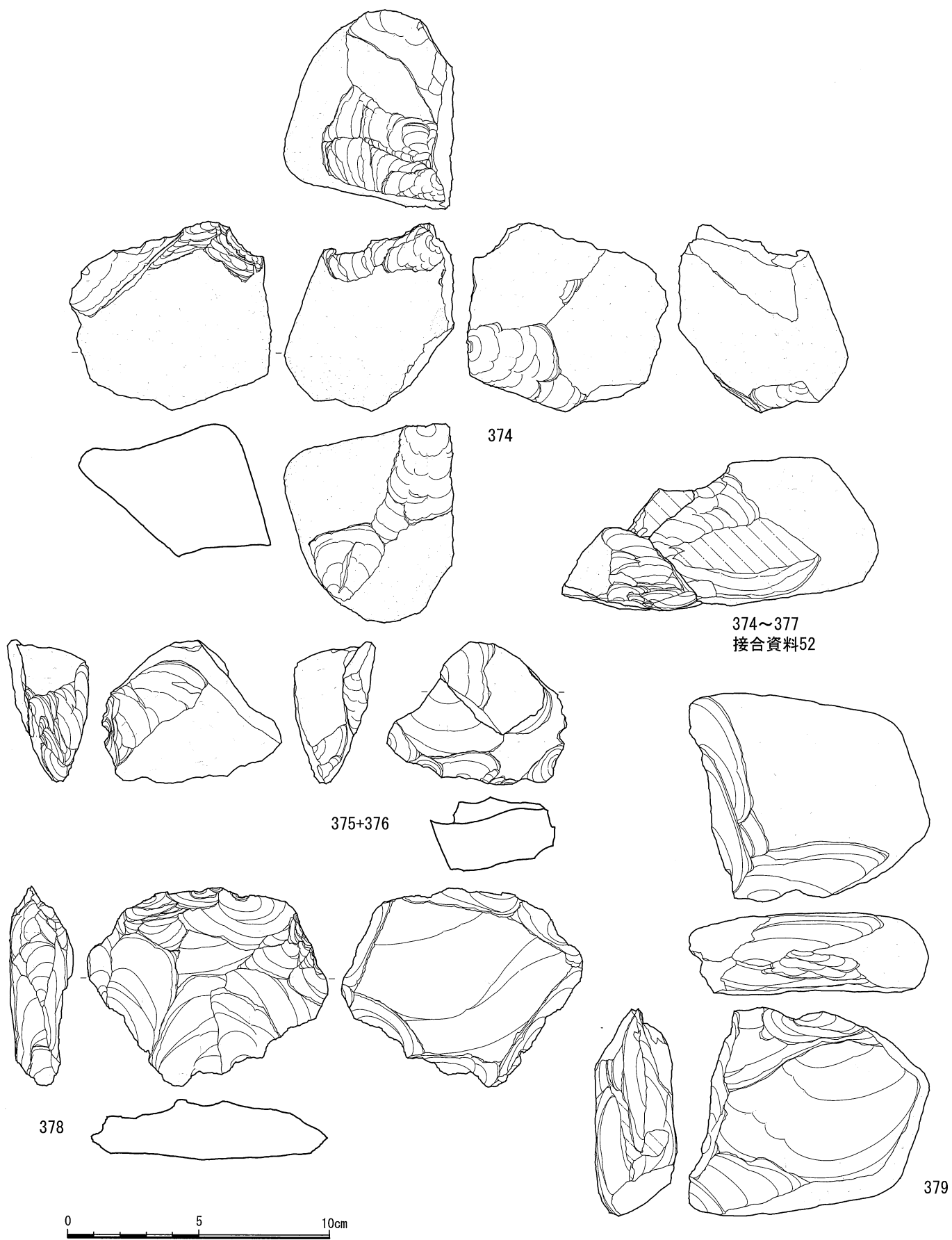
なお、294+295の搔器製作に関わる接合資料、夾雑物を多く含む黒色黒曜石製剥片（317+318）、チャート製剥片（319+320）は細石刃石器群あるいはそれ以降に伴う可能性を残す。



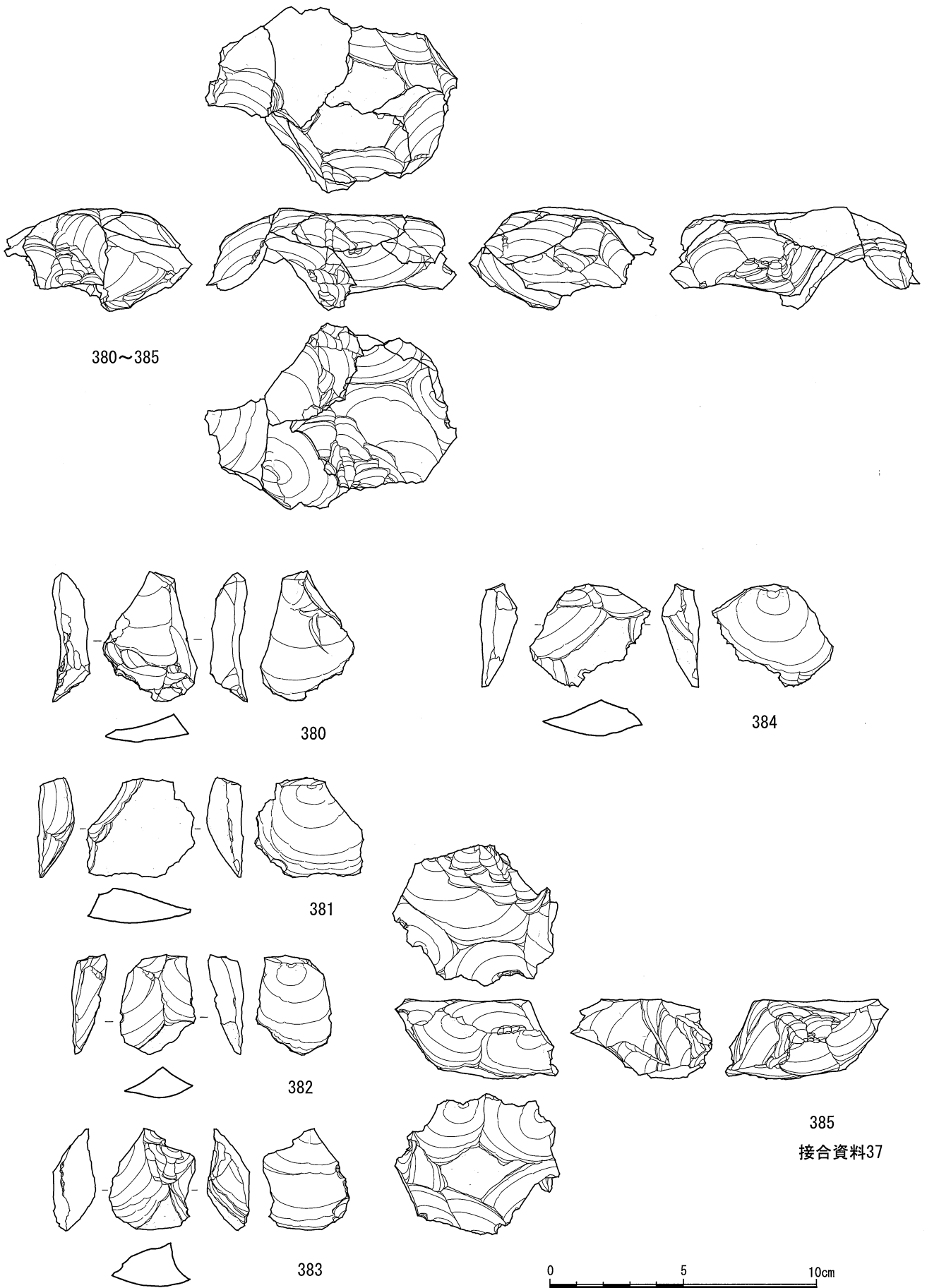
第39图 C区出土旧石器遗物实测图(10) (S=1/2)



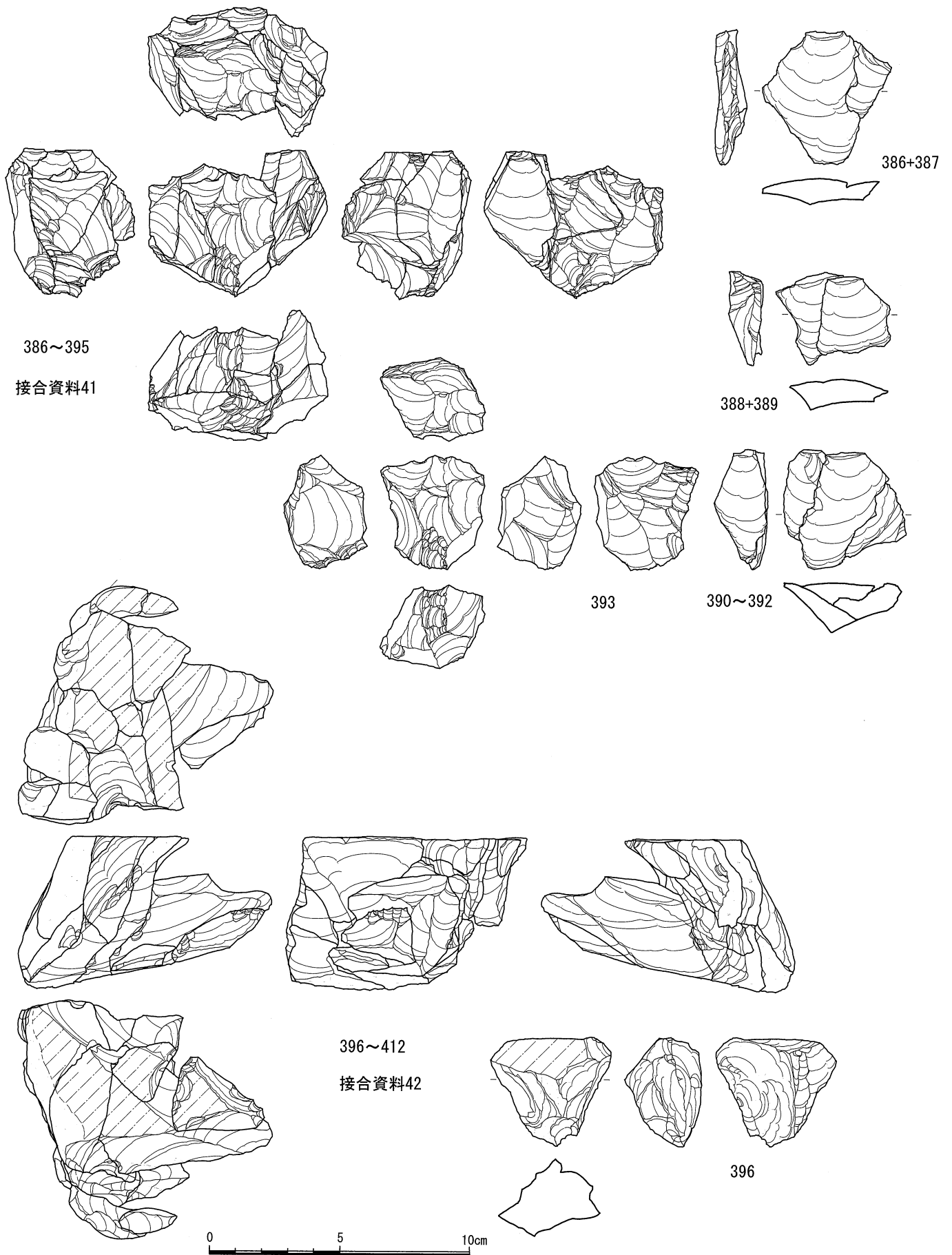
第40图 C区出土旧石器遺物実測図(11) (S=1/2)



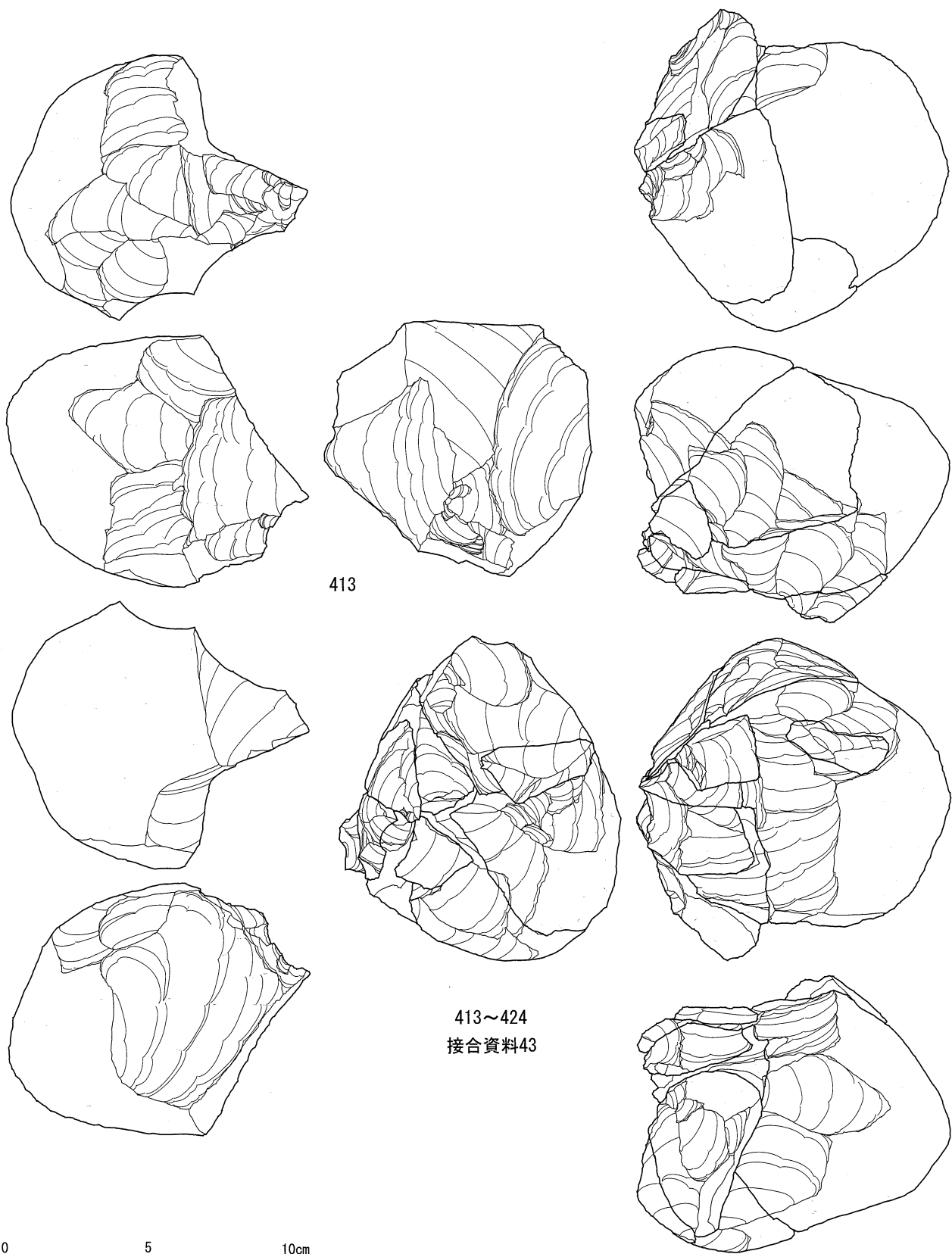
第 41 图 C 区出土旧石器遺物実測図 (12) (S=1/2)



第 42 图 C 区出土旧石器遺物実測図 (13) (S=1/2)

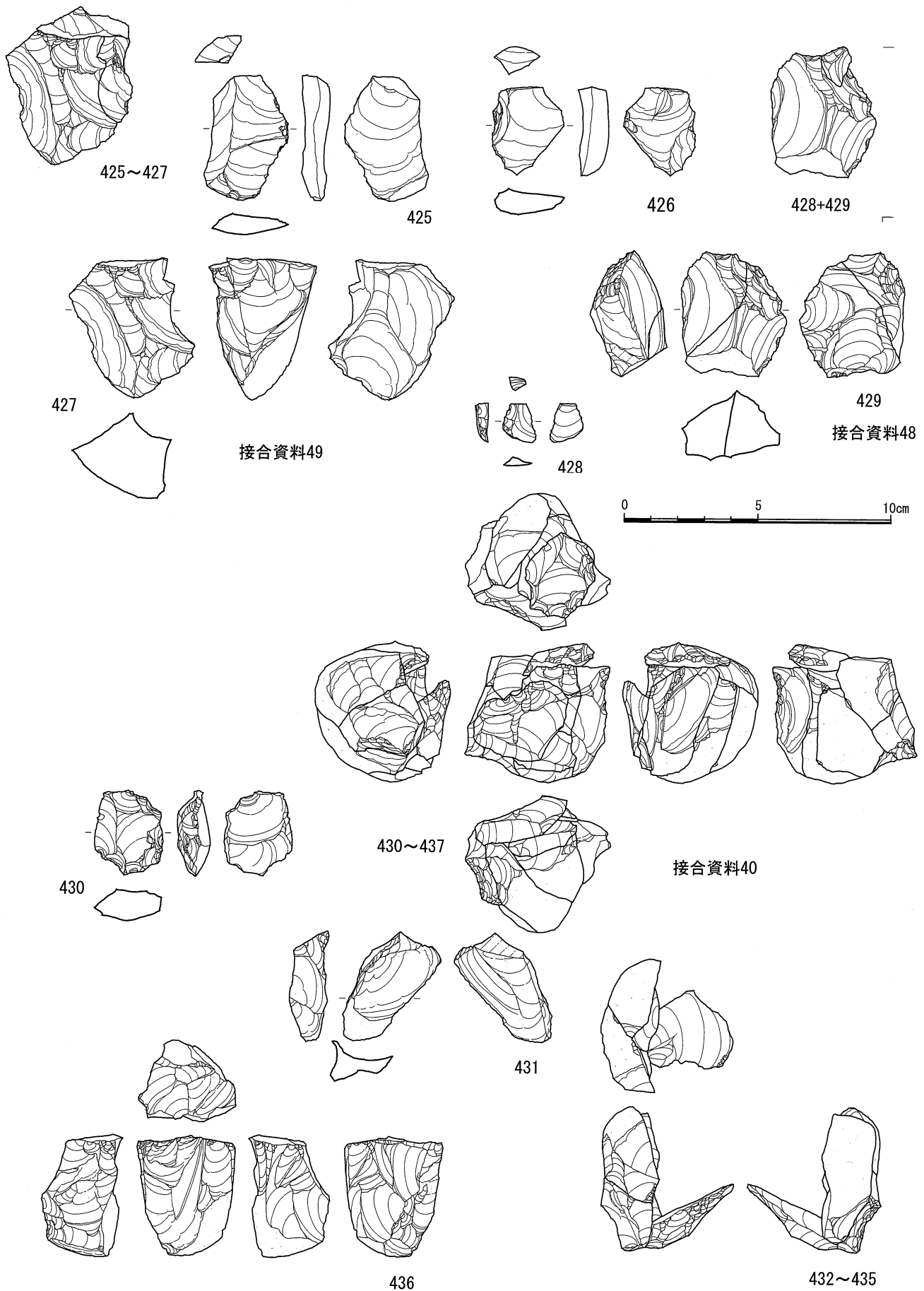


第 43 图 C 区出土旧石器遗物实测图 (14) (S=1/2)

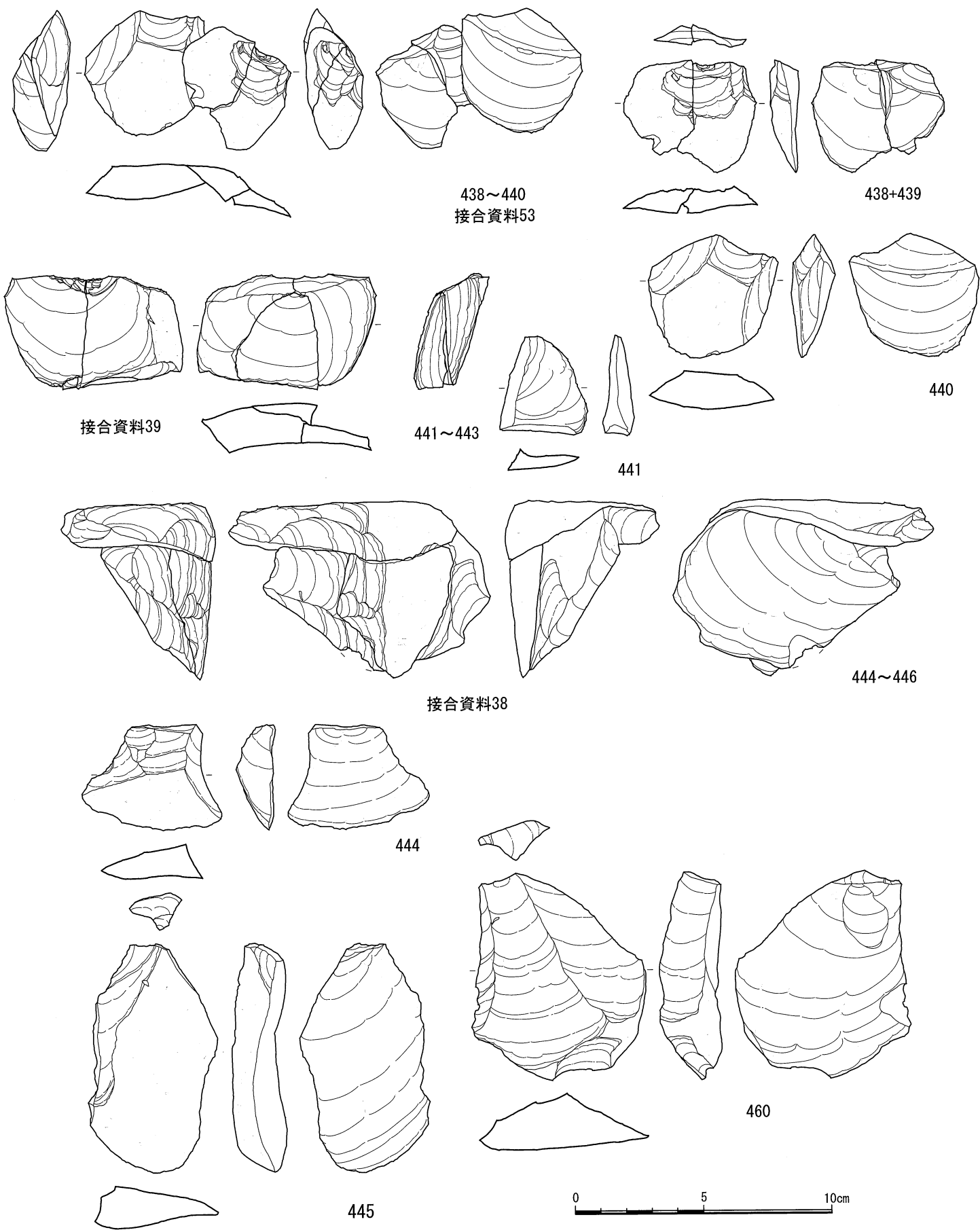


第44图 C区出土旧石器遺物実測図(15) (S=1/2)

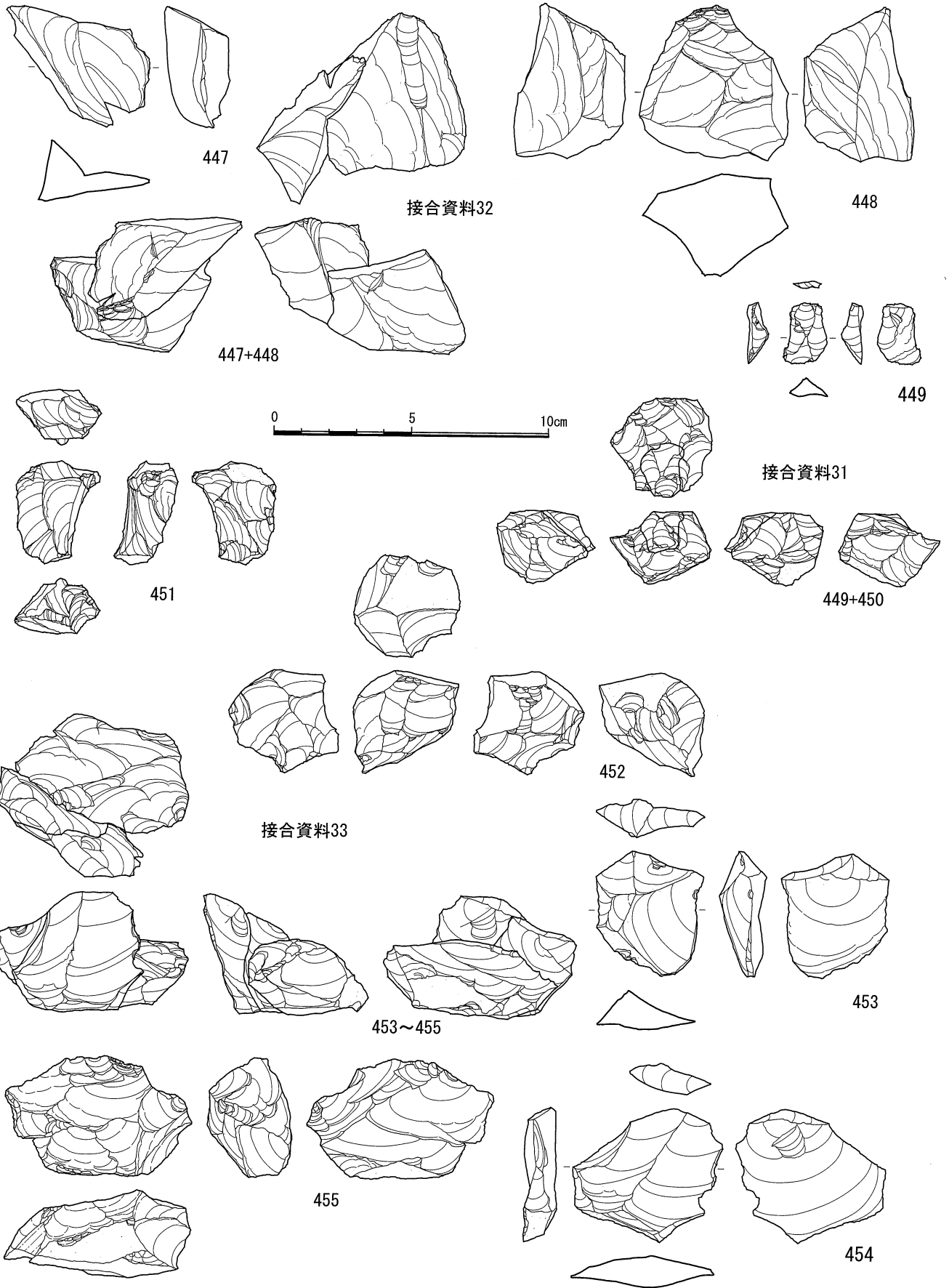




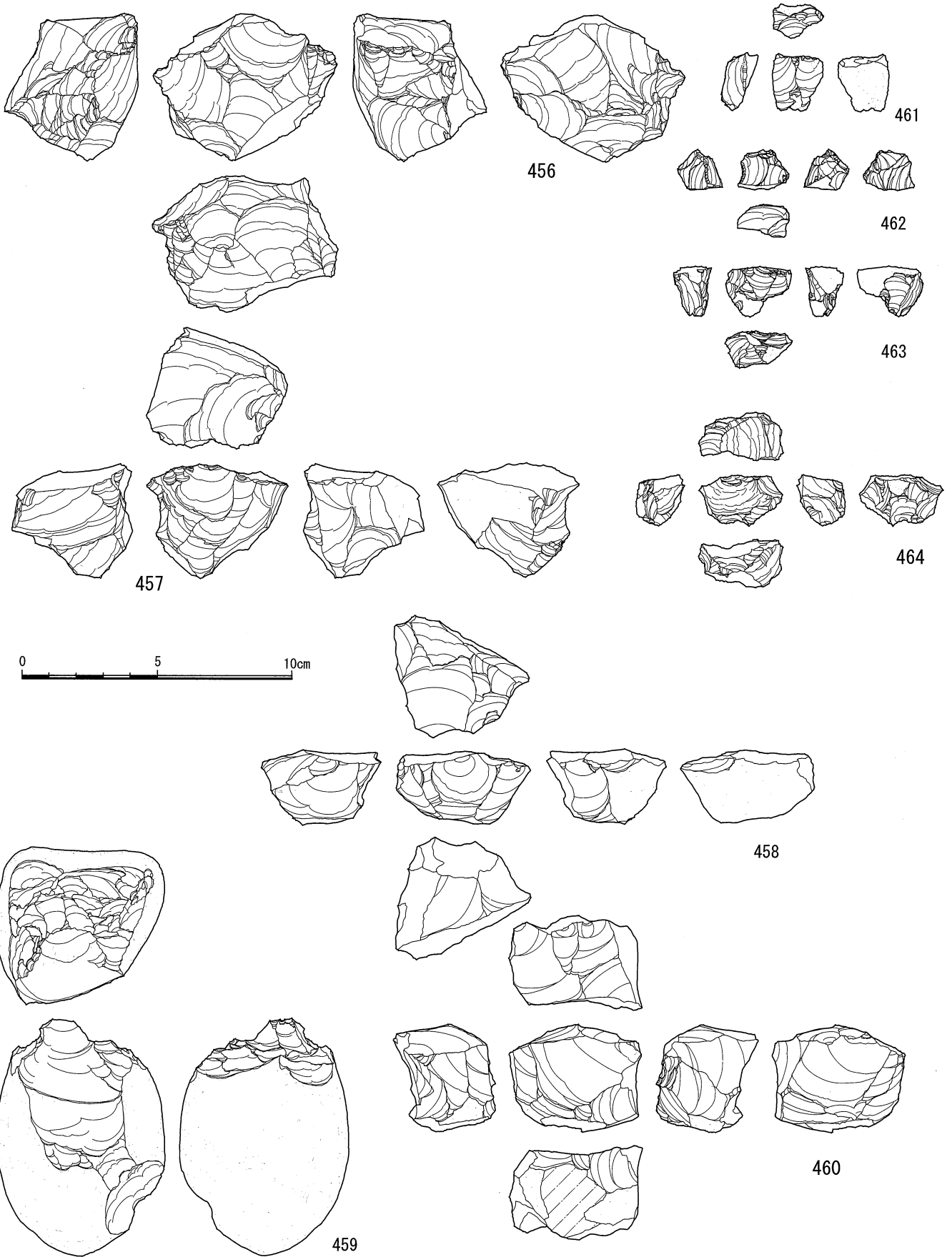
第 45 图 C 区出土旧石器遺物実測図 (16) (S=1/2)



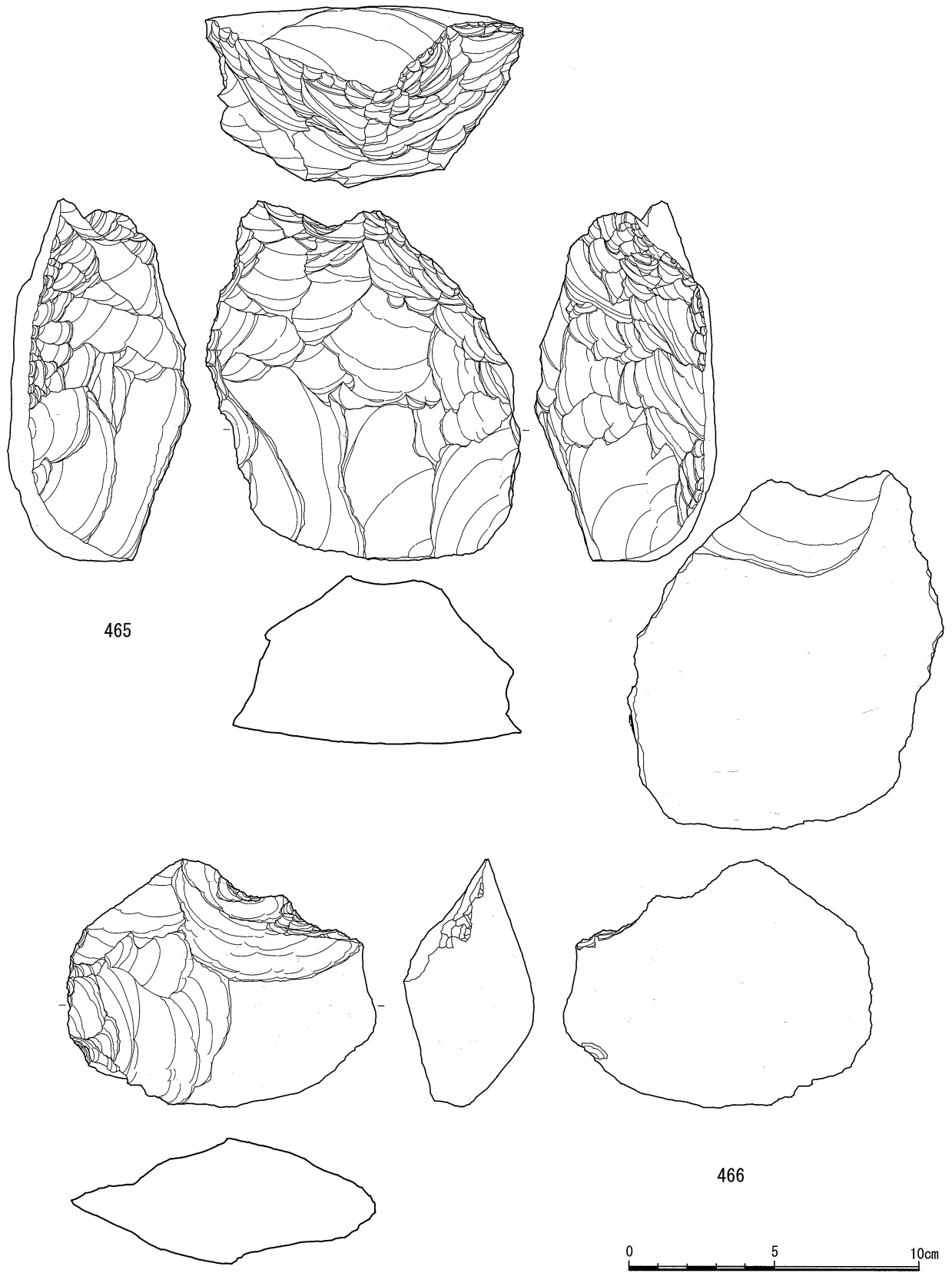
第 46 图 C 区出土旧石器遺物実測図 (17) (S=1/2)



第 47 图 C 区出土旧石器遺物实测图 (18) (S=1/2)



第 48 图 C 区出土旧石器遺物実測図(19) (S=1/2)

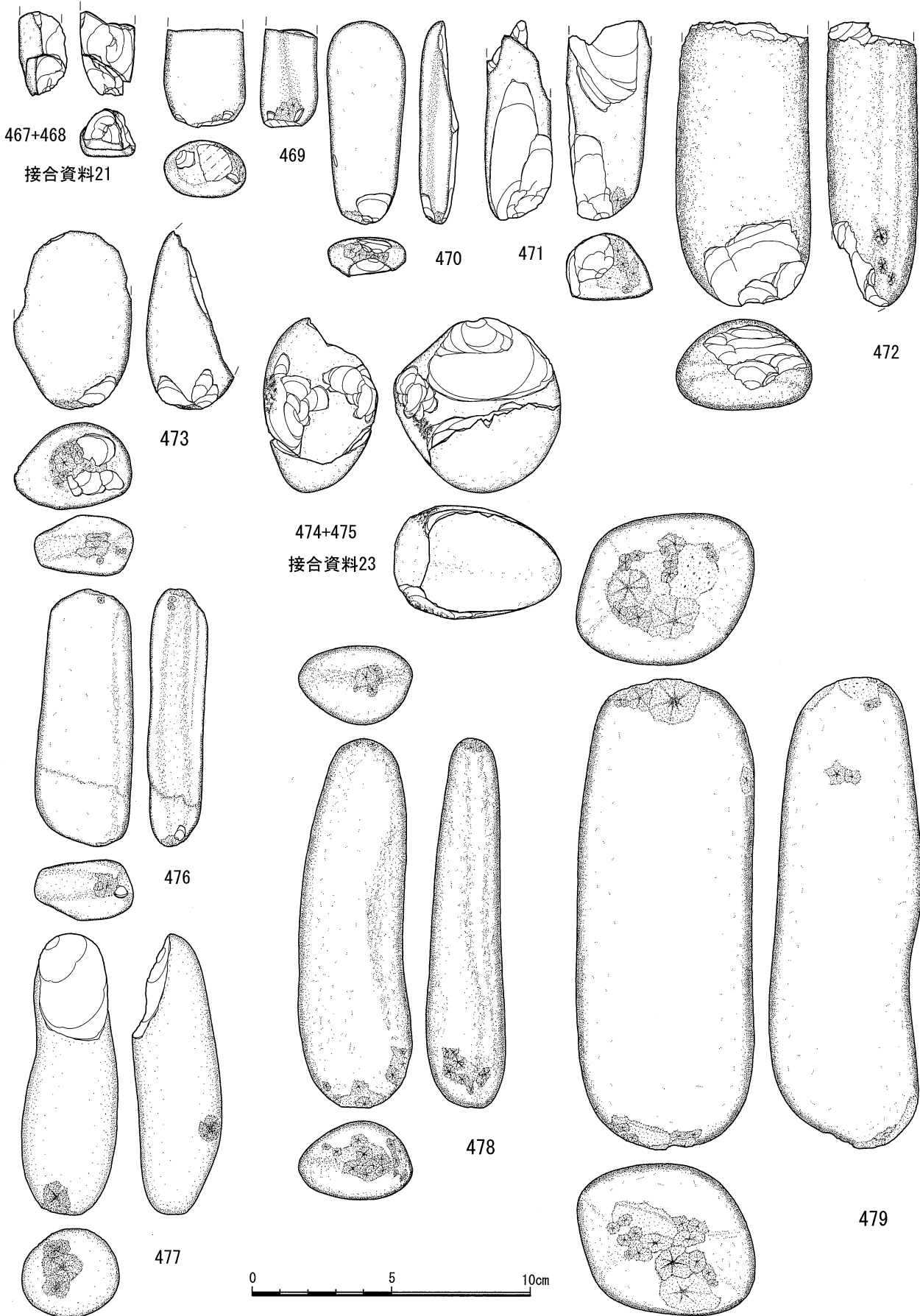


465

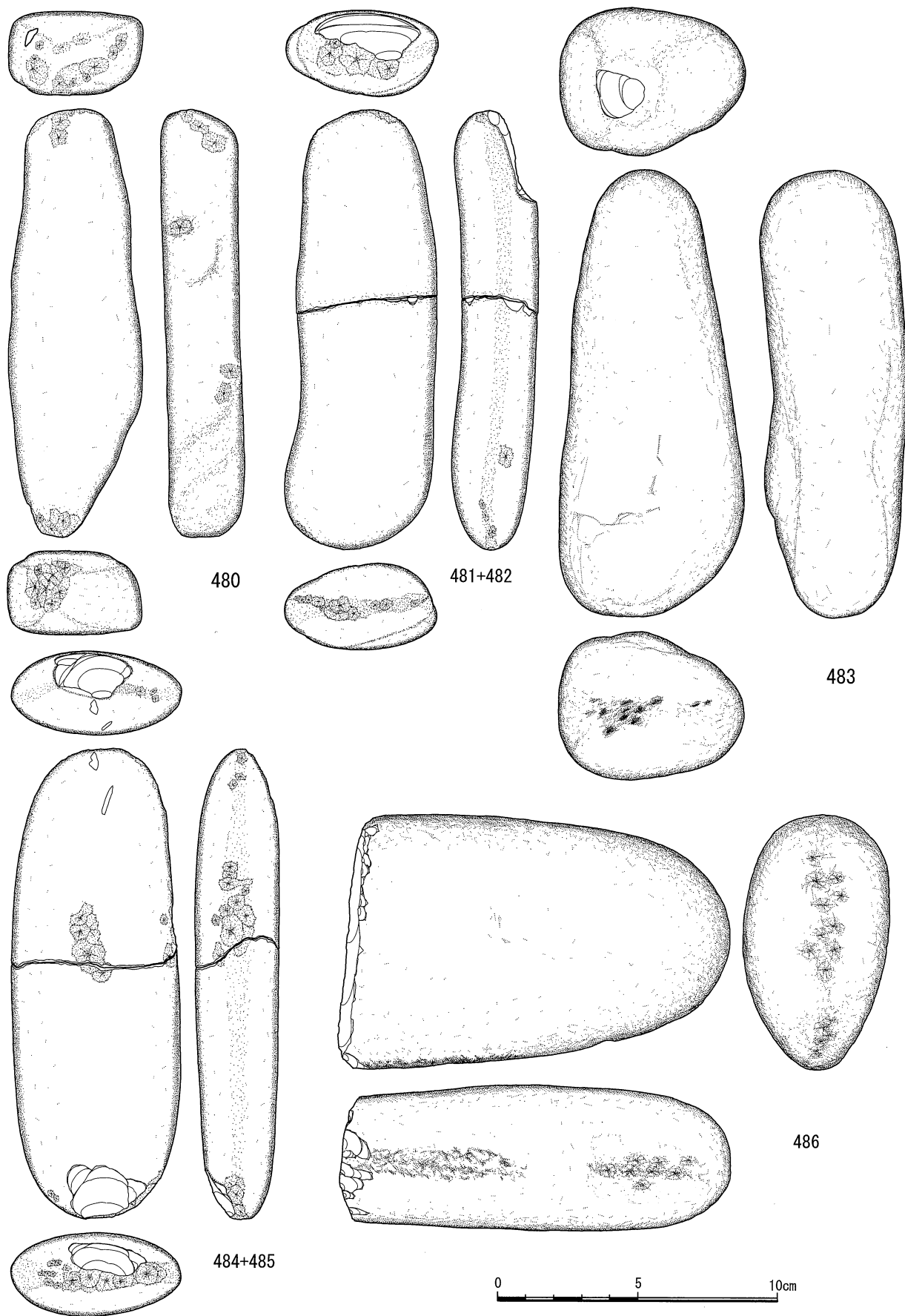
466

0 5 10cm

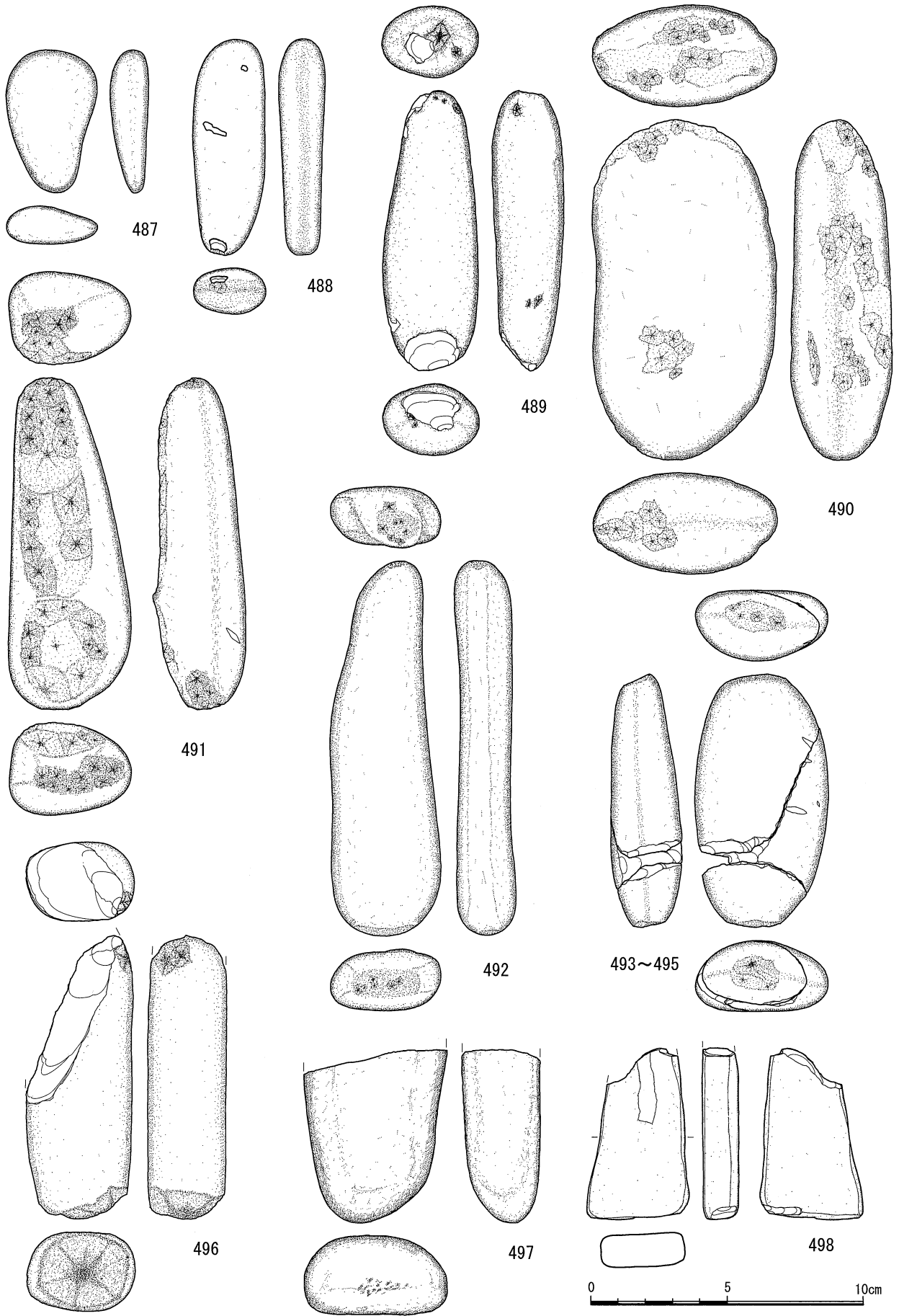
第 49 图 C 区出土旧石器遗物实测图 (20) (S=1/2)



第50图 C区出土旧石器遺物実測図(21) (S=1/2)

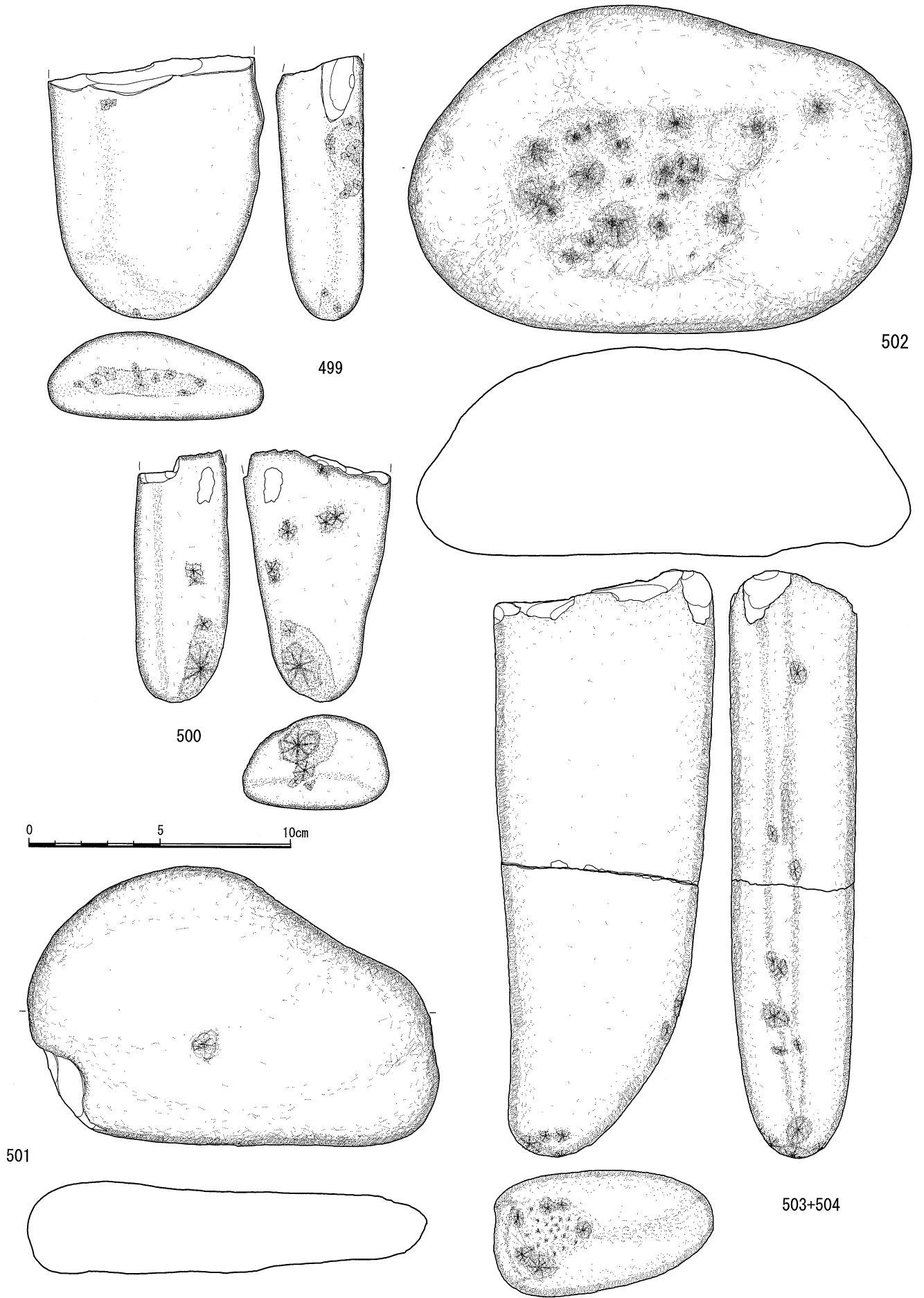


第 51 图 C 区出土旧石器遗物实测图 (22) (S=1/2)

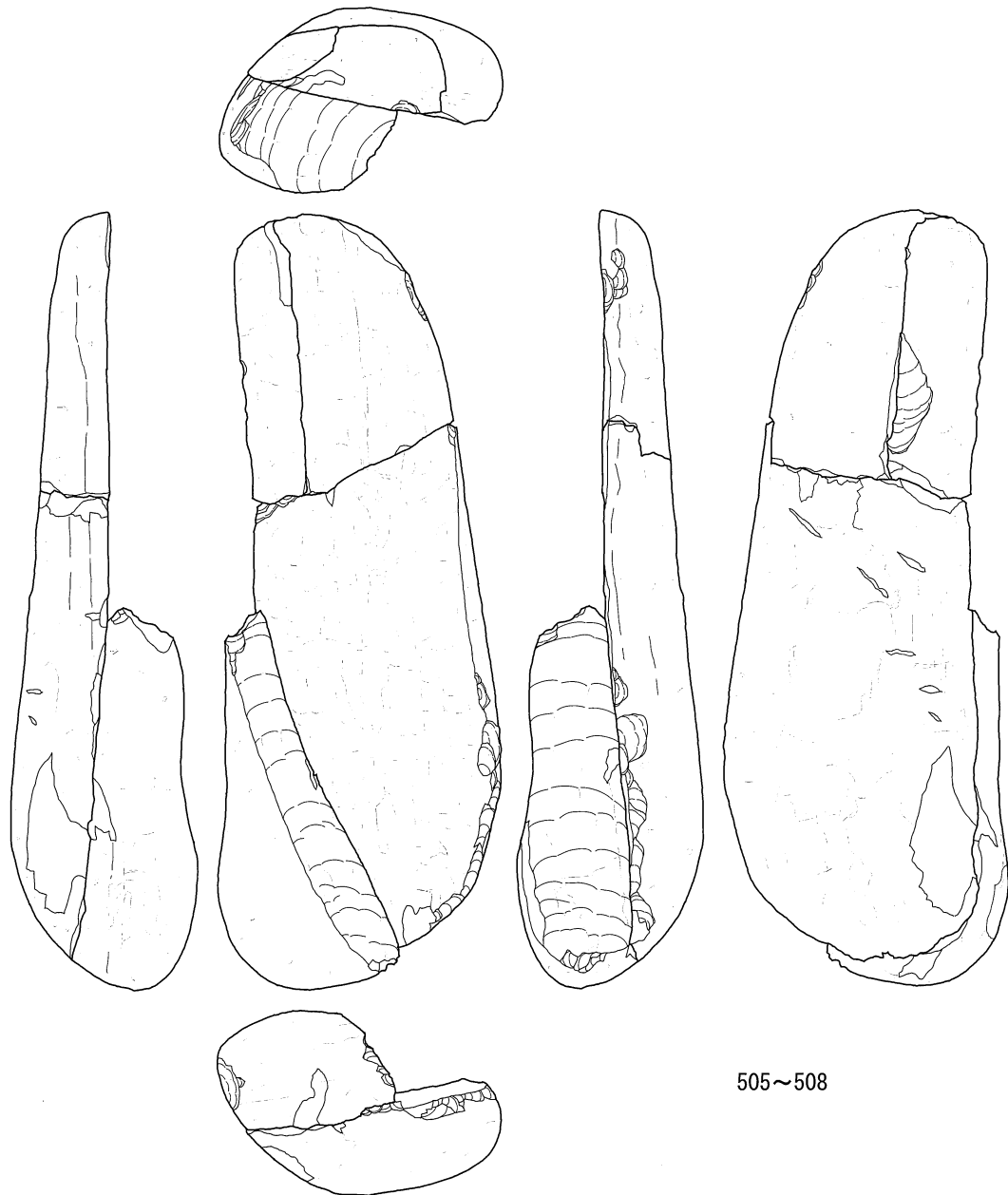


第 52 图 C 区出土旧石器遗物实测图 (23) (S=1/2)





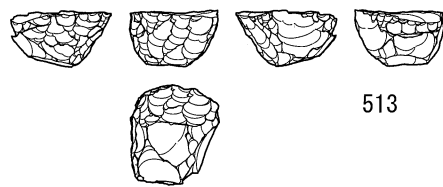
第 53 图 C 区出土旧石器遺物実測図 (24) (S=1/2)



505~508



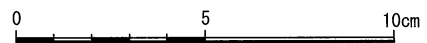
512



513



514



第54图 C区出土旧石器遗物实测图(25) (S=1/2)

### 第3節 旧石器時代 (D区)

#### (1) 地形と遺構・遺物分布

D区は西側の丘陵から東側に向かう緩斜面である。

D区の礫・石器の分布は、地形の傾斜方向に沿って礫・石器が帯状に流れたようなあり方を見せている。特にA30グリッドからD31グリッドにかけて・A32グリッドからC34グリッドにかけて帯状に延びる礫・石器の集中は特徴的である。また、A32・B30・E31グリッドでは石器集中と礫分布が重複する。一方で、A35・ニ33グリッドの石器集中やニ36の礫集中のように、それぞれ礫・石器の集中と重複しないものも見られる。

#### (2) X層石器群 (第69図)

515～524 (接合75) がある。垂円礫を分割した厚手の剥片から剥片剥離する。打面調整等の剥離前準備はなく、前の剥離面をそのまま打面として小形不定形剥片の剥離を進めている。これらは台形様石器等の素材獲得にあたったものと推定される。

#### (3) VIII a層石器群 (第70～79図)

複数石材にまたがる横長剥片素材のナイフ形石器・流紋岩製台形石器・少量の角錐状石器・敲石の他、各種剥片・石核等がある。接合資料も豊富で、活発な剥片剥離が見られる。

ナイフ形石器 (527～529・533)・接合67・71・72に代表される風化面がきなこ状をする頁岩源ホルンフェルスから、横長剥片素材のナイフ形石器が数多く生産される。599・600 (接合72) は、剥離の衝撃で二分されてしまった石核の接合である。末端の捲れた厚手の剥片打面側から、山形打面を作り出しつつ連続して横長剥片を剥離する。609～612 (接合71) は剥離接合である。資料背面には礫面が残る。本資料は剥離の進め方や石材の共通性からみて、横長剥片生産にあたった剥片剥離のうち打面作出に伴う剥片剥離と見てよからう。631～633 (接合67) は、分厚い剥片素材の石核で、山形に打面を作りつつ横

長剥片を剥離する。なお、未報告資料中にも同一母岩で横長剥片生産に関わる資料がある。

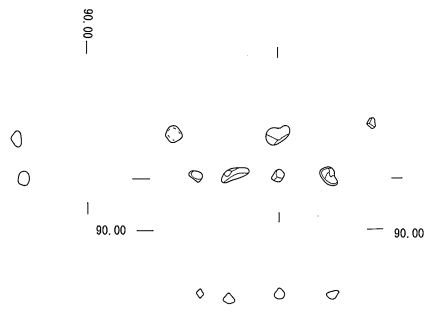
横長剥片の生産は風化面がきなこ状をする頁岩源ホルンフェルス以外でも進められる。605～608 (接合73) は、末端の大きく捲れた分厚い剥片から剥離する。剥片打面側から、目的剥片剥離用の山形打面が作り出され、順次、横長剥片を剥離する。635～639 (接合70) は、背面に礫面を持つ分割礫から山形の打面を作りつつ横長剥片を剥離する。作業面幅は約10cm・高さ最大で約5cmである。これ以上横長剥片剥離を進めた場合、石核形状に規制を受けて得られる剥片が小ぶりになると予想され、これを理由に剥離を中止したのであろう。

この他、不定形剥片生産の一群がある。629・630 (接合59) は元の礫サイズ等が不詳である。ランダムに不定形剥片を剥離する。640～642 (接合60) はある程度打面を固定しつつ、石核周縁より不定形剥片を剥離する。663～667 (接合69) は厚みのある分割礫が用意され、その平坦な分割面に向かって周縁より不定形剥片を剥離するものである。668～673 (接合63) は剥片剥離の最終工程の資料である。節理が著しく、質の良くない石材である。剥片剥離も石質に影響されたと見られ、偶発的な剥離がある他、得られた剥片も一定でない。

#### (4) VII層石器群 (第74～80図)

複数石材にまたがる横長剥片素材の角錐状石器・流紋岩製台形石器・同製台形様石器・少量の横長剥片素材のナイフ形石器・削器・搔器・敲石の他、各種剥片・石核等がある。接合資料も豊富で、活発な剥片剥離が見られる。

流紋岩を用いた横長剥片素材のナイフ形石器生産がある (接合65・66)。601～604 (接合65) は、垂円礫から分厚い剥片を少なくとも2枚準備し、それぞれで山形打面を作り出した後、横長剥片を剥離する。ナイフ形石器1点を含む。613～622 (接合66) は、長さ15cm以上・幅は大きくても約15cm・厚み約5cmの潰れた丸餅様の垂円礫が用いられる。礫はまず3つの分厚



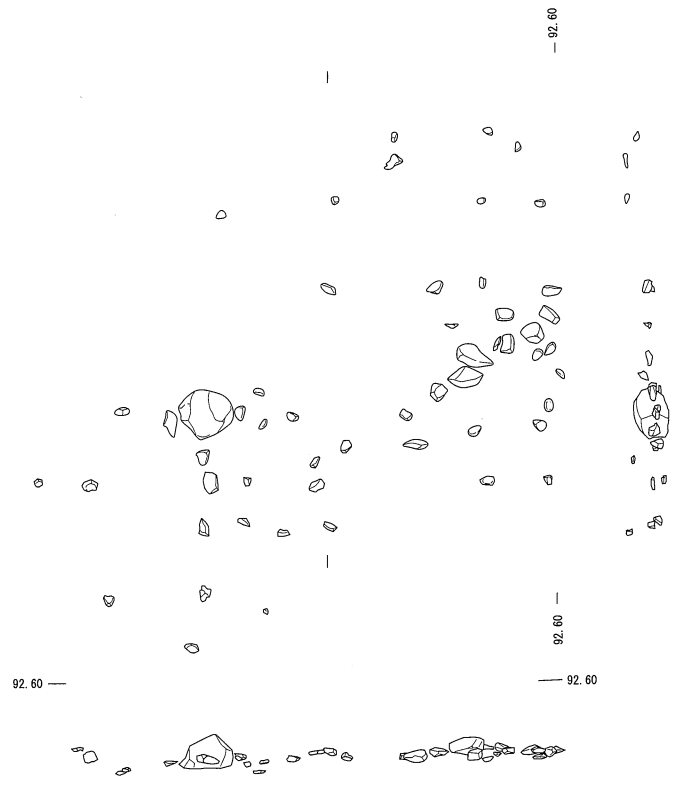
SI770



SI772



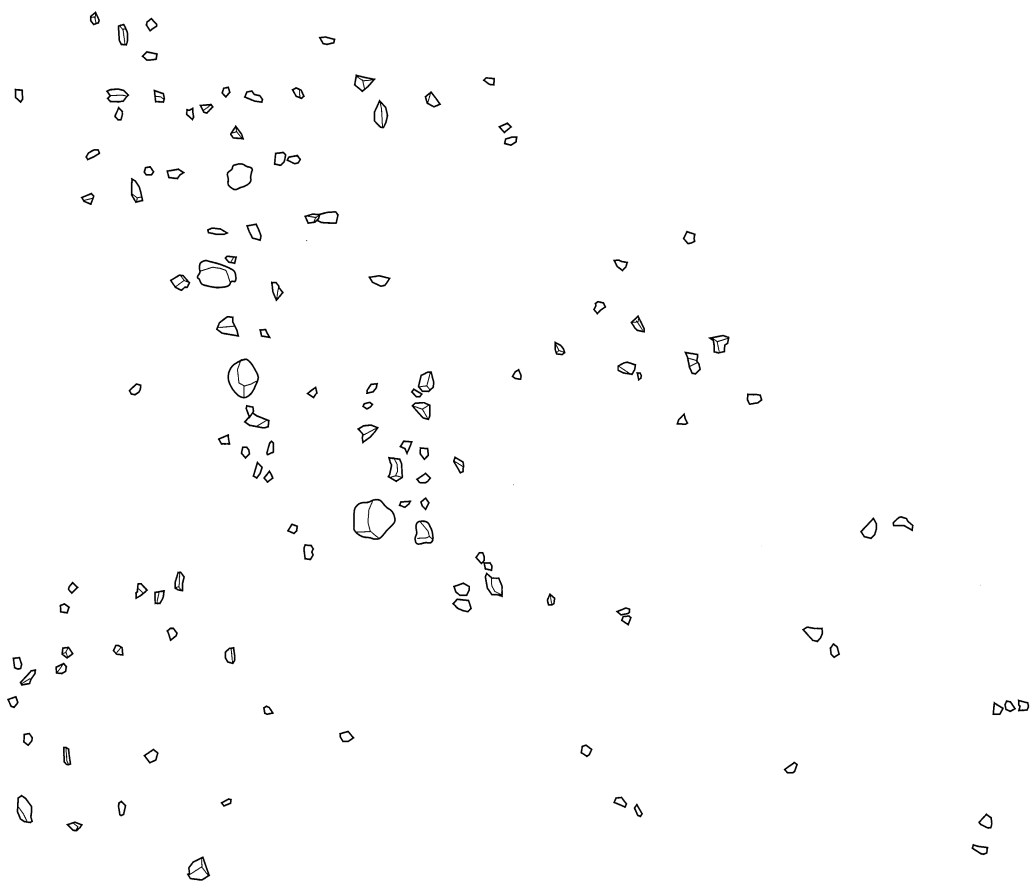
SI765



SI838



第 55 图 D 区検出礫群実測図 (1) (S=1/30)



SI846

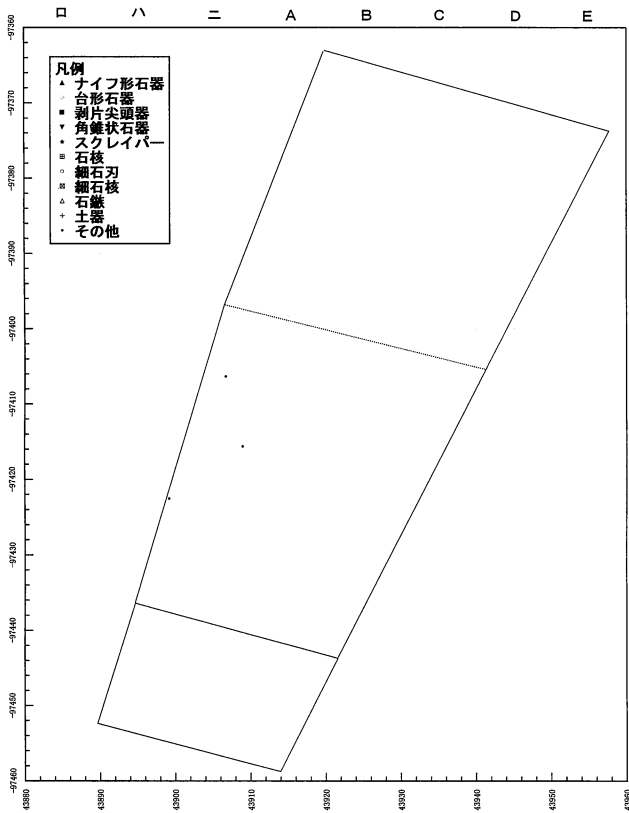


SI842

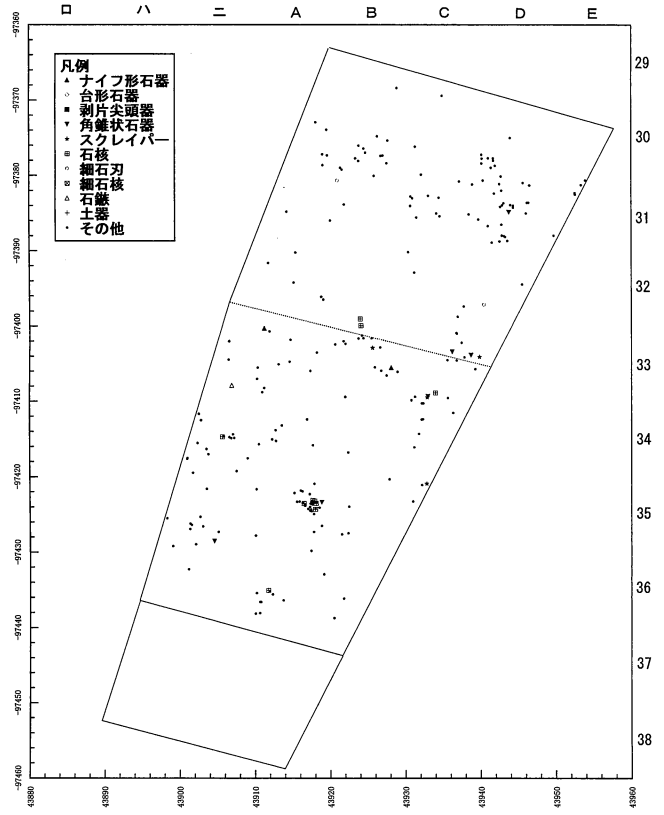
SI848



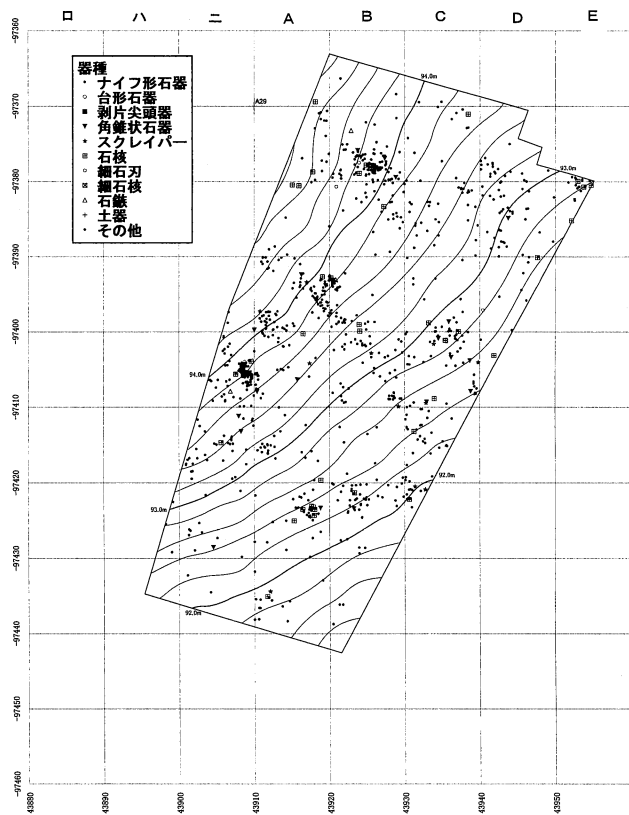
第 56 図 D 区検出礫群実測図 (2) (S=1/30)



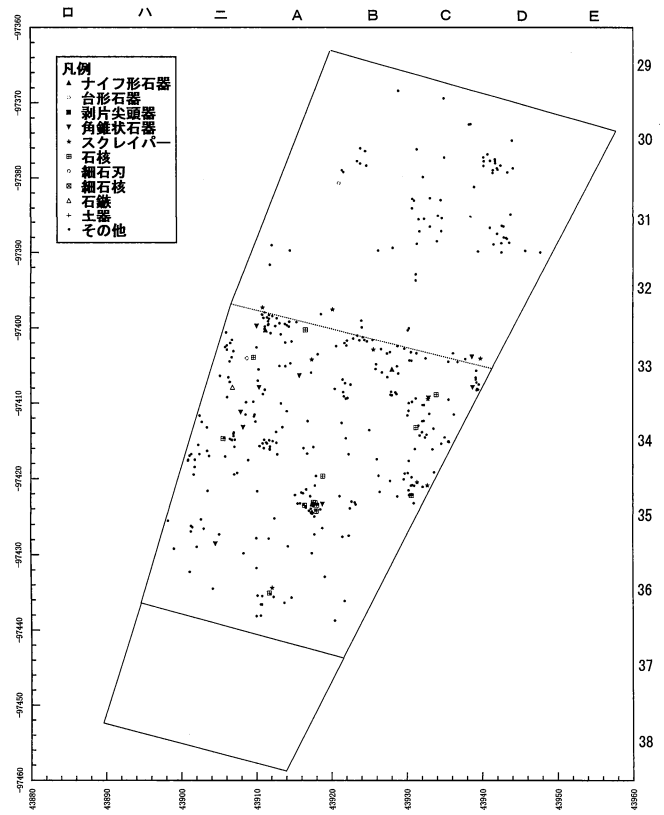
第57図 D区遺物分布図 (V層)



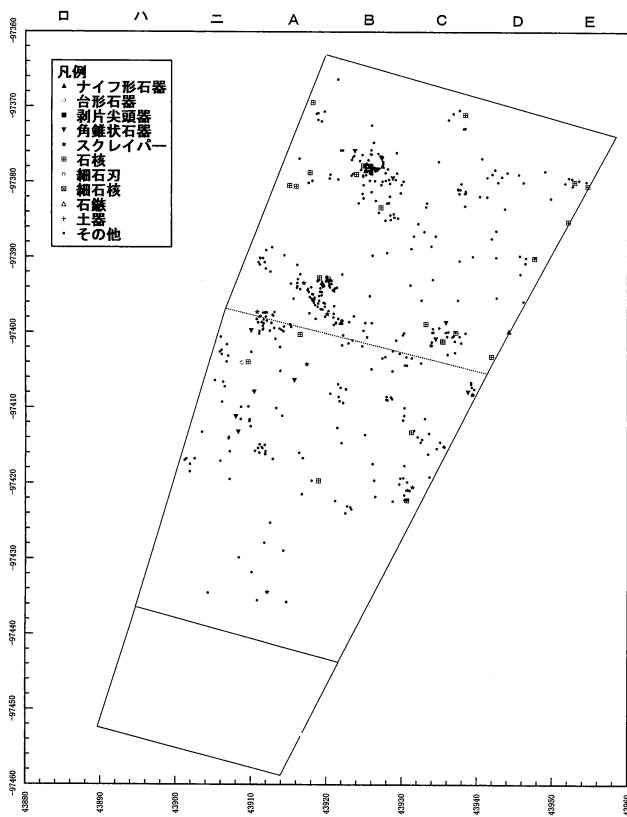
第58図 D区遺物分布図 (VI層)



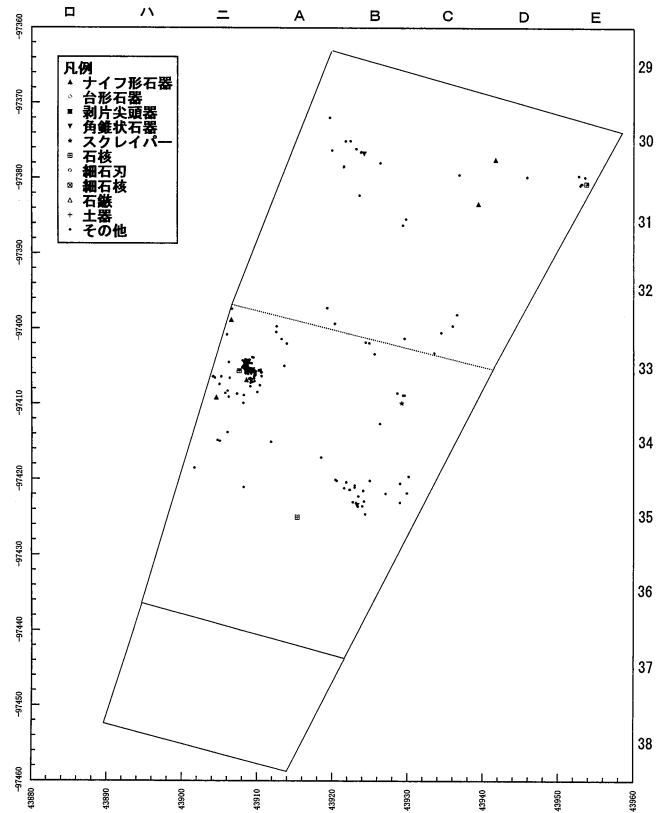
第59図 D区IVb層コンター



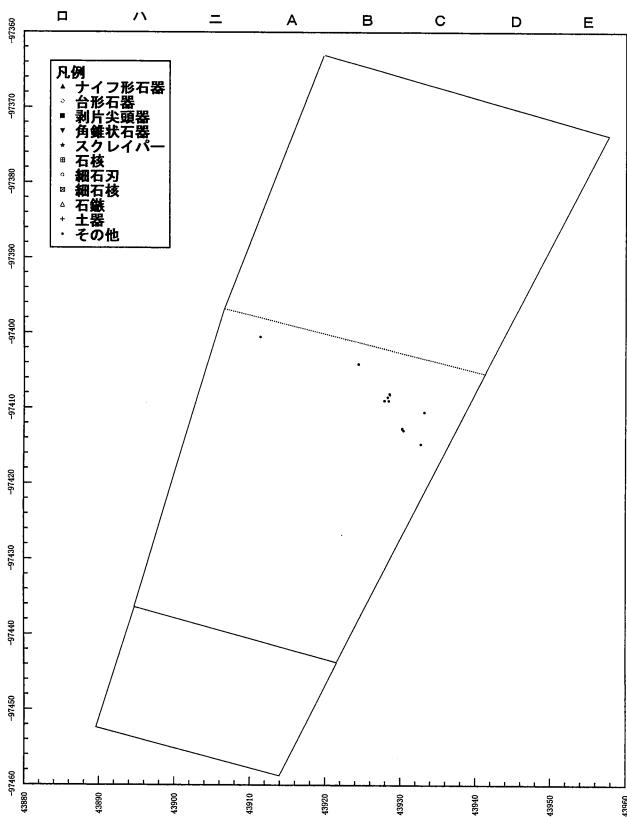
第60図 D区遺物分布図 (VI・VII層)



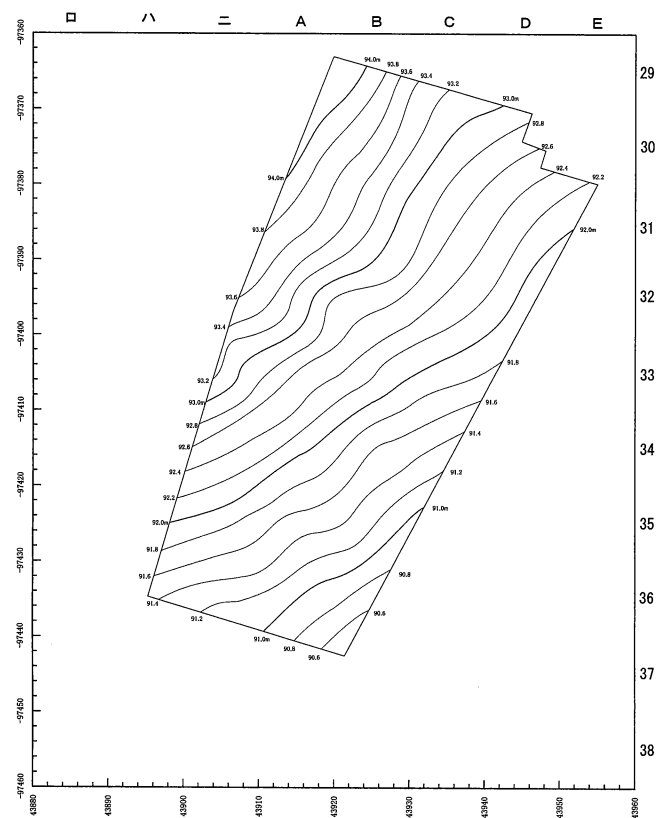
第61図 D区遺物分布図 (VII層)



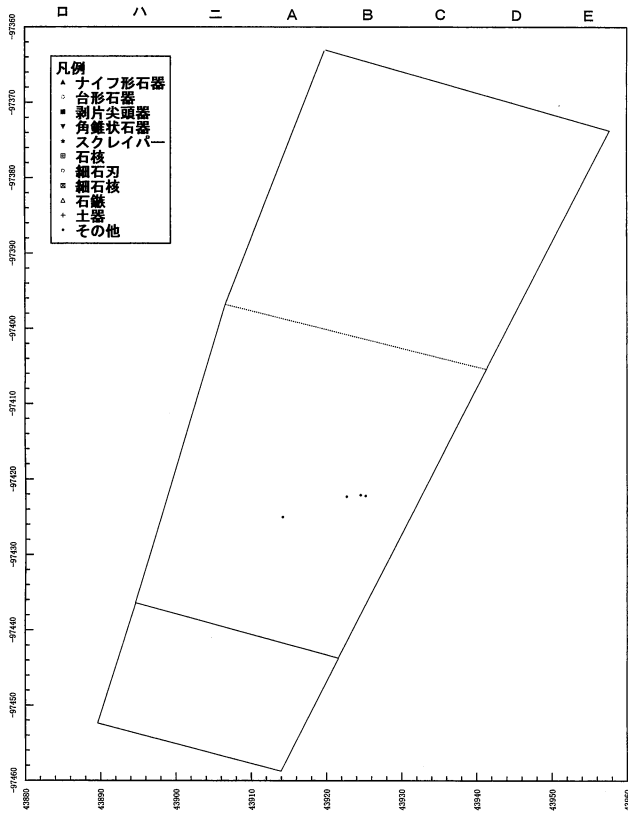
第62図 D区遺物分布図 (VIII a層)



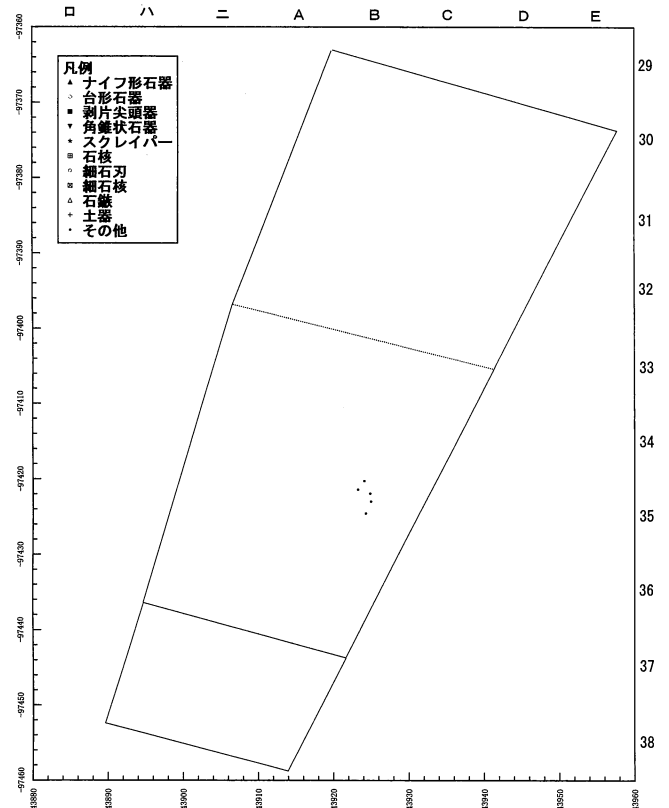
第63図 D区遺物分布図 (VIII b層)



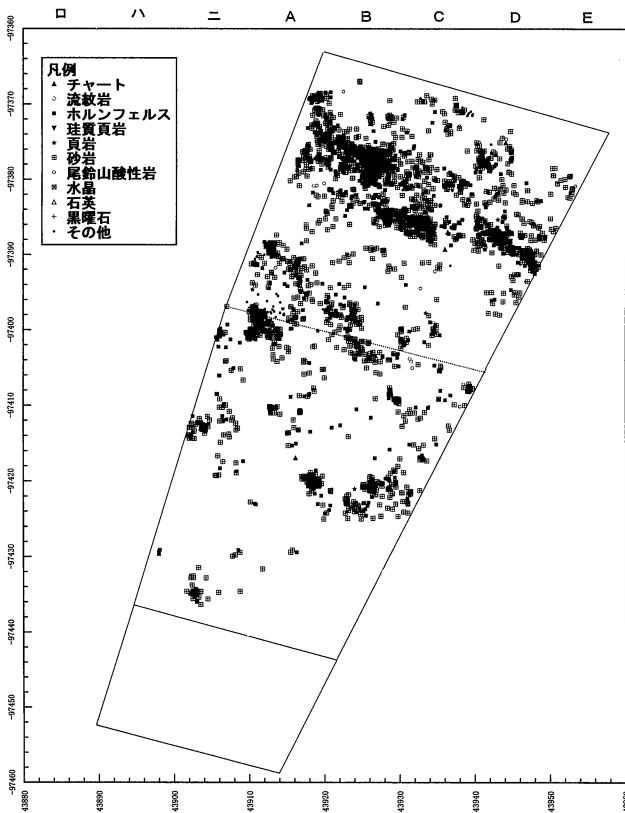
第64図 D区IX層コンター



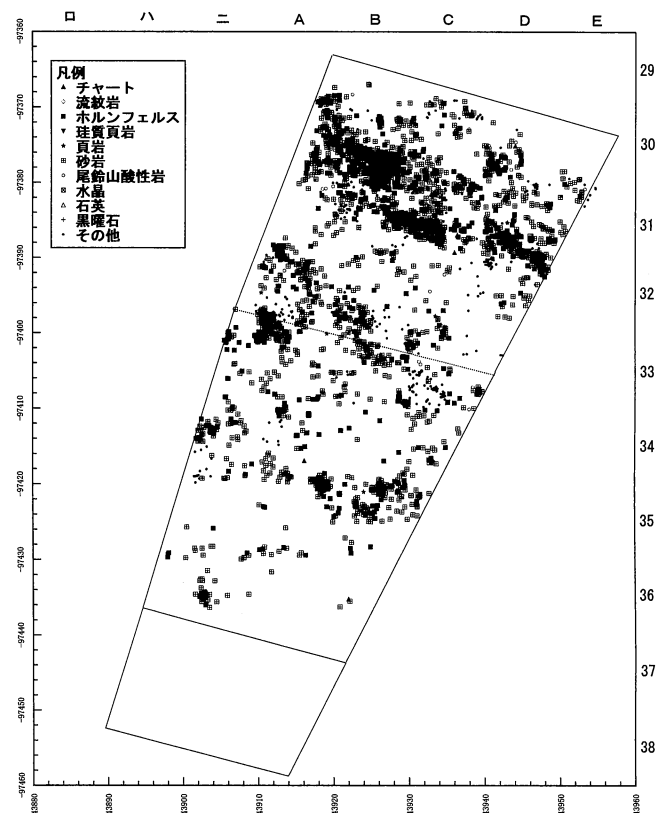
第 65 図 D 区遺物分布図 (IX層)



第 66 図 D 区遺物分布図 (X層)

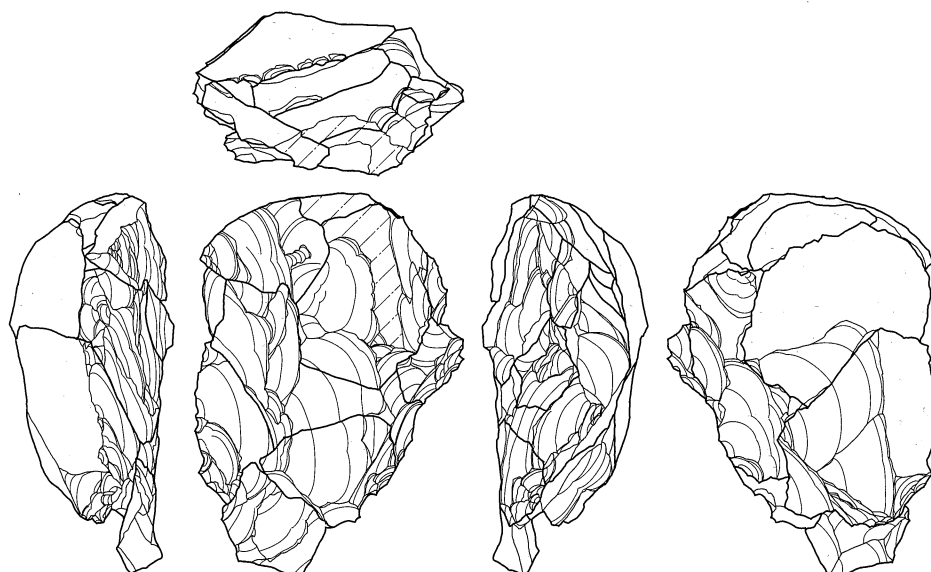


第 67 図 D 区礫分布図 (VI~VIII層)

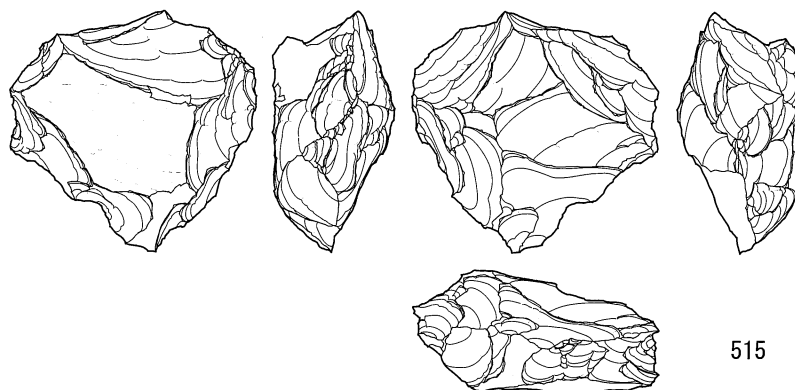


第 68 図 D 区礫分布図

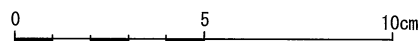




515~524



515

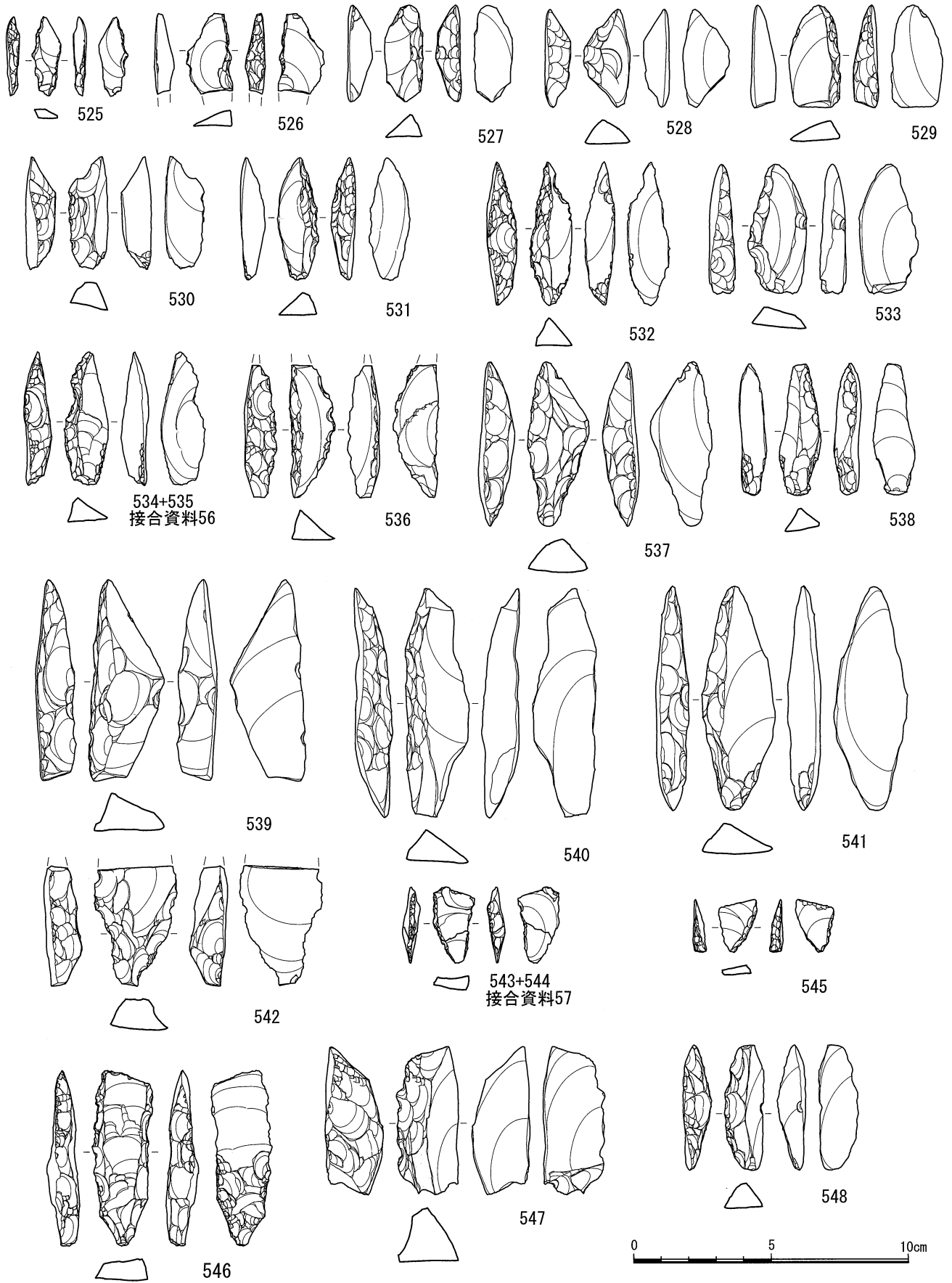


第 69 図 D 区出土旧石器遺物実測図 (1) (S=1/2)

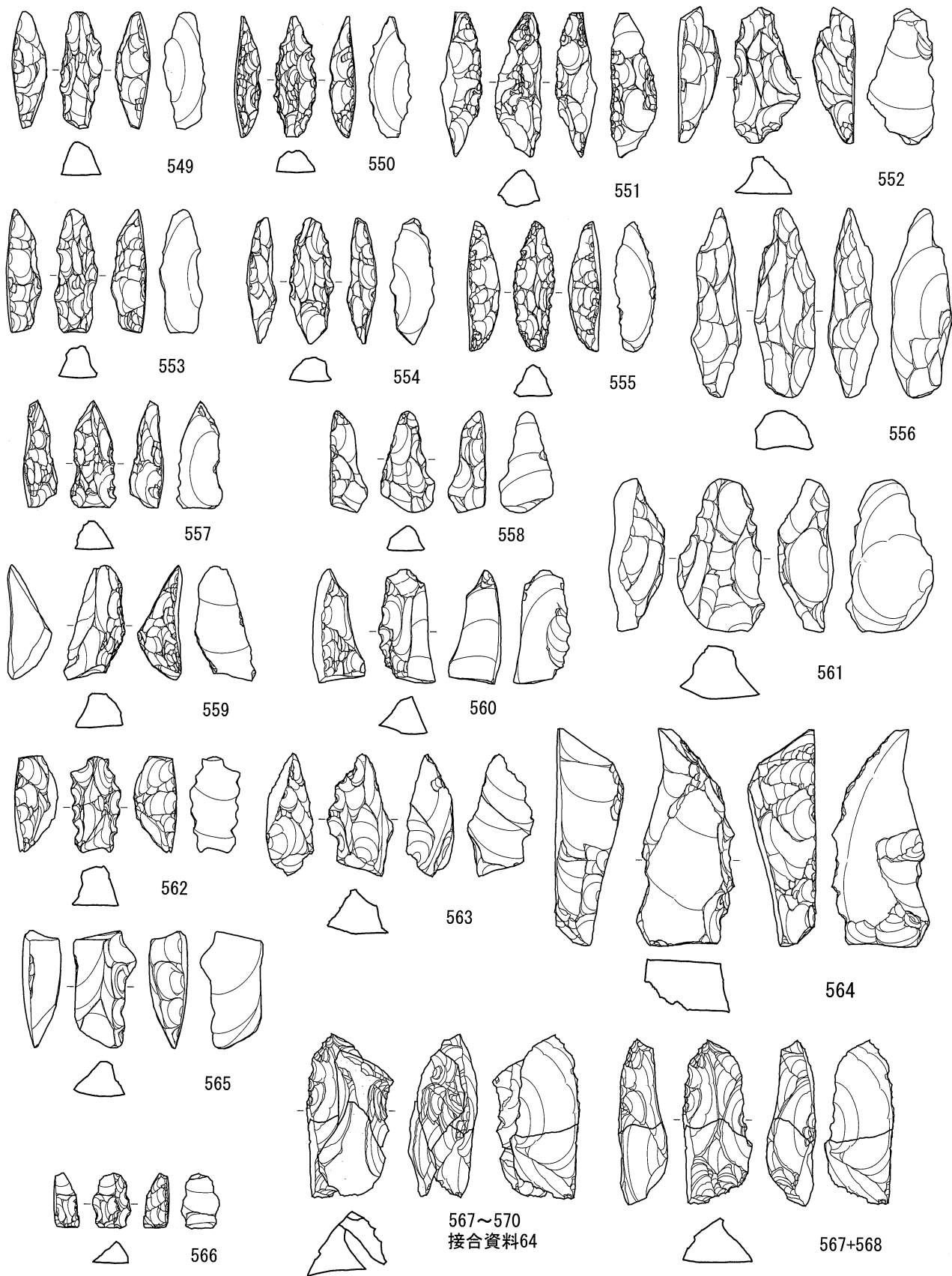
い剥片に分割され、各剥片からそれぞれ横長剥片の獲得をねらった資料である。分割礫は厚み約 5 cm の中で順次横長剥片剥離を進めるため、1 石核あたり剥片の生産量は 3~5 枚程度と決して多くない。得られた剥片の多くは最初の礫分割に伴う分割面を剥片末端に取り込んでおり、いわゆる有底剥片となる。

この他、いくつかの接合資料が出土した。643~646 (接合 68) は、亜角礫を分割したのから剥離する。礫面から直接剥片剥離。石の目に平行して縦長剥片剥離を企画したようであるが、石質があまり良質でなく剥片は不整である。647~662・571・572 (接合 74) は、 $9 \times 7 \times 5$  cm

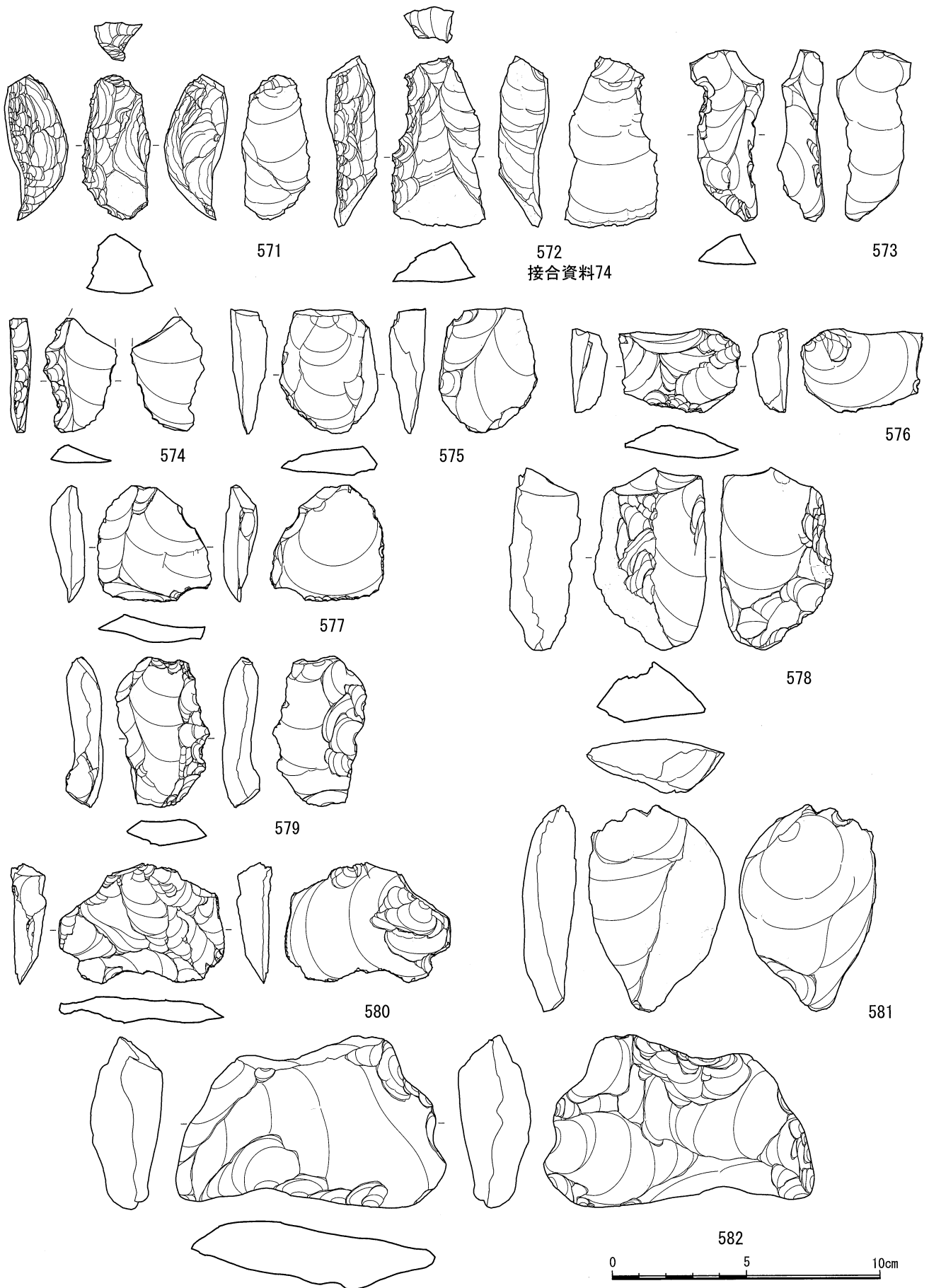
の亜円礫からランダムに剥片剥離している。石質は夾雑物の影響で決して良好ではなく、剥離された剥片も不定形かつ湾曲したものが大半である。そのような中、5 cm 四方の厚手の剥片から搔器あるいは角錐状石器の製作を企画している。本接合中では、搔器あるいは角錐状石器に 1 点の調整剥片の接合が確認されたのみであるが、他調整剥片は未接合にすぎないのであろう。674~676 (接合 61) は石核周縁より内に向かって不定形剥片を剥離する。677~681 (接合 62) は元の礫サイズが不詳であるものの、わずかに残る礫面のカーブからみて亜角礫である。剥片剥離も最終段階にある接合であり、いずれも石の目に沿った剥



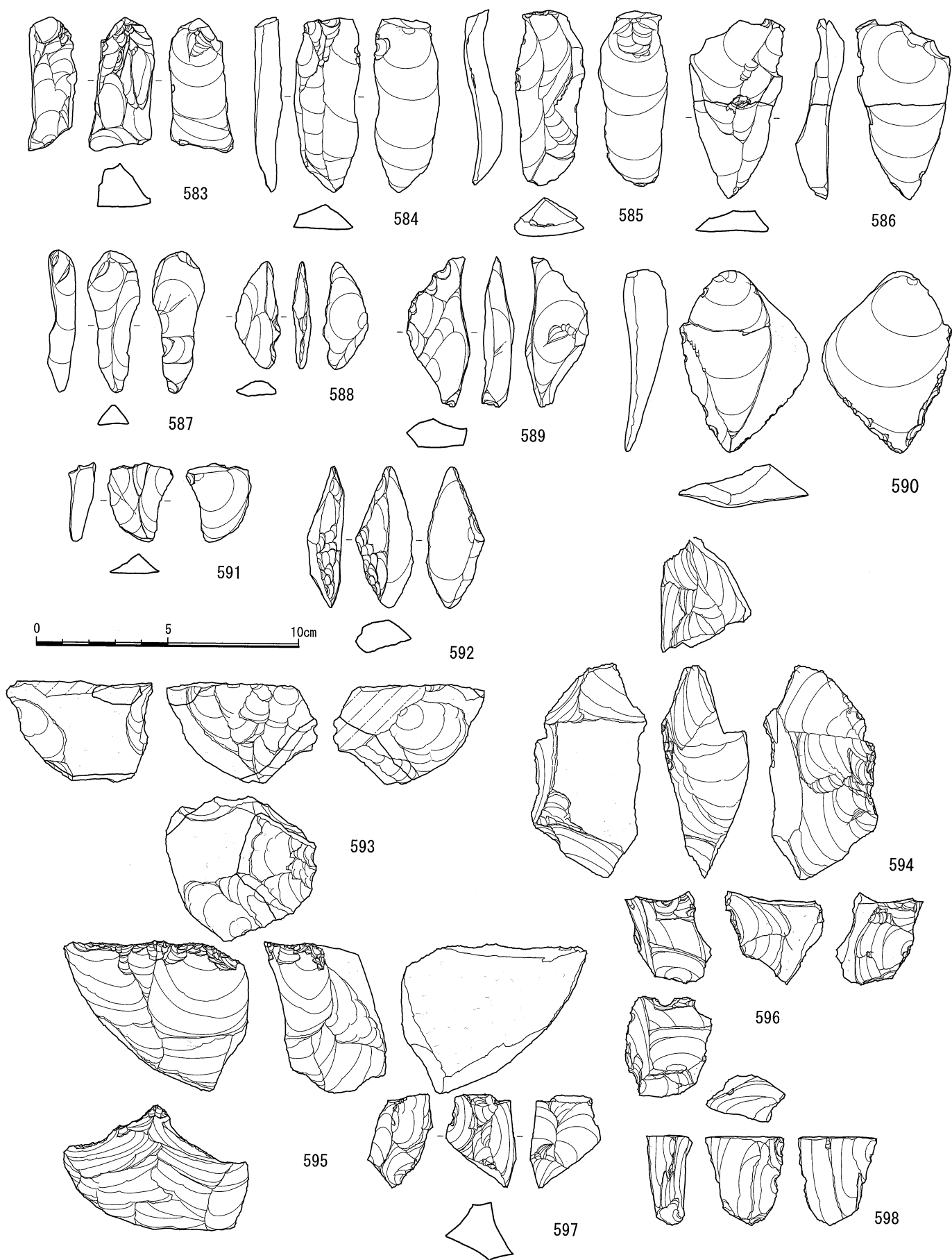
第70图 D区出土旧石器遗物实测图(2) (S=1/2)



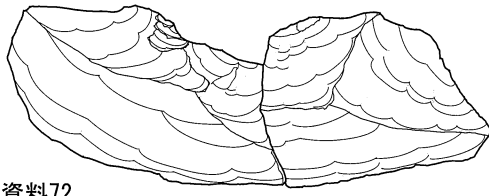
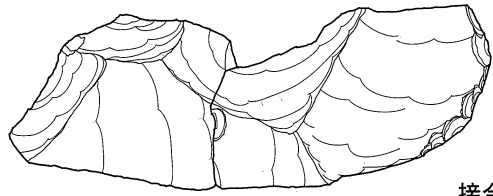
第 71 图 D 区出土旧石器遺物実測图 (3) (S=1/2)



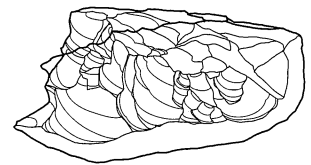
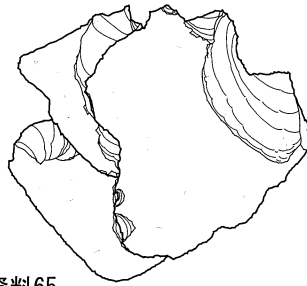
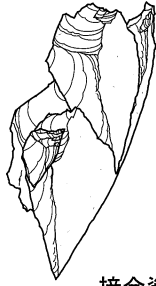
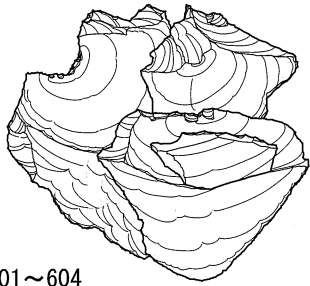
第72图 D区出土旧石器遗物实测图(4) (S=1/2)



第73图 D区出土旧石器遗物实测图(5) (S=1/2)

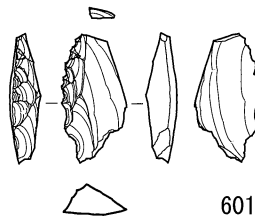
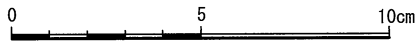


599+600 接合資料72

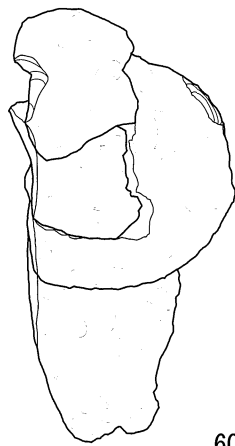
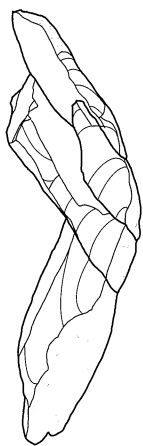


601~604

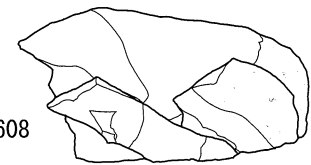
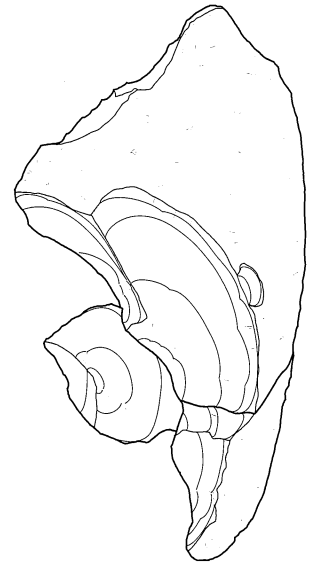
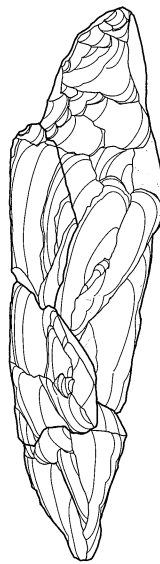
接合資料65



601

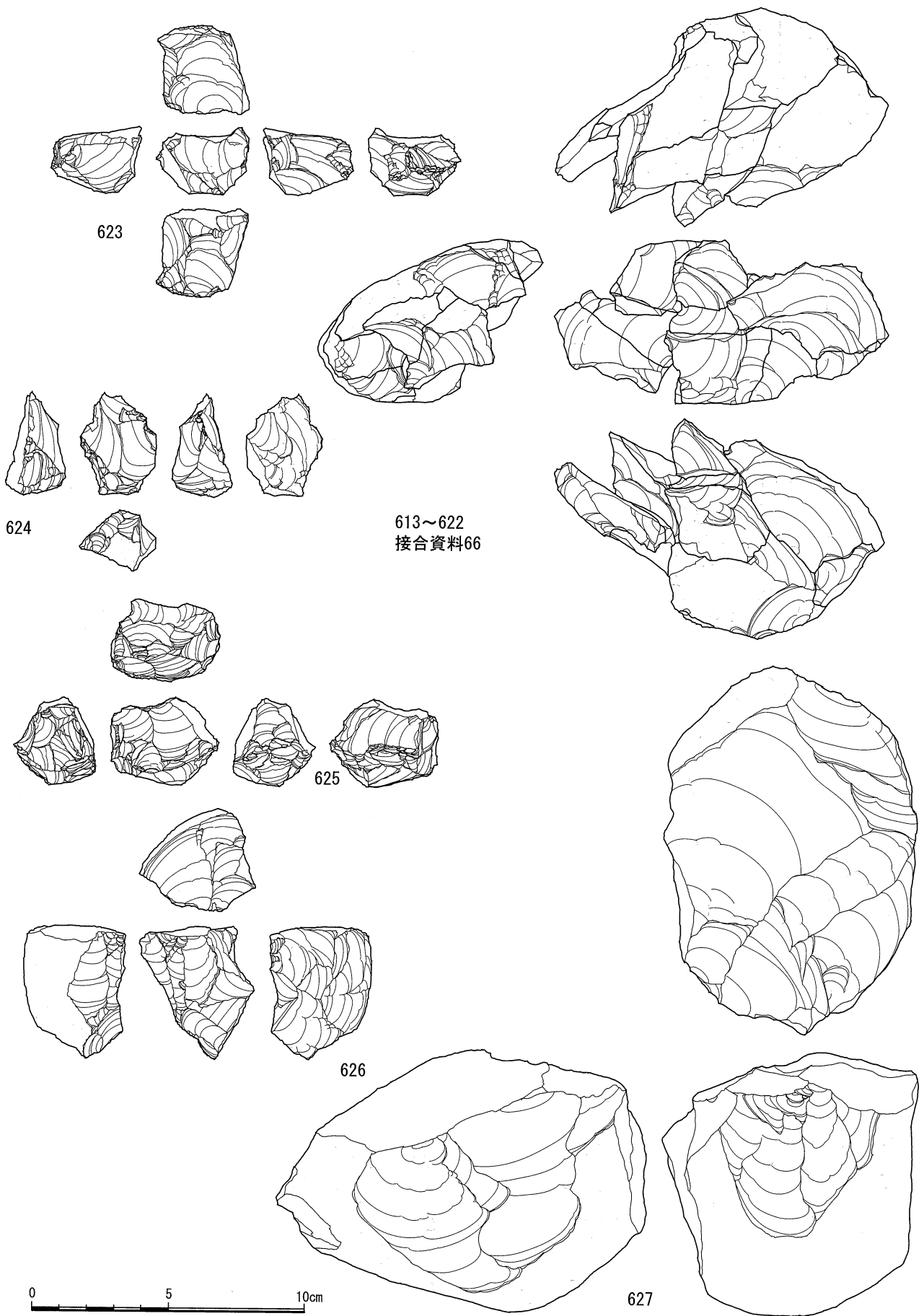


609~612  
接合資料71

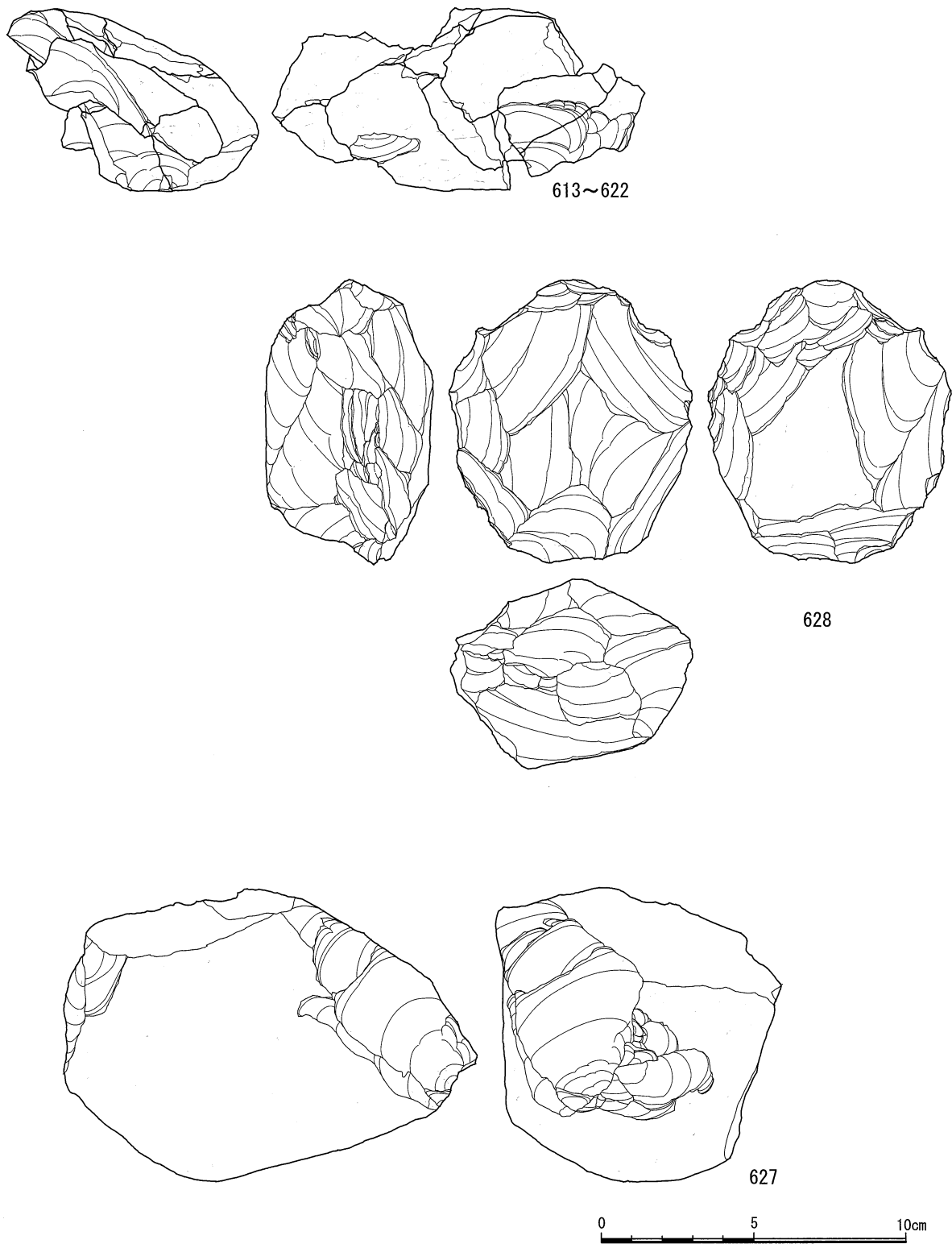


605~608  
接合資料73

第74图 D区出土旧石器遺物実測図(6) (S=1/2)

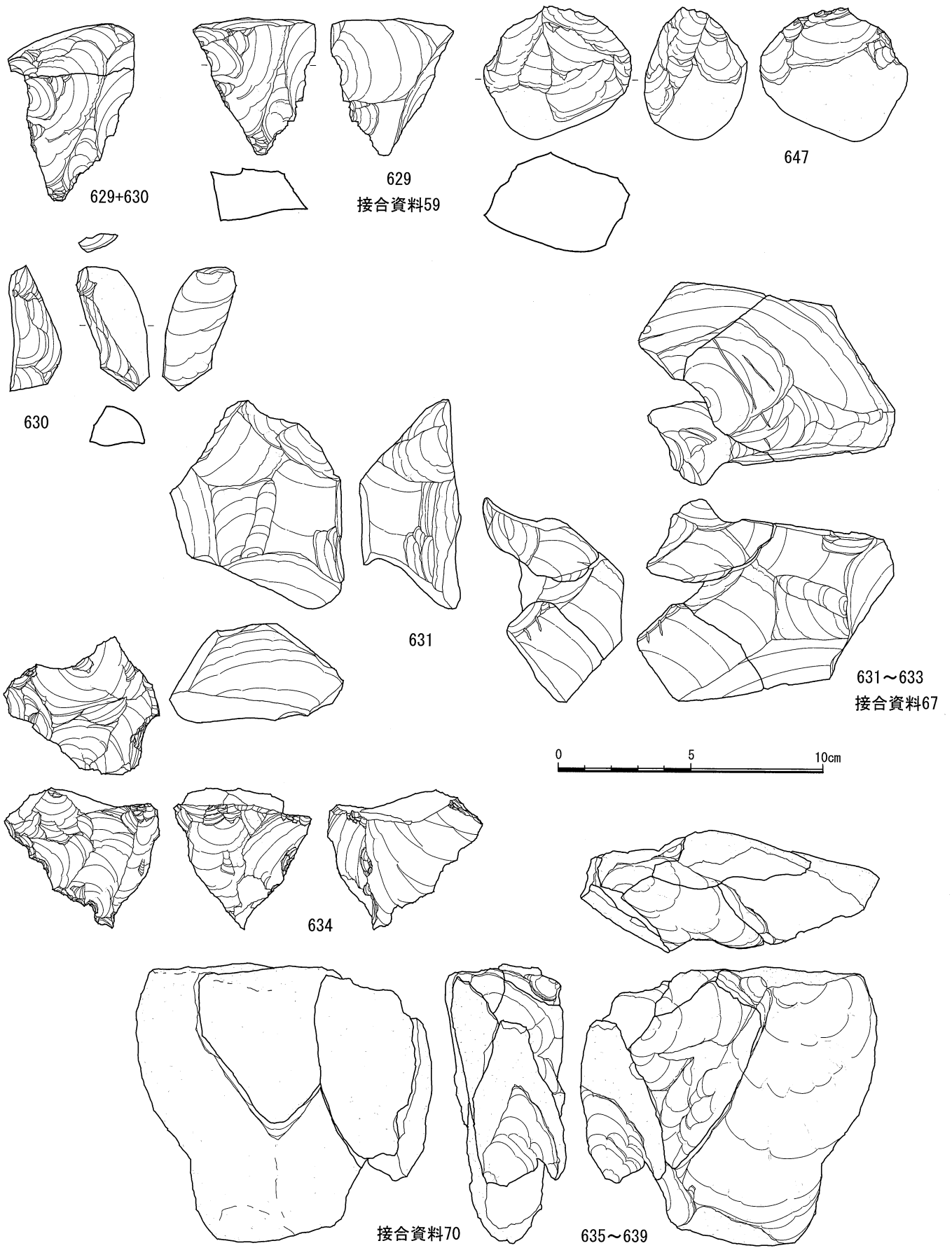


第75图 D区出土旧石器遺物実測図(7) (S=1/2)

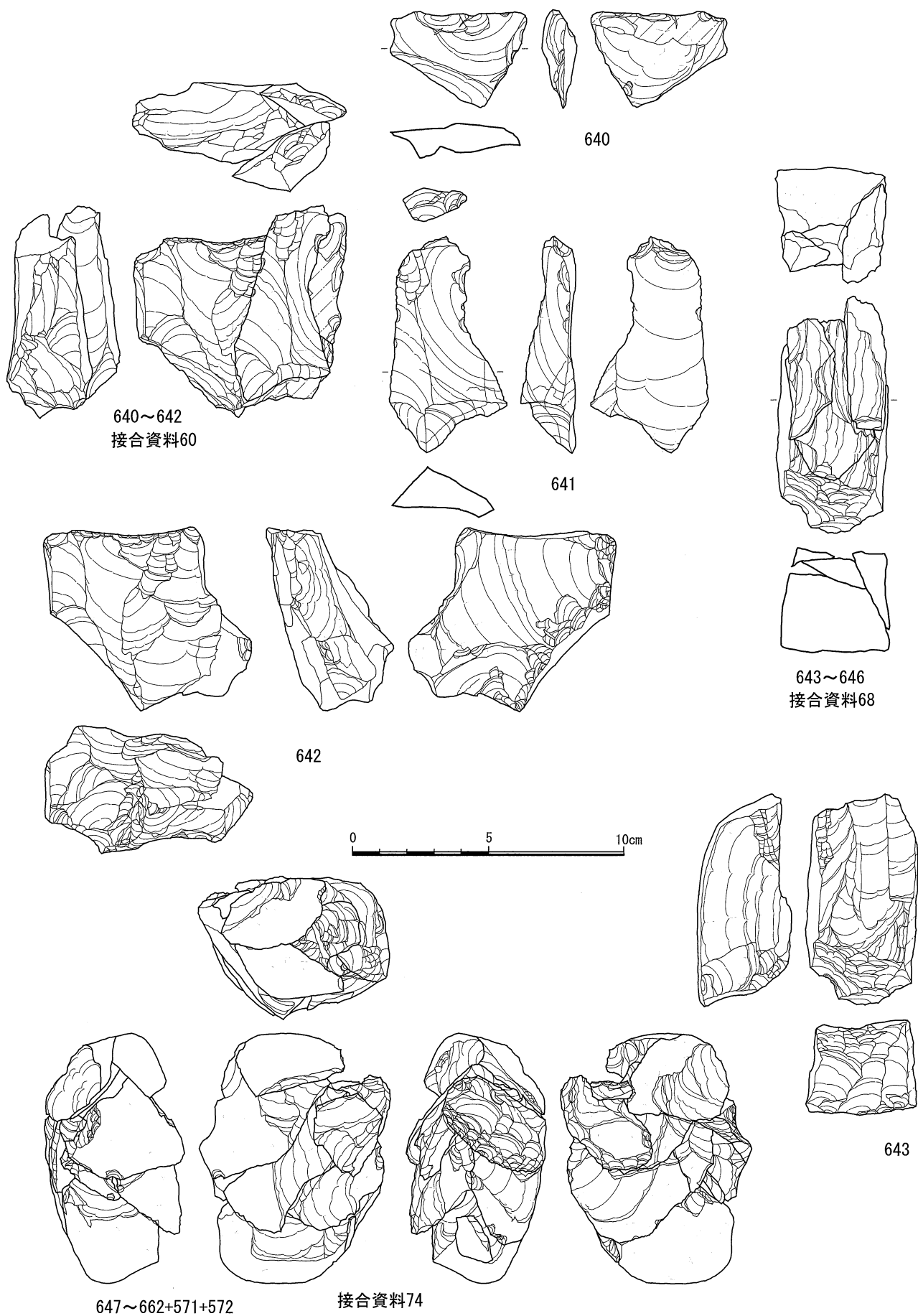


第76图 D区出土旧石器遺物実測図(8) (S=1/2)

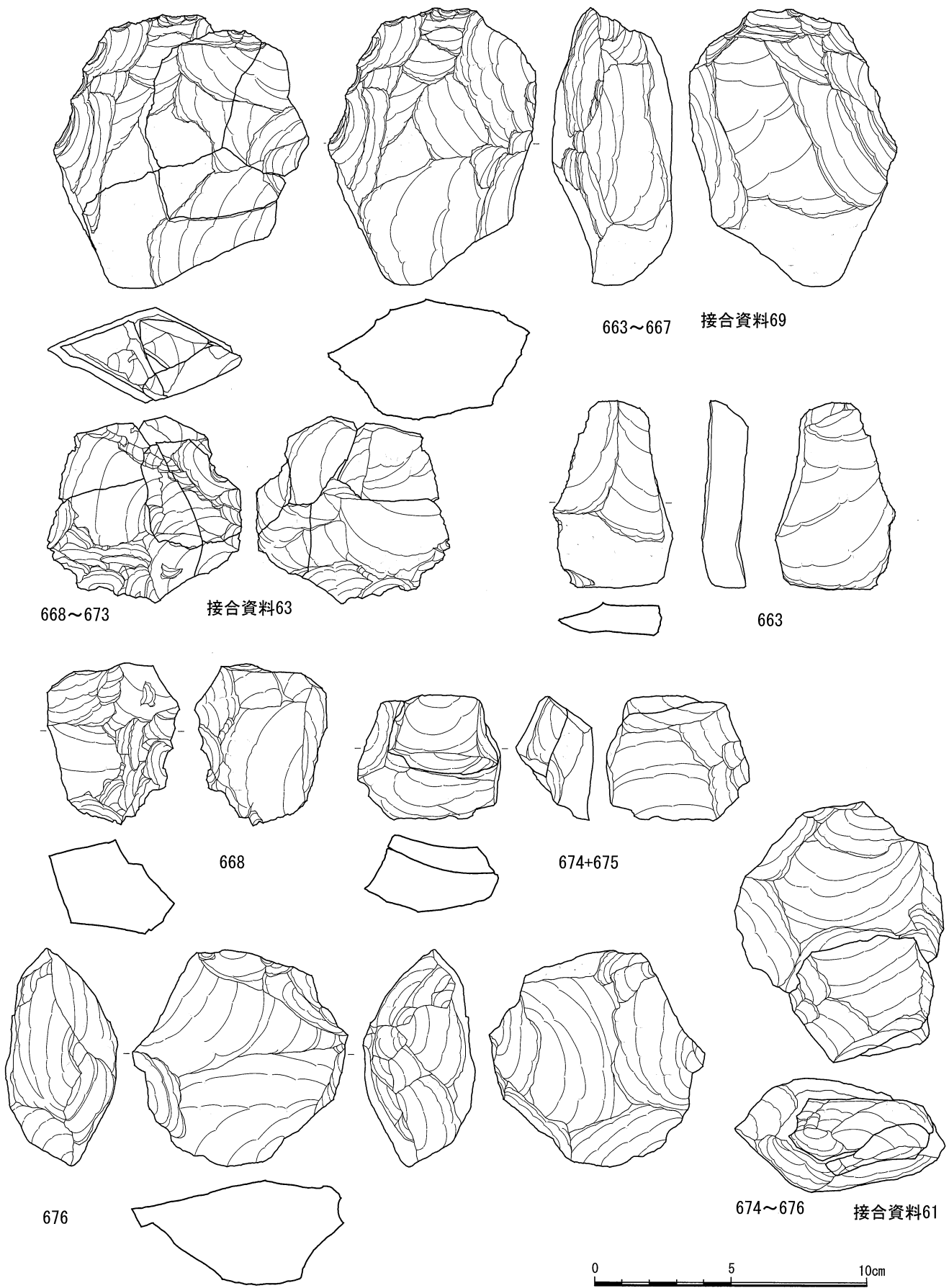




第77图 D区出土旧石器遗物实测图(9) (S=1/2)



第 78 图 D 区出土旧石器遺物実測図 (10) (S=1/2)



第79图 D区出土旧石器遺物実測図(11) (S=1/2)